

鏡とヒーローアカデミア

断罪ナオ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ヒロアカの世界にミラーワールドがあつたらとふと思いついたものです。

出久君強化にオリジナルキャラ、他作品の技が多数出てきます。

目次

プロローグ	1
喧嘩／同じ道を辿る者	7
ヘドロ事件／無個性の技	19
提案と力／鏡の世界	28
幕間 契約	44
雄英試験／合格発表	50
雄英入学／個性把握テスト	62
深める親交／謎のライダー	72
戦闘訓練	82
委員長決定／侵入者	95
USJ襲撃	106
ゲーム／ゾーンリザルト	116

怪人脳無	141
大人達の懸念／雄英体育祭に向けて	153
遭遇	167
情報交換	180
雄英体育祭 開幕	191
障害物競走	199
騎馬戦	208
願いを掛けたゲーム／今後の事	218
緑谷VS心操	232
物造VS八百万	246
麗日VS爆豪	254
幕間 最初の脱落者	263

プロローグ

『プロローグ』

脳に直接響くような金切り音。

それが聞こえ始めたのは何歳の頃だったかはもう覚えていない。

「はいはい」

四歳の時、個性がないと言われ期せずして自身の目指す道を立たれてしまった少年は、十二歳になった今日文字も光も建物も全てが真逆になっている不思議な世界へと迷い込んでいた。

「……………物音が聞こえる?」

少年は誰かいるのかと物音のする方に足を運ぶ、すると

「ヒッ……………」

自分の体の3倍程の巨体を持った蜘蛛のような怪物が、自分と同じくらいの背丈をした狼のような怪物に糸を絡め、今まさに捕食しようとしてる所だった。

(た、助けなきや)

そう思うも少年の身体は動かない。

直感、本能で分かる。

近づいたら食い殺される、と。

震える体、ふと狼と眼があつた。その眼はどこか助けを求めているようで

「やめろおとおおおとおお」

少年は思わず、飛び出していた。

それからの記憶はない。

「(ハハ)は………?」

意識を失った少年が気がつくとき、そこは何処かの部屋の一室。周りを見るとさつき助けようとした狼が礼儀正しく座っていた。

「よかつた、無事だったんだ」

少年は無事だった事に安堵し、こちらに気づいて近づいてきた狼を撫でる。撫でると言っても毛並みがある訳でも無いそれは何処か機械のようだった。

それでも少年のそれが狼は気に入ったのかこちらに身体を預けてくる。そんな傍から見るとほのぼのした雰囲気を作っていると

「驚いた。モンスターが人間に懐くなんてな」

いつの間にか少年の目の前に優しそうな雰囲気をした赤髪に赤眼で眼帯をした青年

が立っていた。

「えつと……貴方が……助けてくれたんですか？」

少年は驚きつつもそんな希望的観測で尋ねてみると青年は肯定する。その事に安堵しつつ、ホッと胸を撫で下ろす少年。

「安堵するのは早いぞ少年。君には二つの選択肢をとつてもらおうけどいいかな？」
「？」

少年はその質問に意味が分からないと言ったように首を傾かせる。

「一つはこのまま忘れて帰ること。二つはこの世界を知って戦うこと。前者は今までの自分に逆戻り、でも後者を選ぶと、君は誰も知らない、誰からも感謝されない、されど『英雄』に「やります!!」……いいのかい？」

「僕はずつと『英雄』に憧れています」

「そうか。なら、話そう、この世界の真実を。ならば鍛えよう君がこの世界で生きていくように。丁度君の体質、それに君には既にパートナーがいるようだしね」

それから青年はその世界、ミラーワールドの事とモンスターについて話し始めた。

少年は頭が良く回転も早い。

だからこそ話を聞き終えた少年は本質的にも本能敵にもそれが真実だと理解し、恐怖する。でも、自分が誰かのためになるのならと青年の手を取った。

「そう言えば自己紹介がまだだったね。僕は・神崎 風（かんざき ふう）・」

「僕は、緑谷 出久です」

「よろしく出久。その子の名前は決まってる?」

「はい。『ストライク・レオ』です」

青年が指して、少年が名付けた狼は嬉しそうに飛び跳ねた。

「それじゃ、厳しくなると思うけど、本当に誰からも知られないけれど明日からよろしく」

再度、少年が青年の手を取った。

「はい！3キロ追加!!」

「了解ですうううう」

緑谷出久が神崎 風と関わり始めて二年、彼は十五にも満たない少年がやるにはかなりハードな身体能力強化を行っていた。

「表の世界でもヒーロー目指してんだろ!!お前『鏡の世界で長期滞在できる体質』なだけで無個性なんだ、そんなんじゃないぎって時に死ぬぞ!!」

基礎体力強化はもちろんの事、腕立てや背筋等の筋力トレーニング、体幹トレーニング、身体ができ始めてからは戦闘訓練、回避技術、受け身。ピシバシと鍛えていく。

「はい、そこはこの公式使う！空気椅子崩スナ！」

「は、はいい！！！」

挙句勉強の強化。アイテムの設計知識、物の使い方を叩き込んでいく。

「呼吸は大事にしろ。呼吸の乱れは意識の乱れ。今はレオの食事も俺が面倒見てやってるが、俺もそこまで暇じゃない」

「分かってます!!!」

学校の都合上休日と平日の夜となる風の特訓。

トレーニングや意識方法、かなりこと細かく教えてくれる彼の教えを漏らさないようにノートに纏めて行く出久。出久は風の指導を受けない時も必死に努力した。レオもまた自分の主になるであろう少年のために必死に戦い成長して行った。

そんな成果もあつてか彼の肉体は二年という短い歳月で中学生、高校生としても充分過ぎるくらい完成していた。

そして今日

「よし、出久。こいつを」

緑谷出久は神崎風より、狼マークの描かれたデッキのようなものを渡された。

「……………ありがとうございます」

出久はお礼を口にしてから直ぐ

「『ストライク・レオ』、僕と運命を共にしてくれる？」

デッキからあるカードを引き抜いて、愛狼へと尋ねる。ストライク・レオと呼ばれた狼は当たり前だと言わんばかりにそれを待つ。

「よろしくレオ」

そして緑谷出久はストライク・レオと契約し、何も描かれて居なかつたカードに狼のイラスト（AP5000）が浮かび上がり、デッキが銀色にコーティングされた。

「祝え！世界を超え表と裏を行き来する！知られる事の無き英雄!!その名も仮面ライダー……」

「デク」

「仮面ライダーデク、誕生の瞬間である!!!」

こうして中学2年にして少年は逃れられない戦いへと足を踏み入れた。

喧嘩／同じ道を辿る者

「身体作り始めたんだ」

「……………あつそ」

石ころみたいだと思つてた奴からの宣言。どうせ続かないと思つていたが日をまたぐ事に筋肉の付き片、体力が以前と変わつていて本気だとわかる。……………苛つく。

「ハアハア……………ハア…」

（本気の眼……………）

たまたま奴の姿が見えたからつけてみたら、汗だくになりながらも必死に身体を鍛えてる少年の姿が映る。しかもそれが無駄になつていない事を日に成長していく少年を見ていてわかる。苛つく。

「先生、放課後体育館借ります」

その日、偶然机に置いてあつた三冊のノート。少年はそれを苛立ち反面興味本位で開く。するとどうだろうか、効率的な筋肉の付け方から始まり、こんなサポートアイテムを作つたらどうだろう、拳句クラスメイトの個性があつたらどう使うかまでこと細かく記してあつた。

「……………これは」

その中には当然自分の事も書いてあった。それもほかとは違い何年も書き直されてきたのか何ページも。

『かつちゃんは僕の目標』

ページの最後にはそんな事が書いてあるもんだから、少年は更に苛ついた。その反面、心の何処かでノートの持ち主を認めていて尚苛つく。そんな折

「僕は……………普通科目指すよ」

ノートの持ち主がそんな事を言うものだから

「おいクソデク、ツラ貸せや」

少年はノートの持ち主、緑髪がトレンドマークの少年、緑谷出久に話しかけていた。

緑谷出久が仮面ライダーデクとして成った次の日、彼は幼なじみである少年に海浜公園へと呼び出されていた。

「えつと……………話って何？かつちゃ」

「戦え」

「へ？」

有無を言わず爆破を使って接近戦を仕掛けてくる彼に対して、慌てながらも

「避けるよなあ、テメーは!!」

「ま、ま、ま、ま、まって、ちよつとまって、なんで?」

しつかり避ける出久。

「ンなもの、テメーが鍛えてるからに決まってるんだろ?!!知ってたんだよ!!ずっと石ころだったためーが二年前からずっと汗水垂らして努力してた事をよお」

そんな出久に少年は攻撃の手を休めずに連続して爆破を仕掛けてくる。

「ずっと!俺の後ろ付いてきて!俺と同じもんに憧れて!!ずっと誰かを助けたいって思っちゃもうてめえがツツ!!何もしてなかったためえがツツ!!死にもぐるいで特訓してたの知ってるんだよ!!」

「なっつ?!」

出久は少年の言葉にあつちの事がバレたのかと危惧し、デカイ一撃を貰いそうになるが何とか避ける。そんな出久の懸念は外れていて。

「テメーのノート見たんだよ」

「へ?」

少年の口から思わぬ言葉が出て、気を抜いてしまう。が少年からの追撃はない。

「あそこに書かれたこと毎日やってんだろ?それにヒーローについて丁寧な分析に、穴が少ないサポートアイテムの開発設計図、俺はそこまでやってねえ、才にかまけてやる

うとすら思わなかった。正直すげえと思っちゃまった」

「なっ!?! かっちゃん!?!」

「戦えクソデク、テメエが凄いと思った俺がテメエを倒す。俺はテメエの先にいる。ずっとだ! ずっと俺はテメエの前に行く! そうすりゃ」

「いやその言葉は最後に聞くよ……それより本気で行くよ。かっちゃん」

そこから先はお互い本気の喧嘩。

速攻で間合いを詰め右の大振りからの爆破、それを久は後方に跳躍して躲す。

「おせえ」

爆破を利用し距離を詰める少年、その勢いを利用してようとタイミングを見計らって右の回し蹴りを繰り出す久だったが、見て反応した少年が爆破を使って回避した上で、空中で回転するように蹴りを繰り出し、それをすんでのところで回避する。

「つぶな」

「よけんな、デク!!」

回避しては攻め、攻めては守る。

お互いに一切の気を抜けない攻防。

いつしか二人は笑っていて。

「ハア……………ハア……………」

「ハア……………ハア……………」

三十分くらいたった頃だろうか二人の息が荒くなり、呼吸が整わない。それでも攻撃の手は休めない。

「終わりだクソデク!!」

少年の気力も集中力も個性も全部出し尽くした最後の一撃は

「右…!!……………もらっ……………なっ」

「あめえー!」

右の大振りをフェイントにした、左の爆破。これにより、出久の体制が崩され、そのまま少年の右ストレートが出久の顔面へと炸裂した。

「ハア……………ハア……………クソツ……………俺の勝ちだ」

「ハア……………ハア……………僕の負け……………か」

勝負を終え、爆破の影響か一部更地と化した海浜公園で大の字になる二人。最初に倒れたのは出久。

よってこの勝負は出久の負けだった。

「俺は強エだろ」

「……………うん」

それでも二人の表情は晴れている。

「…………胸糞悪いが俺はテメーの目標なんだろう？」

「…………うん。君の強さはオールマイトと同じくらい僕にとって鮮烈なんだ」

「だったら…………普通科なんて甘えた事言つてねえで…………せめて、俺と同じ土俵に立つくらいしやがれ。俺は常にその上を行く」

本気でやり合つて、やり合つたからこそ少年は緑谷出久の事を認めた。認めたからこそ許せなかった。

「…………でも」

「じゃねエよ。クソデク。テメーは俺に食らいついてきた、個性云々じゃねえ、食らいついてきた…………いや、食らいつけていた。そいつはテメーが努力したからだろ？ だったら自分を下げんなや」

ヒーローを目指しながら、ヒーロー科を諦め普通科を目指す。そんな彼を許せなかった。

「…………かつちゃん、でも僕…………わっ」

それでも卑屈になる彼の首元を、いつの間にか立ち上がっていた少年が掴む。

「こんだけ言われて何が不満だつてんだア!? アア!」

「僕は…………弱いし」

「ンなもんたりめエだろ。俺はお前より強い」

「だったら」

「けどな、覚えてないかもしれないが、もしかしたら、テメエ昔俺に手エ指し伸ばしただろ。弱い癖に」

それは幼少期の記憶。

「あの時のお前をふとした瞬間、思い出してイラつくんだよ。何でこいつは無力なのに助けようとすんだってな」

とある川で転んだ時手を差し出された記憶。

「……それは、だって」

それは出久にも覚えがあった。

「助けたいと思っちまうんだろ？」

「……うん。考えるより先に助けたって」

「だったら、一度しか言わねえから耳の穴かっぽっじってよく聞け」

少年は出久の事を立たせ、向かい合う。そんな彼の真剣な眼差しを出久はしつかりと見つめた。

「俺が、爆豪勝己が勝って救う!! テメーが、緑谷出久が救って勝つ!! テメーが勝てないやつは俺が倒す!! いいな!!」

「……うん。うん。なら……なら僕は君の救えない所を救う。それだけは譲れない!」

「それでいい。それとデク、今のお前は『頑張れ』って感じのデクだ」

こうして緑谷出久は少年、爆豪勝己と同じ道を歩み始めた。そしてそんなタイミングを見計らったかのように

「……つていい風に閉めてるとこ悪いんだけど、ちよつといいかな？中学生二人」
青年が現れた。

「誰だデメエ」

「………師、師匠」

「君達さあ、あんだだけ爆破………法律破つといてお咎めなしって思ってる？」

「あつ」

青年の言葉にサアーっと血の気の引く二人。

「なんて、爆破の音は私の個性『防音にする』って個性で消しといたから知られることはないから安心して」

「………マジですか師匠」

「おいデク、誰だこいつ」

「この人は神崎 風さん。僕を鍛えてくれている人、です」

「マジか」

爆豪はその事に驚いた。だってそうだろう、どう見ても高校生くらいにしか。

「見えないって思ったらノすぞ?」

「すいませんっした!!」

土下座。とても綺麗な土下座。気がつくど横で出久も土下座していた。

「そうかしこまらなくいいよ。とはいえ私もヒーローの端くれ、君達のこれ見て見ぬ振りつてのはちよつと駄目な気がするかな」

爆豪の横でガタガタ震える出久。その様子から神崎風の恐ろしさが垣間見えた爆豪。

「なので、許可貰ってるからここら一带をきっちり片付けようか。ヒーローはほら、奉仕活動も仕事って言うじゃん?」

「ここら一带を!?!」

「期間はそうだな。雄英高校試験まで、綺麗な海を再生させよう。二人でいいね?」

当然、二人に拒否権は無いのだが

「は、はい!!」

「お、おう!!」

それを分かっているのか否かわからないが元氣よく返事する二人。

「元氣があつてよろしい。とそうそう、爆豪君、君と出久が戦つてるところ見て、鍛え方のコツとかいろいろまとめたいからよかつたら参考にしな。つても君の場合その天才的な感覚とか反射神経で必要無くなるとは思うけどね」

それから爆豪に一冊のノートを手渡す風。爆豪は貰ったノートを見て戦慄した。一冊びつしり書いてあったことも驚きだがそれ以上にさらっと読んだだけでもわかる出久のノートに負けず劣らずの内容の濃さ。今はもとより今後必要な技術まで事細かに記してあった。

「あ、あざっす」

爆豪は素直に礼を言っていた。

「それから出久。お前、必殺技作つとけ。もう少しで出来んだろ？あれ。それと××が近いしアイツが腹空かせてる。初陣してこい。いいな？」

「は、はい!!」

「お、おい、何処に」

こうして足早とどこかへ掛けていく出久。そんな背中を戸惑い見つめている爆豪の肩に手を置いて風は話しかける。

「爆豪勝己君。出久の事頼むよ。あの子はこれから更に過酷な道を進む事になるだろうから。そんな時友の存在は大事なのさ」

優しい声色。爆豪はそれが無個性でヒーローになる事の険しさを指しているだろうと思ひ、素直に頷き

「わあつてる」

そう宣言した。

ちなみに

「()にXがある」

出久は走り去ったあと直ぐ、鏡に向かってデッキをかざす。するとベルトのようなのが腰に現れ、出久は変身ポーズをとって

「変身ッ」

デッキをベルトに差し込み、仮面ライダーデクとなりミラーワールドへと入り

「こいつか」

緑色でかつ人形の蜘蛛型のミラーワールドモンスターと対峙する。蜘蛛型ミラーワールドモンスターは出久と相対するや否や鉤爪で攻撃してくる。出久はその鉤爪を最小限の動きでかわしながら、カードを抜き取って右腕にあるレオの頭部を象った感じの形状をしている召喚機『ストラバイザー』にカードを差し込む。

『SWORD VENT』

すると機械音と共にレオが現れ、レオの尻尾を模したような日本刀をだして駆け抜ける。蜘蛛型モンスターは鉤爪が交わされた事から距離を取り今度は口元から日本刀を奪うように糸を吐くも、絡め取られる前に全て切り裂かれる。たじろぐ蜘蛛型モンス

ターは逃走を図るように今度は螺旋状に糸を吐くが

「行くよ、レオ!!」

『STRIKE VENT』

出久の取り出した二枚目のカードを読み込まれ『ウルフシユート』の口が開く。打ち込むように出久が右腕を出すと開いた口から青い炎が放出され、吐き出された蜘蛛の糸諸共蜘蛛型モンスターを焼き払う。炎の中衰弱した蜘蛛型モンスターに対して出久は距離を詰め、左手に装備し直していた日本刀でその腹部を貫き、蜘蛛型モンスターは爆散した。

「レオー!」

倒したモンスターから現れた光の玉をレオに食べさせ、出久は見事初勝利を収めたのだった。

へドロ事件／無個性の技

『へドロ事件／無個性の技』

出久と爆豪が和解してから数ヶ月、彼らは三年生となり、神崎より出された依頼は八割方終わっていて、海浜公園は昔からして見れば有り得ないくらい綺麗になっていた。

「また×。師匠が人手足りてないって本格化してる気がするな」

そんなある日、緑谷出久はいつものようにミラーワールドへ趣き、モンスターを倒し表の世界に戻って来てそんな事を呟くと

「Mサイズの隠れ蓑」

「……………なっ」

へドロの敵が突然現れ、出久の事を取り込もうとする。咄嗟の事、モンスターとの死闘で疲れていた出久は対応が遅れてしまい「やばっ」と身体をこわばらせる。

「貰った」

へドロが出久に飛びかかろうとした次の瞬間、突然マンホールが勢いよく飛び上がり、煙の中からよく知る人物が現れた。

「もう大丈夫だ少年!!私が出来た!」

煙の中から現れたのは出久が最も憧れ、尊敬するヒーロー、オールマイトであった。

「TEXAS SMASH!!」

ヘドロはオールマイトの拳によって出久を捉える前に吹き飛ばされる。

「オールマイト?」

突然憧れの人物が目の前に現れ、しかも自分を助けてくれたことに出久は驚きのあまり硬直する。

「ああ、少年。少し待っててくれないか? 話はあとでするから」

オールマイトはそう言うのと空のペットボトルにヘドロ敵を詰め始める。

(液体の個性。バラバラに散らばらせたのなら何かに入れるのが効率的。か)

出久は冷静にオールマイトの行動を分析し、改めてオールマイトを尊敬する。

「さて、待たせて済まない少年。そして巻き込んですまなかったね。いやー、私もオフだから慣れない土地に浮かれてしまったね。HHHHHHHH!」

「つて事はこの敵はオールマイトが追っていたのですね」

「そうだよ……つともう行かないと」

「ちよ、ちよつとだけ待ってください、まだ聞きたいことが」

「すまない、ヒーローは時間との戦いなのです。それじゃ今後とも応援よろしくね!」

そう言うつて凄まじい勢いで飛んでいくオールマイト。オールマイトがみる街がみる

みる小さくなっていく。

しかし、オールマイトは左足に違和感を感じた。まさかと思つて左足をみるとそこにはさつき助けた少年が必死にしがみついていた。

「コラコラ!! 熱狂が過ぎるぞ!?!」

「それでも僕は」

(マジか少年)

そう思いながら、確かにこの速度で万が一少年が振り落とされたら不味いと思い、近くの降りられそうなビルを探す。そこでオールマイトは自身の口から血が出ているのに気がついた。

「んじゃこれで私はこれで少年」

「ま、待つてください。無個性でもヒーローになれますか!?!」

「No. 待たな……(ん? 無個性?) ……あつ」

突然オールマイトの身体から白い煙が出たかと思うと、オールマイトの体が萎み骸骨のような人がいた。

「……………それが本来の姿なんですね」

出久はいつも映像で笑つてるオールマイトの本来の姿がこちらだと理解する。

「この際だから言うけど肯定だ。間違つても帰つてネットに書き込むなんてしないでく

れよ」

それからオールマイトは自身のシャツを捲る。そこには息を呑むような手術の跡があった。

「五年前……敵の襲撃で負った傷だ。呼吸器半壊、胃袋全摘、今や私のヒーローとしての活動時間は1日約三時間程なのさ」

「五年前……って事は“個性を奪う者”ですか
「なっ?!?!」

出久の返答に今度はオールマイトが驚愕した。それもそのはずで、その名を知っているものは極少数しか居ないのだから。

「君は知っているのか?!」

「僕が、と言うより師匠がですかね。と言っても知ってるのは個性を奪う個性があって、今のオールマイトと戦えばお互い無事じゃすまなかったって事くらいでそれ以上は何も」

「………そ、そうか。私の事もそうだがそいつの事も」

「分かっています」

真つ直ぐな出久の言葉に安堵するオールマイト。それから一泊置いて、オールマイトは言葉を発する。

「……………さっきの質問だったね。分かっているとは思うけど『プロはいつだって命懸け』。個性が無くても成り立つなんてとてもじゃ無いが口に出来ない」

「そう……………ですよ。お時間取らせてしまい、すみませんでした」

「いや構わないよ。ところで君は無個性なのかい？」

「くりと頷く出久。」

「そうか……………それは険しい道を選んだね」

「分かっています。でもそれでも僕はヒーローになります。険しくても厳しくても命懸けでも、それでも『助けたい』って思っちゃうから。それに同じ道をいく友達がいるから」
「(少年、強い目をしているな)……………そうか。さっき厳しいこと言ったけど一つ『君のその夢を応援する』。これは私個人の意見だ。覚えておくといい」

「……………はいッ」

「それと一つ、機会があればその師匠って人に合わせてもらえないか？ 奴について知っているのなら話が聞きたい」

「分かりました、伝えておきます」

こうしてオールマイトは出久の前から姿を消した。消したと言うより超高速で移動したのだが、見えないのだから変わらない。

オールマイトから激励とサインを貰った出久は、

「さて、もう少しラストスパートだから頑張らないとな」

ほとんど八割型綺麗になった海浜公園の事を思い出しながら帰路へと付いていた。

「な、なんだ!?(………つてあれはさっきの)」

するといきなり絶え間なく爆発音が聞こえてきたと思つて音のした方向を振り向くと、先程オールマイトが倒したはずの敵が見知った顔の少年を飲み込もうとしていたのが見えた。

「(あいつは多分打撃技が通じない)でもだからつて」

氣づけば出久は走り出していた。

「バカヤロー!止まれ!!」

途中対応に追われていたヒーローが出久を止めようとするが、それよりも早く出久はヘドロの目の前へと現れる。

(来んな!!クソデク!!)

(大丈夫!かつちゃんアレやるから合わせて!!)

(そういう事じゃ………チツ)

ヘドロに捕まり以前もがく爆豪は目の前に現れた見知った顔の少年と短くアイコンタクトをとった。爆豪が出久のやると思われることを察したと分かった瞬間、

「すうすうすうすう」

出久は思いっきり息を吸いこみ肺に空気を溜め込んで

「爆ツツツツ!!!」

思いっきり大声を出した。

それによつて音による衝撃波が起きる。

「ハア……………ハア……………」

これぞ、緑谷出久が鍛え上げた肺を生かした声帯砲である。

『っ、なっ』

ヘドロとはいえ会話が成立する以上聴覚があるヘドロは爆弾のような大声を受けて案の定、硬直した。そしてその隙を見逃す爆豪ではない。すぐさま自分の出せる最大火力をぶっぱなし、ヘドロからの拘束を緩まり、爆豪はヘドロから自力で脱出した。そうして駆けつけるのはもちろん

「ドアホ!!インターバル置いてねエだろうが!!それに音が分散するわ!こんな所で使うな!!!」

「(っ)……………め、ん」

出久の元。

爆豪は声帯砲で動けない出久の元へと駆けつけその首元を掴んで爆破を使い距離を

取った。ヘドロは硬直が解けたのか怒り混じりに爆豪達へと距離を詰める。クソつと苛立つ爆豪だが、そんな彼らの元に

「全く無茶する少年だ。だが、安心しろ、私が来た」

平和の象徴、オールマイトが笑って駆けつけて

「……まったく、君の方がよっぽど私よりヒーローじゃあないか……！君を応援すると
言っておいて……己が実践しないなんて!!」

『プロはいつだって命懸け!!』

DETROIT SMASH!!」

空をも割りうる一撃がヘドロの敵を吹き飛ばした。

「スゲー！オールマイト！」

「拳ひとつで天気を変えやがった！」

「オールマイト！」「オールマイト！」「オールマイト！」

ヘドロを倒し市民の称賛を受けたオールマイトは、横目で友に肩を借りる緑髪の少年
を見つっていた。

ヘドロを倒し事後処理に入るヒーロー達。そんな中、爆豪は称賛を、出久は注意を受
けていた。

「全く、君が無理をする必要は無かったんだ」
そんな折、

「そうだとそれに個性の無断使用は」

とあるヒーローが口にしたその言葉に、爆豪がとても静かに切れて

「おい。そいつは無個性だ」

明らかに怒気を含んだ声でそういった。無個性と言う言葉に周囲は驚いたがそんな事よりも怒気を纏った爆豪に恐怖を覚えた。

「それにだ、テメエらは人の事いえねえよ。無個性のこいつが前に出たのにテメエらは仲良しこよしの譲り合いだア？ぎげんな。ヒーローなんだろう？手が出しにくい状況？それを何とかすんのがヒーローだろ」

じりじりと詰め寄る爆豪はヒーロー達を無視して未だ少し声がからつとなっている出久の元に行き、その手を掴んで

「行くぞ、デク」

その場所を後にした。

「あ、の。ヘドロなら、消化器と、か使え。たと思ひ、ます」

去り際爆豪をフオローするかのようになんか眩きを残して、少年達は今度こそその場を後にした。

提案と力／鏡の世界

『提案と力／鏡の世界』

ヘドロ事件に巻き込まれた帰り道。

「つたく、〃声帯砲〃 まだ完成しきってねエんだろ？無理すんなクソデク」

「ごめん……かつちゃん」

「謝んなや」

喉の調子が戻り、ちゃんと話が出来るようになった出久は爆豪と共に帰路についていた。その姿はまるで兄弟のようで、そんな二人の前に。

「私が来たア!!」

オールマイトが路地裏から現れた。

「オールマイトオ!?!」

突然現れたオールマイトに驚く二人。

いつもの姿のオールマイトだったが直ぐに時間が来てしまい、先程の骸骨のような姿となる。

「だ、誰だ」

「……オールマイトだよ、かつちゃん」

「マ、マジカ……いや、そうだよな、柱とはいえオールマイトも人だもん……」

爆豪は最初は驚いたものの、直ぐに目の前の真実を受け入れる爆豪。

「そ、それで何をしに来てくださったのでしょうか」

「一つは君の使った音についてかな。君は無個性と言っていた、にも関わらずあれだけの音を発した。他のヒーロー達に似てて悪いが、私も少し懐疑的にならざる終えない」
他のヒーローが気になっていた出久の技。それにはオールマイトもまた気になっていたという事で聞きに来たということらしい。

「えっと……あれはですね。『声帯砲』って名付けた技です。無個性の僕が鍛え上げた肺活量を使って大声を出す事で攻撃する技です」

「鍛え上げた肺活量……?」

「どういう事かと、首を傾げるオールマイト。そんな様子を見てか爆豪がフオーを入れる。」

「まあこいつ、その気になれば一ヶ月息止めてられるからな」

「ナツ!?!」

「それとこいつが無個性なのはとあるヒーローに見てもらって確認済みで、病院でも無個性と出てます」

「マジかよ……………」

一ヶ月息をしなくても生きられるだけの肺活量を鍛えたと言う事実には驚愕するオールマイト。しかもそれを攻撃へと転用してしまう。…………それは最早個性の領域だった。

「えつと…………それで二つ目の話ってなんででしょうか？」

「え、ああ……………礼と訂正、それと提案、かな」

「それ俺もいていいーのか？」

「居てよ、かつちゃん」

オールマイトの雰囲気から何となくその場を離れようとした爆豪だったが出久にその手をガシツと掴まれる。

「まあ……………いいだろう」

爆豪は観念したと言った感じでその場に残り、オールマイトも暫し考えたあといいだろうと答えを出した。

「さて、まずは礼を言おう。君がいなければ、君の事を聞いていなければ私は口先だけの人間になる所だったありがとう」

「そんな事は」

「それにそつちの少年も悪かったね、私がミスをしたばかりに」

「気にしてねえ」

恐縮する出久と特に何でもないと言った感じの出久。

「次は訂正だ、君は無個性でありながら鍛え友と同じ道を行こうとしている。それだけじゃない、あの場の誰もが誰かがやってくれると思っていた所に君は飛び出した。友を助けるために。その時の君は『考えるより先に体が動いていた』んじゃないか？」

「はい」「いつもの事だろ」

「だからこそ私は君に……いや友のために怒れる君にも……君たちにこう言わねばならない」

・君達はヒーローになれる・

それはオールライトから少年達に向けられた言葉。

「……………はい」

「……………つたりめーだ。俺達はあんたを超えるヒーローになる」

出久は泣きながら笑顔を作り、爆豪は当たり前と言わんばかりに拳を突き出す。

「そして少年、君なら私の力を受け継ぐ事に値する」

「……………へ？」

「つたく、なんて顔してるんだ少年。私の提案はこれからだよ」

そう言って、出久と爆豪に自身の力について話し始めるオールライト。全てを聞き終

えた少年達。

「少年、君さえ良ければこの力を継いでほしい」

「……………どうするよ、クソデク」

神妙な空気が流れる。

それから出久は意を決したように

「……………ごめんなさい、オールマイト。それにかつちゃん。その力は受け取れません」
オールマイトのその申し出を断った。爆豪はその選択に納得はしてないが何も言わない。

「……………理由を聞かせて貰おうか」

「それは……………」

「それは僕から話させて貰おうかな？八代目ワンフォーオール、八木くん」

出久が言い難くしていると、出久と爆豪の見知った顔が現れる。

「……………師匠」「……………風さん」

「さてと、初めましてかな平和の象徴。僕は神崎 風。ヒーロー名は『フウ』で通ってる。

聞いている通り出久の師匠さ」

「君が」

「さて、いろいろ積もる話もあると思うけどとりあえず、明日朝八時に海浜公園に集

合つて事にして一旦解散しない？チラツと寄つてきたけど出久君も爆豪君も親が心配してたよ？」

風に言われて二人はハツとなる。それからあれだけ騒ぎを起こしたのだから当然かと納得する。それはオールマイトもまた同じで、親御さんの心配を察したのか

「聞きたいことが沢山ある。言いたいことも沢山ある。だから私と君は彼等より少し早く会おうじゃないか」

「まあそうなるよね」

「ではすまないが少年達、また明日海浜公園で会おう」

音速が如く消えていった。オールマイトの姿を見届けた後、二人に帰るように促す風。

「デク、説明、してもらつかな？」

「分かつてるよ。かつちゃんには言おうって決めてた事だし」

それに流されたのか流せれていないのか、二人は帰路に付き、
「いづくうううううううう」

「ご、ごめんお母さん」

「まったく、心配かけんじやないよ」

「わりい」

爆豪宅にてテレビを見たのか駆けつけていた出久の母と爆豪の母から思いっきり抱きしめられていたのであった。

その日の夜、今日は爆豪の部屋で泊まることになった出久は爆豪から睨まれていた。「で、お前ナンで断った?」

内容は当然オールナイトからの提案を断った事にある。当然だ、またとないチャンスを自分から棒に振ったんだ。爆豪からしてみたら同じ道を目指す者として今回断ったのは非常に遺憾だ。

そんな気持ちを表すような怒っているようで悔しんでいるような爆豪の声。そんな彼の様子に意を決して、出久は狼のマークの描かれたデツキを爆豪に見せた。

「かつちゃん、今から言うことは他言無用でお願いしますよ。これはそれだけ危険なもので、世界は危険な境界にいるんだから」

普段は見せない出久の表情。それだけじゃない、普段絶対出すことの無い声色、その事に爆豪はただならぬものを感じて、真面目に出久の話を聞き始めた。

「とまあこれが僕が断った理由」

「……………嘘……………だろ。てめえンなもん抱えてやがったのか……………それにそれはて

めえがやらなきゃいけない事なのかよ……………?」

出久からミラーワールドの全てを聞き終えた爆豪はただただ、放心した。

「ごめん……………かつちゃん」

そんな爆豪に対して、

「……………でももう決めた事だから……………それに一度契約した以上僕はもう……………戻れないから」

絞り出すように出久は言った。

「……………おいクソデク」

「……………?」

「……………俺にもやらせろ」

「話聞いてた!?!危険過ぎるんだよ!?!」

「ああ!?!てめえ一人戦わせて知らないうちに死なれるよかまじだろうが!!それとも何か?てめえ俺が簡単にやられちまうほど弱いつてか!?!大きく出たなあ……………デク」

「そ、そんなこと言っていないじゃないか!?!」

それから二人の口喧嘩は爆豪の母親がうるさいと怒鳴りに来るまで続いた。　　それから

「師匠がいいって言ったら……………」

「それでいい」

出久は妥協案を出してそれを爆豪は受け入れた。最も彼は既に出久と共に戦うことを選択したのだが。

早朝、少年達とあう約束をしていたオールマイトはその時間よりも早く、海浜公園に来ていた。

「やあ平和の象徴。いや、この場合八木君と呼んだ方がいいのかな？」

「なんでも構わん」

「さて、いろいろ話そうと思うけどまずは僕が受け継ぐ力と奪う力について知ってる理由だね」

早速本題に入る神崎。

「と言っても僕もそこまで詳しい訳じゃない。四年前ある事情があつて、奪う者と戦った事があつてその時に自身の力と対になる力があるって聞いただけさ」

「……戦ったのか？ 奴と……いやそれ以前に生きていたというのか」

「本当に偶然だったけどね。まさかあんなボロボロの人間が生きてるとか思わないじゃないか。とまあ命からがら逃げて今に至るって事」

「……………なるほど。その様子を見るに嘘は言つてなさそうだな」

少なくとも現状オールマイトには神崎が嘘を言っていないように見えたためそれ以上は聞かず、あの状態で生きていた宿敵に対して静かに拳を握った。

「さて、次は緑谷出久君が君のその力を受け取れない理由についてだね」

それから神崎が次の話を始める。

「ああ」

「僕が奪う者から逃げられた理由でもあるんだけど、その前にオールマイト、君はミラーワールドという世界を知っているかい？」

「ミラーワールド……？」

聞きなれない言葉に首を傾げるオールマイト。

「ミラーワールド。正確に言うとな鏡の中の世界」

「鏡の……中？」

それから風はかつて十五人の人間の手によって行われたバトルファイトについて語り出す。話を聞き終えて

「……………なるほど、でも何故今そんな話……………まさか」

察しのいいオールマイトは神崎の言おうとしていたことに気づく。

「そう、バトルファイトが終わってもミラーワールドは残ってた。触れてみ」

そう言っただッキを差し出す風。おずおずとオールマイトはデッキに触れて鏡を確

認しようとする、急に耳鳴りがする。

「さて、少し行こうか」

急な耳鳴りで頭を抑えているオールマイトの手を引いて鏡の中へと入っていく風。オールマイトは引きづられるがまま、鏡の中へと行く、するとどうだろうか先程の話を裏付けるように反転した世界の中にモンスターを食るモンスタアの姿があった。

「戻るよ」

そう言つて再度鏡を通る風。オールマイトは突然の非現実に驚きながらも、実際に体験した事も踏まえてミラーワールドを認識した。

「先程そのデッキを触つて実際鏡の中の世界入つたのだからその言葉は信じよう」

「助かるよ」

「しかし中学生に背負わせる物じゃないだろ、これは」

認識して、憤る。当たり前だろう。自身の手が届かない場所で自身よりも幼き少年が誰にも知られず戦つていると聞かされたのだ、平和の象徴である彼が憤らない訳がない。

「それは分かっていたさ。僕も初めは止めようと思った。でもね、決めたのは彼だし、僕にとつて彼の『ミラーワールドで一ヶ月過ごしても消えない』体質は捨てがたい才能なんだよ。普通の人間はあっちに行くのとどれだけ凄い個性を持つても九分五十五秒し

かいられないからさ」

「それでも」

「それにだよオールマイト。この戦いは途中下車出来ない。モンスターと契約してしまつた以上はね。それは君にも変えられない事だ！」

「ツツ」

「とはいえミラーワールド自体は以前に比べて縮小してる。モンスターも人を襲うには歪みを通らなきゃ行けないし、滞在時間は短い」

話を聞いてなおぎり、と歯噛みするオールマイト。

「……………それなら尚更、彼に力を託した方がいいのではないか？」

「そういう訳にもいかないのさ」

「……………？」

「変身してる際個性が使えないつてのもあるんだけど、それ以上に……………これは彼から聞いた話なんだけども、彼はどうやら昔に……………」

それでも、それならせめて力があつた方がいいと提案したオールマイトだったが、風はそれは無理だと言う。その理由を聞いたオールマイトは

「マジか……………」

そう言葉を漏らしたのだった。

朝八時。

指定された時間に海浜公園へと足を運ぶ二人。ほとんど綺麗になった公園で二人はオールマイトと風の姿を見つめる。

「おはよう、少年達」

「おはようございます」

オールマイトは少年達の姿を見つけたのか挨拶をする。挨拶をされた二人は当然返す。それから軽く雑談をして、いよいよ本題へと入った。

「事情は聞いたよ緑谷少年。まさかそんな事情があつたなんてね」

「……………はい。すみません」

「いや、いいさ。でも忘れないでくれ、君は私の力を託す候補に入れて置くことをな」

H A H A H Aと笑顔を作るオールマイト。その内心では（すまない）と申し訳ない気持ちでいっぱいだが表に出さない。

そんな二人を横目で見ながら

「おい、デクから全部聞いた。ミラーワールドの事についても。俺にもやらせろ」

爆豪は風に提案をする。

「話したのか）……………そうか。個人的に君まで背負う必要は無いと思うんだが……………それにこいつは危険すぎる」

その提案に風は少し考えるより素振りを見せつつ

「ハナから承知の上だ。それにプロはいつでも命懸けなんだろう？それが早くなっただけだ」

即答した爆豪。その瞳には覚悟が伺える。それを見て風は観念したという感じでデツキを取り出した。

「……………分かった。こいつが君のデツキだ。契約モンスターは……………出久と共に探すといい。それとくれぐれも忘れるな？変身中は個性使えないし、出久の体質が特殊なだけで君は……………（一時間……………才があるとは思っていたが体質も……………マジか）変身しても一時間しかあつちに存在出来ない」

「デクから聞いてたより長いのはなんでだ？」

「ああ、それは君の体質の問題。たまにいるんだよ出久程じゃないにしてもあつちに長く居座れる人。俺はちよつと特殊なモンスターと契約してるからそういうのがわかるのさ」

「そうかよ」

「それと、あつちの戦いはこつちとは違う本当に命懸けの戦いになる。負けは消滅、それ

を忘れないでくれ」

話を終え風からデツキを渡される爆豪。

「ああ……」

爆豪はそれを渡された意味を噛み締めながら、デツキをポケットにしまった。

その日からオールマイトは風と共にの二人の特訓に付き合った。二人の指導もあつてかめきめき力をつける二人。その時折に

「ラストスパートだ出久ッ。やるぞ」

「かつちゃんか右なら僕は左!!」

出久と爆豪が競走しながらせせせせと海浜公園に放置されていた残り二割のゴミを片付けていき、ついに

「つしやあ終わったア!」

「終わったね、かつちゃん!」

海浜公園は昔の綺麗な海岸へと蘇っていた。

「お疲れさん二人共」

海浜公園を蘇らせ横になる二人。そんな少年達に風が飲み物の差し入れをいれる。それを素直に受け取る二人。

「で、どうだ?」

「どうって?」「何がだ?」

「試験まで残り七カ月、受かるか?」

「つたりめーだ」↑全国模試一位

「まあそこそこ」↑全国模試五位

「ならいい。それと、これから僕はなかなか出てこれない、前にも話したが僕は元々あつちの住人だ。最近歪みも増えている気がするし少し気がかりな事があるからな」

「そう………ですか」「せーせーするわ」

不安そうな顔をする出久、少しばかり心配を表に出す爆豪。風はその二人の少年の頭にそっと手を置いて

「頑張れよ、『緑谷出久』『爆豪勝己』」

「……………ツはい!」「……………ツケ」

エールを送ったのだった。

幕間 契約

爆豪勝己がカードデッキを受け取ってから三日後、彼は仮面ライダーデクと共にブランク体のままミラーワールドへと足を運んでいた。

「かつちゃん、絶対見てるだけだからね!!?」

というのも体育館にて特訓をした帰り道、突然耳鳴りがして、モンスターが人を襲おうとしたところを爆豪が爆破して押し返し、仮面ライダーとなつて鏡の中へと入っていったのである。

「はあっ」

敵のミラーワールドモンスターは青いカミキリムシ型のモンスター。手持ちのブーメランを武器を投げたり、距離を詰められると近接に使用したりして戦っていた。

「……………つえーな」

敵の動きを予測し最小限の動きでかわす出久を見てぼそりと呟く。彼が強くなつていることに喜ぶ半面、モンスターと契約してないがために戦う事の出来ない悔しさを噛み締めていた。

「……で決め……………くっ、二体追加ッ」

優勢に傾いていた出久だったが、同系統のモンスター二体が現れ、状況が悪化する。出久が少し焦ったのが分かる。

(くそっ、俺にも何か)

爆豪もまた焦る。焦って周囲を見渡すと、青い虎のようなモンスターと灰色のサイのようなモンスターが戦っている所が目映る。

(あいつらも……戦ってんのか?)

勝負は虎モンスターの優勢。発達した爪を器用に使って戦う一方でサイのモンスターは疲弊していた。だが、その目のような所から戦意は消えない、どこるか立ち向かっていく。

「おい!!デク!!ちよつと待ってる!!」

「んな!?かっちゃん!!?クソっこいつら!」

爆豪は出久に声をかけてすぐ走った。見れば虎のモンスターがサイのモンスターに止めを刺そうとしている。そして虎のモンスターがその爪を振り下ろした瞬間

「……………つてえな!くそっ!!」

虎のモンスターとサイのモンスターの間に爆豪が割って入っていた。

「おいこそモンスター!!テメエもつと強くなるか!?アア!?!」

爆豪は虎のモンスターを蹴り飛ばしサイのモンスターに問う。サイのモンスターは

意味がわからないと言った素振りを見せるが、何を思ったのか爆豪の隣に立つ。

「ならいい、契約だ！」

爆豪はそのサイのモンスターにカードをかざし、吸い込まれるようにカードへと刻まれるサイのモンスター。

「おいてめえ、さっきまでと同じに思うなよ!!」

こうして、爆豪勝己はミラーワールドモンスター『メタルガラス』と契約し

?? 『祝え！己を磨き、ただひたすらに強さを追い求め、先へ先へと進むライダー！仮面ライダートラスト！誕生の瞬間である』

「いくぞー！ライノ!!」

仮面ライダーガイとして虎のモンスターに戦いを仕掛ける。先に動いたのは虎のモンスター、突然姿を変え、先程戦っていた敵を吸収した者を敵と定め様子見と言わんばかりにその両爪で攻撃してくるが、

「甘エ」

爆豪は振り下ろされた両爪をがっちり掴み、頭突きを食らわせ、怯ませた所に蹴りをいれる。その隙に

『STRIKE VENT』

左手の甲に付けられたガントレットにカードを差し込み、メタルガラスを頭部を型

どったガントレットを呼び出し右手に装備する。それから畳み掛けるように虎のモンスターからの攻撃を見切って攻撃し、弱った所に

『FINAL VENT』

先に呼び出したメタルホーンを装着しつつ突進、メタルガラスの肩に水平に乗り、その勢いのまま突撃し敵を粉碎する、『ヘビープレッシャー』にて敵を撃破した。

「……………勝った」

「流石だね。かつちゃん」

「つたりめーだ」

その様子を三体のモンスターを撃破し、見守っていた出久は

(ごめん……………もう後戻り出来ないよね……………おめでどう)

誰にも言えない心中を漏らしたのだった。

ミラーワールドから帰ってきてから出久は、初陣を綺麗にきめた爆豪と

「これからよろしくね。かつちゃん」

「ああ。死ぬんじゃないぞ」

固く握手をしたのだった。

『ちよつとした解説』

・仮面ライダーデク

変身者：緑谷 出久

個性：無し

契約モンスター：ストライク・レオ（AP5000）

召喚機：ストラバイザー

狼をイメージした銀色の仮面ライダー（姿のイメージはガオシルバー）。契約モンス

ターは緑谷出久が過去に助けた狼型モンスター。

右腕についたガントレットを召喚機としている。

・仮面ライダー トラスト

変身者：爆豪勝己

個性：爆破

契約モンスター：メタルグラス（AP 4000）

召喚機：メタルバイザー

メタルグラスによって与えられる頑強な装甲とライダー中屈指のパワーを活かし、接

近戦・肉弾戦を得意とする仮面ライダー。爆豪と相性抜群。

仮面ライダー龍騎で出演したガイと違い肩ではなく左手の甲にガントレットを装着

しており、そこが召喚機となっている。

・仮面ライダー

変身者：神崎 風???

個性：一定の空間を防音にする

契約モンスター：???

召喚機：???

雄英試験／合格発表

あれから七ヶ月という時間はあつという間に過ぎ去っていき、今は三月。出久は雄英高校の校門前に立っていた。

「落ちたら殺すぞ。クソデク」

「……分かつてる」

爆豪はそう言って試験会場に入っていく。出久も後を追うように向かおうとするが、緊張からか不意に身体のバランスを崩しそうになる。

「つと、と?」

するとどうだろうか、バランスを崩しそうな身体が浮遊感に包まれる。

「大丈夫?」

「え、あ、はい」

声をかけられて、その方向を向くと一人の少女が申し訳無さそうにしているのが分かった。

「私の個性。ごめんね?勝手に。でも転んじやったら縁起悪いもんね」

「いや、ありがとう!おかげで緊張が解れたよ」

「なら良かった！頑張ろうね!!」

「うん！」

出久は自分を助けてくれた少女とそんな挨拶を交わし、気を引き締めて試験会場に向かった。

して、試験会場。

雄英の試験は倍率が300を有に超えている。そして試験会場には雄英に入るため多くの受験生が受けに来ていた。既に筆記試験が終わり、次は実技試験。実技試験の説明はプロヒーローであるプレゼント・マイクが行うのか、マイクを持ってたっている。

「今日は俺のライブへようこそ！エヴィバデイセイヘイ！」

そんなプレゼント・マイクがいきなりそんなことを言い出すものだから、当然反応は薄い。

「こいつあシヴィ——!!!受験生のリスナー！実技試験の概要をサクツとプレゼンするぜ!!アユーレデイ!?!」

同じく全く薄い反応。

「入試要項通り！リスナーにはこの後！10分間の『模擬市街地演習』を行ってもらおうぜ！持ち込みは自由！プレゼン後は各自指定の演習会場に向かってくれよな！O・K？」

「案の定、同校協力はさせねえってことだな」

「だね。気を引き締めない」と

「演習場には“仮想敵”を三種、多数配置してありそれぞれ『攻略難易度』に応じてポイントを設けてある！各々なりの“個性”で“仮想敵”を行・動・不・能にし、ポイントを稼ぐのが君達リスナーの目的だ！もちろん、他人への攻撃等アンチヒーローな行為はご法度だぜ!!」

プレゼント・マイクの事を簡単に言うつまり力で敵をねじ伏せろってことだ。

「質問よろしいでしょうか？」

「なんだね、メガネ君！」

「プリントには四種の敵が記載されています！誤記載であれば日本最高峰の恥ずべき痴態！我々受験者は規範となるヒーローのご指導を求めてこの場に座しているのです！」
(確かにいい指摘だし気になるだろうけど……それは多分誤りじゃない)

メガネ男子の質問に違うと思う出久。

「オーケーオーケー。受験番号7111くん。ナイスなお便りサンキューな！四種目の敵はOP！そいつはいわばお・邪・魔・虫！各会場に一体！所狭しと大暴れするよう『ギミック』よ！戦わず逃げることをお勧めするぜ！」

「ありがとうございしました！失礼いたしました！」

出久の想像通り、誤表記では無かった。

「俺からは以上だ!!最後にリスナーへ我が校の“校訓”をプレゼントしよう。

かの英雄ナポレオンⅡポナパルドは言った!『真の英雄とは、人生の不幸を乗り越えていく者!!』

更に向こうへ!“ P i u s U l t r a !!”

それではよい受験を!!」

こうしてプレゼント・マイクによる実技試験の説明は幕を閉じた。

↳ 試験会場C

「……広い」

出久は金のかかった企画に驚きを隠せないながらも周囲を見渡す。すると、先程出久の事を助けてくれた少女の姿が見えたのでお礼を言いに行こうとすると

「その女子は精神統一をしているのではないか?」

「あつ……それもそうか。さつき助けてもらったからお礼言おうと思っただけけど邪魔しちゃ悪いよね。止めてくれてありがとう。メガネの人」

「あ、えつと。こちらこそすまない。そういう理由だったんだな。……お礼なら終わってから言うといいさ。今は目の前の試験に集中だ」

「そうだね。頑張ろう」

少女にお礼を言いそびれたもののメガネの男子と言葉を交わし、出久も精神統一を図る。

「ハイ、スタート！」

突然の言葉に一同啞然とする。

「どうしたあ!?! 実践じゃカウントなんざねえんだよ!! 走れ走れえ!! 賽は投げられてんぞ!?!」

その言葉を境に受験生は一斉に走り出した。

「……爆発音。音の大きさからしてみんなが走り出した方向には密集しているだろうけど密集してるだけで周りの対応が遅くなる。敵が不透明なら尚更だ。つだからちよつと遠回りしよう」

出久は少し遅れながらも耳に手を当て音を聞きとり冷静に分析し、他の受験者達が走った方向から外れた方向に走っていく。

(……………右。声帯砲はまだ使わないほうがいいから)

『標的補足、ぶつ殺す』

「すうううう、はっ!!」

標的に補足された出久は敵のレーザーをかわした後即座に間合いを詰め、敵の機械に對して手のひらをドンつとぶち当てる。するとどうだろうか、出久を追っていた機械が

動きを止めた。

「つてレーザーの方向に人は……………いない。良かった」

こんな感じで出久は敵を倒しつつ周囲に目を向けながら、時折怪我してる人に風習った何もなくても出来る応急処置を施して行ったのだった。

〃残り三分〃

そうしてプレゼント・マイクが三分を切つたとお知らせしたその瞬間、今までとは大きさも何もかもが違うロボットが現れた。

「……………マジか雄英（これが邪魔魔虫、マジか雄英）」

圧倒的脅威。それを目の前にした人間は正直で、敵がいるのにも関わらず逃げ出す受験者達。しかし出久は違うものを見据えていた。

「これだけの被害、巻き込まれた人がいるはず。助けないと。けどみんなパニックで冷静さを欠いている……………」

「あいたあ」

どうすればみんなを冷静にさせられるか考え始めた出久だったが、敵の近くで倒れている少女を見て、一目散に飛び出していった。

（……………あれは！）

足を止めてその様子を見たのは先程言葉を交わしたメガネの男子。

「大丈夫!? 動ける!」

そんな事を知らない出久は少女に手を伸ばしていた。危険を冒してまで自分に手を伸ばしてくれた出久に少女は疑問を浮かべる。

「君は……なんで」

「ヒーローは助け合いでしょ?……つてやば!?!瓦礫…誰か!瓦礫退けるの手伝って下さい!」

出久はそう呼びかけるが、その呼びかけに応じるものはいない。

(試験……試験か。試験という言葉で自分のやらなきや行けない事をやってなかったんだな僕は)

……一人を除いて。

「その瓦礫をどければいいんだな?」

「君は………なんで」

「それは後にしないか?それより俺の個性はエンジン。怪我人をいち早く運べるし、誰よりも早く駆けつけられる」

そう言つて出久と二人で少女の足を挟んでいた瓦礫を退け、少女を背負うメガネの男子。

「さあ、君も」

「いや。僕はアレを引きつける。君はその子を頼む！」

「おい待て!!」

メガネの男子の制止を聞かずに走り出した出久は、巨大な敵の足元へとたどり着いて「すうううう、爆ツツツツッ」

まず地面に向かって声帯砲をぶっぱなした。すると巨大な敵の足元の地面にヒビが入る。出久はそれを見届ける前に、とても器用に巨大な敵の側面を走っていきそいつの頭上からビルに飛びそのビルから敵の頭上に戻って、思いつきり息を吸いこんで

「爆ツツツツツツツッ」

先程より大きな音で巨大な敵を頭から地面に押し付けた。

「……………しまった」

こうして音の衝撃により高度がさらに高くなった出久だったが立て続けに声帯砲を使ったため身体の自由が効かなくなる。

「えいっ!!」

高高度から垂直に落下して死を悟った出久だったが、地面にあたる寸前で頬を誰かに叩かれる。そこから感じたのは浮遊感。

「解、除」

「全く冷や冷やしたぞ。動け……………無さそうだな」

見ると少女がメガネの男子に背負われて出久の元へと来ていた。出久は何が起こったのかを理解して

「あ、り、がどう」

お礼をいった。それから動けない出久と怪我をしている少女を比較的無事なメガネの男子が背負った所で試合終了の合図が鳴り響いた。

「……………凄いな。この二人」

試験の様子をモニターにてチェックしている雄英教師。彼らの目はとある二人の生徒に向けられていた。

「まずこの爆豪勝己という少年。爆破という恵まれた才能を充分使いこなして誰よりも多く敵を撃破。それどころか爆破で勢いづけて怪我人の元へと速攻で向かい救助。挙句周囲の被害にまで目を配ってる」

一人目は爆豪勝己。

「次にこの緑谷出久という少年は皆が飛び出していった中冷静に周囲に気を配り、敵を倒しつつ怪我をした人の手当てまでこなした。というか最後のあれ、彼本当に無個性なのか？音を操る個性じゃないのか？」

二人目の緑谷出久。

「各々が資料を見て出久が無個性ではないと議論が持ち上がるが、それはないと思うぜ」

それを否定したのは先程司会を務めていたヒーロー、プレゼント・マイクだった。

「俺の見立てじゃ、その緑谷出久という少年、個性ではなく喉で音を出してる」

「……………つまり？」

「桁外れた肺活量と鍛えられた喉があつてこそその技だ。俺や他の人間が個性使わず同じ事やるとまず喉が潰れる。それに見てて思ったんだが、最初の音の後少し動きが鈍つてた。それから最後音を出した後身体が硬直してた。って事は音の調整は出来るがリスクは高いって事だ」

音を使う個性故の見解。

説得力はあつたため、誰も何も言わない。

「とりあえずこの二人は申し分ないとして……………」

こうして一旦緑谷出久の話題は置いておいて、他の合格者を決めていく雄英教師陣であつた。

試験から一週間後、出久は家で結果が来るのを今か今かと待っていた。

「出久……………少しは落ち着いたらどうなの？満足な結果を出せたんでしょ？」

「そうなんだけど、やっぱり結果が来ないと落ちつかなくて……」

行けたと思っても結果が出るまで落ち着かない。せわしない時間が過ぎていき、
「来たよ！出久!!」

郵便が届いたと思つたら引子が慌てた感じで一通の手紙を持ってきた。

「見てくる!!」

出久はすぐに受け取つて部屋で投影マシンを起動させた。

『私が投影された!!』

「オールマイト!?!」

いきなりドアップで投影されたオールマイトの顔に驚きの表情をする出久。

それからオールマイトはこの春から雄英高校で教師をすることになったという話を
して、出久はこれからも教えを乞うことができるかと内心喜んだ。

『さて、少し早い君の結果を話そうじゃないか』

それを聞いてゴクリツ…と喉を鳴らす出久。

『筆記試験はいい成績だった。グレートだ。さらには実技試験ではヴィランポイントは
20ポイント。それに加えてレスキューポイントという隠された項目があるのだが、君
は最後の女の子の時だけじゃなく、怪我人の処置や周囲への気配りをしっかり務めてい
た。』

それが採点されたために80ポイント。

合計100ポイント……よって緑谷元少年……おめでとう!! 来いよ、緑谷少年! 雄英
ここが君のヒーローアカデミアだ!』

「ッ、はい!!」

こうして無事試験を突破した緑谷出久。

その事を母に言うと言いついて喜んで、その日は同じく入学が決まった爆豪と出久の家で
両家混じって盛大にパーティーを行った。

雄英入学／個性把握テスト

「ハンカチは!?!」

「持った!」

「お弁当は!?!」

「入れた!」

「制服は!?!」

「今きてるよ!?!」

引子は話しているとたまにとんでもないことを言い出なと出久は思いつつ

(言えないよね、あつちの事は)

それだけ心配してくれるって事が伝わってくるから尚のこと死ぬわけには行かないと思う。

「出久!!」

「超カッコいいよ!」

「……うん!行って来ます!」

「行ってらっしゃい!」

その日、出久は笑顔母に見送られ何時もより早く家を出た。

それから暫く歩いて雄英近くまで来ると、ある少女の姿が瞳に映る。少女は出久の事に気づいたのか

「おはよう、えつと」

「緑谷、出久です」

「出久君！私は麗日お茶子、宜しくね！」

元氣よく挨拶し、お互い自己紹介をする。

それから出久は入試の事について改めてお礼を言って、麗日もまたお礼をいった。そんな調子で教室の前に来ると

「ドアでか!？」

「I—Aと書かれたためっちゃでかい扉の前に来て驚いた。それから恐る恐る扉を開けると

「机に足をかけるな！先輩方や製作者さんに申し訳ないと思わないのか!？」

「思わねーよ！てめーどこ中だ！端役が!!」

「ぼ……………俺は私立聡明中学出身の飯田天哉だ」

「聡明〜？くそエリートじゃねえか、殺りがいがありそうだな」

「殺り……………なっ」

見慣れた顔の少年とメガネの男子が口争いをしていた。

「委員長タイプはかつちゃんとかあなるだろうなあ……………」

「緑谷君あの子知つとるん？」

「知ってるよ。同じ中学の幼なじみ」

「そうなんや」

そんな彼らを見ながら見慣れた光景だと思ふ出久。

「おっと、君達は」

そんな出久に爆豪と口喧嘩をしていたメガネの男子が気づいて話しかけて

「受かっていたんだな。当然か……………俺は飯田天哉、よろしくな」

「緑谷出久です」「麗日お茶子です」

自己紹介をする。

「お友達ごつこがしたいなら他所へいけ。ここはヒーロー科だぞ？」

そんな事をしていると何処からか声が聞こえる。気になって声のした方を見ってみる

と

(な、なんかいる)

教室のドアには寝袋に包まれている男性がいた。

男性は壇上まで歩いて行って、

「ハイ。静かになるまで8秒もかかりました。時間は有限だ。君達は合理性に欠けるね」

(………抹消ヒーローレイザー・ヘッド。これは気を引き締めないと)

やっとの事静かになったので男は名乗りを上げる。

「担任の相澤消太だ。よろしくね。早速だがコレに着替えてグラウンドに出ろ。急げよ？時間は有限だ」

担任と名乗った男のいきなりの指示。出久達は急いで更衣室へと向かい体操服に着替えてグラウンドに向かうのだった。

グラウンドに到着していきなり

「それではこれから個性把握テストを行うぞ」

『個性把握テスト!?! 入学式とかは!?!』

「ヒーローになるならそんな悠長な行事なんて時間の無駄だよ」

と、相澤は言う。

(時間は有限………あっちの世界じゃ人は普通九分五十五秒しか居られない………うん)

自分以外の人間がミラーワールドで消滅する事を知っている………過去に見たこと

がある出久はその通りだと思う。

「雄英は自由な校風が売り文句だ。当然、それは先生側にも適用される。覚えておく事だな」

それから話される個性把握テストの内容。

ソフトボール投げ、立ち幅跳び、50 m走、持久走、握力、反復横飛び、上体起こし、長座体前屈。

この八種で個性ありきで測定していくという。

「個性禁止の体力テスト。国は未だ平均点な数字を出しているが合理的じゃない。……主席入学の爆豪、中学の時ソフトボール投げ何mだ？」

「86 m」

「じゃあ個性使って投げてみる。円から出なきや何してもいい」

「んじやまあ……（球威に爆風を乗せる）……死ねええええええ!!」

爆風によって目指できなくなる場所まで飛んでいくボール。記録は905.2 m。相澤は出た記録を見せて

「まずは己の最大限を知る。それがヒーロー素地を形成する合理的手段」

生徒達に対してそう言った。それから爆豪の記録を見て騒がしくなる生徒。競技内容も含めてつい「面白そう!」と発言してしまう。

「面白い、か……これからの三年間でそんな腹づもりでいく気なら、そうだな。こうしよ
うか。トータル成績最下位の生徒は見込みなしと判断して除籍処分にしてやろうか」

『ツ!?!』

その発言に一同は一気に焦らされる。入学初日から理不尽にも程があるからだ。焦
る生徒の中で出久と爆豪だけは違う見方をして発言をした。

「ねえ、みんな理不尽って言うけどさ、世の中さまざまな災害やヴィランの暴走といつた
唐突な事件が発生よね? それも自分が万全じゃない時に」

「んの度に迅速対応して被害を抑えて、敵を倒すのがヒーローだろ? ……この程度を理
不尽と思うならヒーローになんざ向いてねエよ」

「ヒーローに向いてないは言い過ぎだよ!?! かっちゃん!?!」

「ああ!?! 事実だろうが!!」

まるで理不尽を経験した事のあるかのような心のある発言にたじろぐ生徒達。そん
な緊張は二人のコントのようなやり取りで少し緩和される。

(……………この二人他とは意識が違うな。しかも今の発言、まるで自分が理不尽に
あつた事があるような……………)

担任の相澤はその様子を見て二人の評価を改め始めたのだった。

それから

緊張の中個性把握テストが行われていく。中でも入試首席の爆豪はどの分野でも他とは違い優れた結果を出していた。次いで目立ったのは緑谷出久。彼は個性持ちに劣らず個性使わない記録の平均以上、下手したら世界記録に近い数字を出していく。

(抹消を使っても記録は変わらなかった……つまりあれが奴の素の身体能力……)

緑谷出久が無個性という事に懐疑的だった相澤も自身の個性で変化なかったため、及び鍛えられた肉体を見て素の身体能力と納得した。納得してはいるのだがもう一つの方はまだ裏が取れていないので、相澤は最後にソフトボール投げをしようとした出久へと声をかける。

「おい、緑谷」

「何でしょうか？」

「お前、なぜ入試で見せた音を使わない？」

「それは私も気になってた」

相澤の質問に入試の時に彼が音で巨大な敵を倒しているところを目撃した麗日と飯田もどうしてだろうと首をかしげた。それに連なってる

「そう言えば彼、個性を使っていないように思えるのですが」

「つたりめーだ。デクは無個性だからな」

他の生徒もそれぞれ疑問を浮かべ、爆豪が代わりに答える。無個性と聞いてザワつく

生徒達。それを相澤が眼力で一蹴にして出久の回答を待つ。

「それは……………『声帯砲』は使うと音の程度にも寄りますが使った直後、一時的に身体能力が低下するからです。それに今出せる最大音量を出すと身体が硬直して……………すぐには動けなくなるんです。だから素の身体能力が求められかつ動かなきゃ行けない状況で使うにはリスクが高い。自分との戦いなら尚のことです」

「……………なるほどな。おおよそマイクの予想通りだ。だが俺はお前のそれが個性じゃないかと疑っている。俺の個性を使うから次は……………動けなくなってもいいから全力でやってみろ」

「先生の、個性?」

誰かがふと漏らした言葉に爆豪が、ヒーロー名、イレイザーヘッド。個性抹消だと言うことを端的に解説する。

「……………はい……………みんな、耳塞いでてね」

「でもよう、ほんとに出るのか?先生の個性使ってんだろ?」

「出る。だから耳塞いでろ。特にてめえら、耳いいだろ?ちゃんと塞いどけ」

こうして普通にソフトボールを投げる出久。相澤は個性が消えたのだも思ったが、次に出久が思いつき息を吸いこんだのを見て静観する。

「『爆ツツツツツツツツ』」

投げたソフトボールが落下し始めた頃、出久は思いつきり息を吸いこんでから、音を出して衝撃波を生み出しボールをさらに高く飛ばす。

(…605 m…個性も消えなかった。マイクの言った通りか)

相澤は自身の個性で消えなかった所を見てこれが個性では無いと確証を得る。

「あれ個性じゃねーのか!？」

「努力の結果だ。無個性だからってアイツの事舐めてっと手工届かねえ場所に行くぞ。アイツは」

それから出久の方を見ると出久は息を切らした様子で身体をこわばらせていた。見るからに動けそうにない

「ハア……………ハア……………」

「すまない。…………無理をさせたか？」

「い、や、だいじょ……………う、ぶです」

(喉を使う……………か)

相澤は動けない出久を壁際へ休ませ個性把握テストはつつがなく進行していく。全項目が終わった所で相澤が順位を発表してそれから

「ちなみに除籍は嘘な」

『……………!?!』

「君らの最大限を引き出す合理的虚偽」

と、乾いた目で笑う相澤。

「はぁー！？」

それに一部の者が叫び声を上げる。

「あんなの嘘に決まってるじゃない……。ちよつと考えれば分かりますわ……」

叫んだ者達にポニーテールの女子が呆れた顔で突っ込んでいたが、

「いや多分結果的に嘘になっただけだ。見込みがないか、デクの音が個性だったら多分切り捨てられただろ。ま、ヒーローは夢だけでなれるもんじゃねえってことだな」

それを否定した爆豪。出久も同じ意見だったのか、首を縦に振っている。

「(やつぱあの二人……。他と違うな)さてお前ら、明日からビシバシ鍛えてくから覚悟しとけ？振り落とされないようにな」

こうして入学初日のテストは終了した。

深める親交／謎のライダー

あの後大事をとった出久は保健室に行き、

「お前さん、喉に負荷が来てるね。自身の身につけた力を分かっているんだろうけど気をつけな」

「……………分かっています」

簡単な治療を受け、帰路を辿る。

「はあ……………やっぱり最大音量だと動けなくなるなあ。（裏技がある）とはいえ鍛えようがないからなあ……………」

「やあ、緑谷君。喉の調子は大丈夫なのかい？」

「あつと、飯田君！」

雄英を少し離れた所で飯田が出久の元へと駆け寄ってくる。

「僕は大丈夫だよ。心配してくれてありがとう」

「そうか……………それなら良かった……………それにしても、随分鍛えてるよな君は。個性把握テストでも個性を持つてる俺たちの中で負けずに七位という好成績を出していたし。本当に君は……………つとすまない。疑ってはいけないな」

ハツと口元を抑えて謝罪する飯田。出久は何となくその後に関わりなく言葉を探しながら「いや、訝しむのも無理ないよ。僕の鍛え方が特殊なのは理解してるからね……それよりこれから同じクラス。よろしくお願いします」

「ああ。よろしく」

言葉を濁して改めて飯田に手を出す。飯田はその手を受け取って握手を交わした。そんな男二人が友情を育んでいると

「あつ！お二人さん駅まで？待って〜！」

後ろから麗日が駆け寄って走ってきた。

「君は……無限女子！」

「無限女子!？」

麗日は個性把握テストのソフトボール投げで∞という数字を出した一位である。そのイメージが飯田には強かったのだろう。

「飯田君、流石にそれは酷いんじゃないかな……お疲れ様、麗日さん」

「お疲れ様、飯田君にデク君！」

「デク………ね」

「え、あれ？違うん？爆豪君がそう呼んでるからつきり愛称かと思ってたんやけど」

不思議そうにする麗日に出久は以前デクという名前が蔑称で付けられていたことを

明かして、中学時代ずっとその名で呼ばれていたことを明かした。

「今はかつちゃんから意味を変えてもらって、このデクって名前気に入ってるんだけどね」

「その意味、とは？」

「かつちゃん曰く、今の『デク』は頑張れって感じの『デク』だってさ」

「なるほど、言われてみれば確かに」

「私も、頑張れって感じで好きだな」

それからその蔑称が今は気に入ってる事を明かして、麗日からはデクと飯田からは緑谷君と呼ばれるようになったのだった。

そんな風にクラスメイトとの下校を楽しんでいると出久は急な耳鳴りに襲われる。

「あ、ご、ごめん。学校に忘れ物しちゃったから取りに行ってくるね!!また明日!!」

出久は誤魔化すようにカバンを見る振りをしてそれから二人の前から走り去っていく。出久の行動に疑問を浮かべた二人だったが

「余程大事な物を忘れたんだな」

「そうかもやね…」

その慌て具合から財布などといった貴重品または何か思い入れのある品ではないのかなと納得して、二人は電車に乗り込むのだった。

「ここか！変身ッ」

麗日、飯田と別れたあと出久は付近の光が映る物にデッキをかざし変身して鏡の中へと入っていく。

「ツッ！遅かった」

入った先では既に蟹型モンスターが捕食を終えており、捕食された人物が持っていたであろうバックが消滅している様子が伺えた。

「つくそ。レオ！」

『STORIKE REO』

出久は間に合わなかった事を悔しがりながら、相棒を呼び出す。

二対一

「はあっ!!」

端から見れば出久達の優性である。実際出久はレオとの連携を上手くとって確実に蟹型モンスターを追い詰めていく。

「(ト)だ」

『STRIKE VENT』

追い詰めて、右腕に着いたガントレットにカードを差し込み、ストライクベントを

使って右腕に付いた『ストラバイザー』の口が開きそこから青い炎を出して、蟹型モンスターにトドメを刺そうとするも

『COPY VENT』

突如蟹型モンスターと左腕から放射された炎の間に何者かが現れ、青い炎と同じ威力の炎を出され相殺される。

「折角の契約モンスター倒されるの困るんだよね」

「なっ」

出久は煙が晴れ姿を確認して驚いた。蟹型モンスターにた装甲、色をした人間サイズの何か。見れば腰にベルトがついているのが分かる。

「まさか、そいつの契約者……!!」

ベルトを見て出久は今日の前に現れた奴が蟹型モンスターと契約していて、あろう事か人間を喰わせていたなどという最悪の想像をしてしまう。最悪だったのはその仮説が

「察しいいな。そうだけ、折角契約したのにこいつ弱っちくてな。仕方ねえからこいつの強化のために適当な人間を食わせた。ざっと30人くらいかな？みんないい悲鳴で泣いてくれたぜ？」

謎のライダーのこの言葉、当たっていたと理解出来てしまった事だった。

「ツ!!レオ、そいつは任せた!!」

出久はその謎のライダーを放置するのはマズいと考え蟹型モンスターをレオに任せ、敵を倒すべく動いた。動くよと決めたら早く、出久は謎のライダーとの距離を一気に詰めて背後を取る。

「甘い!!」

謎のライダーは出久の動きを読んだのか背後にいる出久に肘を使って鳩尾を決めようとするが出久は気づいて回避する。

「はっ」

「ちっ」

謎のライダーは武術でもやっているのか出久の攻撃を捌いてカウンターを狙ってくる。がそれを許す出久でも無く、お互いに決定打の出ない戦いが続く。

戦い始めて三分くらい経った頃、謎のライダーの身体に異変が訪れる。

「時間切れか。やっぱこっちに居られるのは十分が限度だな。折角強化したのに勿体無いが仕方ないそいつはお前にやるよ」

時間切れ。と呟いた後、謎のライダーは蟹型モンスターを置いて逃走を図る。するとどうだろうか彼の逃走を助けるように同系統モンスターが五体のモンスターが現れる。

「まっ……………くそっ、こいつらなんで」

出久は謎のライダーを追いかけようとするが、モンスターに邪魔をされ、謎のライダーの姿は直ぐに見えなくなる。出久は歯を噛みながら乱入してきたモンスター達をレオと交戦中の蟹型モンスターの場所へと蹴り飛ばし、蟹型モンスター達に対して

『FINAL VENT』

飛び上がり蹴りの形をとる。そしてその後ろに着たレオの咆哮で加速させた蹴り技「キシヤアアア」

『レオライダーキック』を蟹型モンスターと三体のモンスターへと当て見事蟹型モンスター及び乱入してきたモンスターを撃破した。撃ち漏らしたモンスターは弱った身体に爆風を受けて、ダメージがオーバーしたのかその場で倒れ込んで爆散した。

「あのライダーは一体……」

出久は謎のライダーが去った方向を見て疑問を浮かべながら

「……………ごめんなさい」

助けられなかった者達に謝りの言葉を漏らしたのだった。

その日の夜、出久は海浜公園にて、爆豪及びオールマイトに謎のライダーの事について話す。

「契約モンスター使って捕食だと？デク、テメエそれを分かかっててみすみす見逃したの

か!? あア!?

「お、落ち着け爆豪少年。話を聞く限り一番悔しいのは緑谷少年だろ?」

「ッ」

爆豪は冷静になり出久の表情を見るとその表情はとても暗い。爆豪も心中がわからない訳では無いためそれ以上何も言えなくなる。

「それで緑谷少年。神崎君には確認取れたのか?」

「えっと……さつき師匠から」

そう言って自分の携帯に送られてきた文を二人に見せる。

「仮説として、歪みが活発化している原因にそのライダーが関係あるかもしれない。話を聞く限りそのライダーは過去のバトルロワイヤルでボルキヤンサーと契約していた仮面ライダー、シザースに酷似しているみたいだからね。ボルキヤンサーを倒せたとはいえ、乱入してきたモンスター。逃走を手助けしたところ聞くともしかするとそのライダー複数のモンスターと契約している可能性がある。また遭遇したら撤退も考えて! 本当に気をつけて。僕もできる限り情報を集めてみる。……必要かもしれないから過去のライダーの能力と特徴についてわかる範囲で載せておくよ」

文の後に龍騎、ナイト、ゾルダ、シザース、ライア、王蛇、ベルデ、タイガ、インペラー、リュウガ、ファム、アビス、オーデインの情報が記されている。(ガイについては

爆豪と似ているため意図的に書かなかった)

「……………過去のバトルロワイヤルか」

「ンで今更そんなもんが」

「分らない……………でもかつちゃん」

「わアってる。もし一人の時に遭遇しても深追いはしねえ……………ぶち殺すかもしれないけどな」

爆豪のいつもと違う殺すの発音。

「爆豪少年……………それは」

「オールマイト先生、敵もライダーである以上、ここから先は殺し合いです。ライダーであることを降りても契約モンスターを倒してデツキを回収するか破壊しない限り喰われてしまう。ヒーローを目指すものとして言ってはならないことだとは重々分かっています。場合によっては覚悟しなきゃ行けません」

「デクの言う通りだオールマイト。心配すんな。俺達は人の……………ヒーローの道を踏み外す気はねえよ」

「……………すまない(……………この二人は)」

オールマイト心配そうに、そして苦渋を噛み締めながら自身の力届かぬ場所で、背負う必要のない物を背負う覚悟をしまっている少年達にただ拳を握って力なく謝っ

た。

戦闘訓練

出久が謎のライダーと交戦した次の日、午前中は普通の授業だったものの、英雄の授業ということもあり出久はしっかりと予習してから学んでいた。

「師匠に教わったけど、やっぱり英語は難しいな」

こういうところがしつかりと実力に出てくる辺りやはり努力家というのは出久に当てはまる言葉だろう。

「白米に落ち着くよね。最終的に！」

それから昼は大食堂で一流の料理を安価で頂ける。

（そして午後の授業。いよいよか）

それはヒーロー基礎学の時間だった。

「わーたーしーが——!!」

「来っ」

という猛々しい声が響いてくるとともにドアが開かれそこからオールマイトが姿を現し、

「普通にドアから来た——!!」

「オールマイトだ！」

「銀時代のコスチュームだ……！」

オールマイトの登場に騒ぎ出すクラスメイト達。

出久もそれに漏れず喜びの眼差しを向ける。

「早速だが今日はコレ！戦闘訓練!!!」

そしてオールマイトがこれから行われる行事を言う。

「そしてそいつに伴って」

それから戦闘服の話をして盛り上がる生徒達。それから順次要望した戦闘服に着替えていき、グラウンド・βにヒーロー志望の卵達が集まった。皆が戦闘服で盛り上がる中、出久は緑色のジャンプスーツをベースに、黒い上着を纏い、腰に小物を詰められるバック、喉元にはチョーカーのようなものをつけ、手は素手で、入学前の事を思い出していた。

「入学祝い！」

「ジャンプスーツ!?!」

「お母さんね……酷い事を言ってしまったって……ずっと引つかかっていたの。……あの時私は諦めちゃった……なのに、出久は諦めないで夢を追い続けていたんだよね」

「……………うん」

「ごめんね出久。これからは全力で応援するからね!!」

母、引子からのエール。それを囁みしめ出久は気を引き締めた。

「始めようか、有精卵共!!」

皆が揃ったところでオールマイトからの説明が入る。その内容としては屋内での対人戦闘訓練。

(屋内……………か)

ヒーロー組とヴィラン組に二人ずつ分かれて2 v s 2の屋内戦をするというものだ。

もちろん基礎学なのだから基礎訓練も必要だろうが、それも踏まえて初めに全員の戦い方を学ぼうと言うことである。

「勝敗のシステムはどうなるのですか?」

「ぶっ飛ばしてもいいんすか?」

「また除籍とかないですよね?」

「分かれるというのはどういう分かれ方でいいのですか!?!」

「このマントかつこよくない??」

「んんんん〜聖徳太子いいい!!?!?!」

次から次へと質問をされるオールマイトは仕方がないのでカンペを見ながらも説明

をしていった。

・屋内訓練 状況設定

敵がアジト核を隠している。ヒーローはそれを処理しようとしている。ヒーローは時間内に敵を捕まえるか核を回収する事。敵はその反対。

とすべての説明を終えて、

「コンビ及び対戦相手は、くじだ」

「適当なのですか!？」

「プロになると急増チームなんて日常茶飯事だし、そういう事じゃないかな……」

「そうか……!先を見据えた計らい……失礼致しました!!」

班分けに入り、AからJのチームが決まり

「デク君!一緒になれたね!」

「うん。頑張ろう、麗日さん!」

出久は麗日と組むことになった。

それから対戦相手を決める時くじをオールマイイトが引いて

「Aがヒーロー、Dが敵だ!!」

最初の対戦カード出久&麗日VS爆豪&飯田の戦いが決定した。

訓練開始五分钟前

爆豪&飯田

「おい、クソメガネ。デクは俺が足止めする。テメーは核を守ってろ」

「足止めってこの場合二人で核を防御した方が良くないか？」

「脳ミソ付いてんのかクソメガネ。……使ってんのは核って設定なんだろう？俺が残って個性使って核が爆発したらどうすんだア？爆発してヒーロー共々自爆ってかあ？んな選択肢はねえ」

「それは……そうだな」

「分かったら核守ってろ。俺が足止め出来るのはデクだけだ。丸顔が来たらそっちは上手くやれ」

不安そうな飯田だが、理にはかなっていたし正直な所今の出久に勝てる気もしないの
で素直に核を守る敵の動きを考え始めたのだった。

一方 出久&麗日

「麗日さん。おそらくかつちゃんは今僕を狙いに来る。かつちゃんの個性じゃ、核がある部屋で満足に戦えないからね。ぜったい単独行動してくる。だから僕がかつちゃんの相手をする」

「そうなんや……でも大丈夫なん？」

「大丈夫と言いたいところだけど……麗日さんに頼みたい事があるんだけどいいかな？」

「……………」

「それはね」

出久と麗日もまた、二人に勝つための作戦を練っていくのだった。

準備に入ってから五分が経ち訓練開始。

ヒーロー側である出久が先に窓から侵入する。

「＼あんっ!!＼」

潜入直後出久が音を使い、耳に手を当てる。

「よし………と言いたいところけど一人が向かってきてる。おそらくかっちゃ………麗日さん手筈通りに！」

窓の外にいる麗日に指示を出したと同時に爆豪が奇襲をかける。

「まあ分かっている奇襲なら避けるよな、おめエは」

「それがわかってて、かき消さずに来る辺り流石だね」

「つたりめエだ」

対峙してからの動きは早く、爆豪が右の大振りを使って爆破する。出久はそれを左手でわざと受けて

「麗日さん!!」

先程別れた麗日を呼ぶ。麗日はタイミング良く出久に拘束されている爆豪の背後を取るが

「させないっ!!」

脅威的なスピードで間に入った飯田に邪魔をされる。その一瞬の隙を爆豪は見逃さず爆破を使って出久の拘束を破る。

「麗日さん大丈夫?」

「うん、ごめん失敗した」

「大丈夫。それよりこれでやりにくくなった」

「?」

「飯田君が来たことによつて相手はこつちに更に仲間がいるつて可能性を示唆させたつて事」

「!?え、でもこれつて」

「確かに二対二でもだからつて伏兵がいる可能性を度外視していい訳じゃない」

出久は爆破の瞬間わざと拘束を緩め爆豪の背後に動き爆風を利用して麗日と合流し、

「おい眼鏡エ!?核はどうしたア!!?」

「この場合、どのみちやり合うなら麗日君の浮かすものがないこの場で戦った方がいいと判断したまでだ!」

「……ツチ……そーゆー事かよ。てめえ見た目通り頭使うじゃねえか」

二対二の状況を作る。じりじりと詰め寄る二組。

(麗日さん一人行かせようにも……かつちゃんに加え飯田君の機動力「麗日さんごめん。ここで戦うしかない」

「わ、分かった」

一瞬発発の状況。

先に動いたのは爆豪。爆破で距離を詰める爆豪に対して出久が体制を低く保ち当たるか当たらないかギリギリのタイミングで爆豪の顎めがけて拳を上げるが

「(っ)!!」

「なっ、早い!?!爆ッッッ」

「ぐっ」

突然加速した飯田の右蹴りに驚いてしまい対応し切れず、咄嗟の判断で弱めの音を使って飯田を硬直させるが

「デク君!?!」

「大丈夫ーっ!!麗日さん!!右!!」

「なっ!!」

爆豪には当らず、爆破をモロに受け右膝をつく。出久を見ずに爆豪は即座に切り返して麗日へと爆破をする。出久心配した麗日の対応が少し遅れてしまい

「うぐ……………でもこれで」

「なっ、てめえ!!」

爆破が直撃した麗日だったが不意に爆豪の身体の自由が効かなくなる。爆豪はそれが麗日の個性だと分析し、

「閃光弾!!」

「わっ!!」

爆破を応用した閃光弾を使って視界を奪い、麗日の個性で動きが難しいながらも麗日を掴み爆破からテープを巻いた。爆豪の一連の動きの中出久は動きが鈍い飯田に詰め寄られ、動きが鈍っていることを利用して飯田の初撃を見切り、テープを巻き付けた。

こうして出久と爆豪の戦いになり

戦いが終わりモニタールームへと戻ってくる四人。結果をいえば時間切れで敵側の勝利だった。その後の講評では最初の奇襲からヒーローをその場から離れさせなかつ

た爆豪がMVPになった。その中で

「そう言えば緑谷、お前最初に何か叫んでからの耳に手を当てて、すぐ爆豪の奇襲を読んだみたいだけどあれって何したんだ？」

「あ、それウチも気になってた」

ふとそんな疑問を赤髪の生徒、切島鋭児郎が口に出した。その疑問に耳がイヤホンのようになっている少女耳郎響香が頷き、他にもポニーテールの少女、八百万百や触手の先端に目を作ってる少年、障子目蔵も頷いた。

「ああ、それはあれは音の応用で、音を反射させてフロアの様子を把握したんだ」

「……………」

「音って壁に反射するからそれを利用して反射した音を聞きとってフロアがどの程度の広さなのか敵は何人いるのかを把握したんだ。普通の技術だよ」

なんてことのないように言う出久。だが自身の出した音を反射させるならともかく、音の反射から状況把握するなど決して普通などではない。

「……………敵の人数？これって二対二って分かってる訓練よね？」

そんな出久の回答に驚く生徒達。そんな中で蛙っぽい少女、蛙吹梅雨が人差し指を口元に置いて首を傾げて聞いてくる。

「……………確かに形式は二対二の戦闘訓練。でもオールマイトが最初に説明してくれた設定

の中に人数は含まれてなかったよね？」

「現場に出ると敵の正確な人数がわかんねえなんてざらだ。だから俺はその眼鏡が来てから『今頃核は持ち出されてるかもなあ？』とかいってヒーローを挑発してただろうが」

「……………そつか。だからデク君は最初『戦いながらでいいから、逃げれる隙があつたら逃げて他のヒーローと合流して!!』って言ってたんか…………」

「それだけじゃありませんわ。緑谷さんは周囲を警戒する素振りを見せながら麗日さんを助けるために、爆豪さんは飯田さんを解放させるために動いてるように見受けられました」

「え？……………って事は緑谷は麗日を解放させて他のヒーローと合流。爆豪は機動力の優れた飯田を逃がして核を回収及び交戦してるであろうヒーローへの援助を任せようとしてたって事かよ!？」

出久と爆豪はお互いに引かない戦いをしながら、伏兵がいる可能性を考え、敵に示唆させた上で最善策をとろうと模索してたのだ。その事に飯田や麗日を含めて意識の違いを思い知らされる。

(複数との戦いを経験してる影響かそれとも、急な乱入を予想してる影響か)

いずれにせよ、あつちの世界でかなりの経験をすると感じるオールマイト。

それから

顔に火傷の跡がある少年轟焦凍が、ヒーロー側を氷漬けにしたり、手からテープを伸ばす少年瀬呂範太と硬くなる個性の切島鋭児郎が優れた近遠を見せたりと、戦闘訓練初日はつつがなく終了した。

その日の放課後、

「ねえ緑谷。さっき言ってた反射した音を聞き取る技術ウチにも教えてくれない?」

「え、耳郎さんの場合、既にかんりの索敵能力があると思うんですけど…それに僕みたいな音を使える人が居ないと特に必要のない技術ですし」

「いーの。覚えていて損は無いでしょ?それにかしこまらなくても同じ年なんだからダメでいいよ!」

「おい爆豪!お前の戦闘能力凄いな!今度組み手付き合ってくれよ!」

「やるからには死ぬ気でこいや」

クラスメイトと出久は好意的に爆豪はうつつとおし気味に親交を深めていく。そんな二人に突然耳鳴りが響き鏡に相棒が映る。

「あ、(ゴ)、(ゴ)めん!急用思い出した!!」

「ツチ」

二人はクラスから離れ監視カメラのない位置で変身し鏡の中へと入っていったのだった。

そしてこの二日後

「どうなると思う？ 平和の象徴が……敵に殺されたら」
A組は真に賢しい敵に出会う事となる。

委員長決定／侵入者

『委員長決定／謀る侵入者』

オールマイトが雄英高校の教師として赴任したことが世に広がり初めた。そんな上手いネタをマスコミが逃すわけもなく彼らは連日、雄英高校の正門前へと押しかけた。た。

その影響でいつものように麗日、飯田と合流していた出久も彼らの質問を受けることとなる。

「オールマイトの授業とかどんな感じですか!？」

「えっと、その……とつても頑張れる気になれます!」

「様子? うーんと……筋骨隆々!! です」

「最高峰の……… (ry)」

無難に返す出久。四字熟語で答える麗日。真面目な学生を連想させる飯田。それでマスコミから解放された三人は緊張しながらも教室に入っていく。

ちなみにもあまりにしつこいマスゴミは

ピーー!! ガガガガガガガガ!!

「うわああ！何!？」

マイクを持つて校門をくぐろうとした所、校門のセンサーに触れてしまいセキュリティが発動。そのため開かれていた門は完璧に閉まっている。

「雄英バリアーだよ、俺らはそう呼んでいる」

「ネーミングセンスダサくない!？」

学生証とか通行許可証の持っていない者が学校のものでない限り入ることは許されなく、またセキュリティは門だけでなく所々に設置してあるとマスコミの対応していた相澤は説明する。

「なにそれーお高く止まっちゃって!!」

「一言くらいくれたっていいのにさ!」

「つたくこつちは二日も張ってんのにうんともすんとも言わねえ!」

そんな対応にマスコミは満足してないのか、欲求不満がからか怒りの声を上げ初めた。

マスコミ怒り狂う嵐のブーイングの中、

「はあ……………」

どっからどう見てもマスコミではない者が記者達の後ろから歩み寄り

そんな事は露知らず、始業の時間が来てHRで相澤が昨日の結果を吟味しながら話をする。

「昨日の戦闘訓練は、まあお疲れ様だったなど言っておこうか」

初めにくれたのは労いの言葉。それから相澤は「緑谷、爆豪」と前置きをして、

「お前らの意識の高さと判断力、戦闘能力は買ってやるし、実際プロになったら情報が食い違う場合が多い……が、特に爆豪、パートナーの他に仲間がいる可能性を考慮させる所まで考えたのなら事前にもう少しパートナーと相談しろ」

「……はい」「……うっす」

注意をいれる。二人は素直に頷いた。

「それじゃ今回のHRでの本題だが、急で悪いがお前らには……」

それで生徒達の表情が曇る。

個性把握テストでの一件があつて、また除籍のかかつた事をさせられるのではないかという不安から来るものであつた。緊張に包まれるA組。

しかしそんな緊張とは裏腹に

「学級委員長を決めてもらいたいと思う」

『学校っぱいのキター!!』

緊張感が抜け落ちる事を言うものだから、テンションが上がり次々と手を上げる生徒達。

ヒーローを目指す者としてクラスメイトといえど、先導する経験をしたと思うのは至極当然の事だった。そんな盛り上がる生徒の中に大声が轟いた。

「静粛にしたまえ!!」

飯田の声である。

「“多”を牽引する重大な仕事……やりたい者がやれるものではないだろう! 周囲からの信頼あつてこそ務まる責務。民主主義に則りこれは投票で決るべきだろう」

「そびえ立ってんじゃねーか!! 何故発案した!!」

飯田の言は周囲の信頼あつてこそその役目、だから等しく平等に決めるために多数決を取ろうという発案だった。

「日も浅いのに信頼もクソもないわ。飯田ちゃん」

「そんなん皆自分に入れらあ!」

「だからこそここで複数票を獲った者こそが真にふさわしい人間ということにならないか?!」

とまあ飯田の意見が採用され投票が行われ

緑谷出久 三票

八百万百 二票

という結果になった。ちなみに発案者の飯田はゼロ票という何がしたかったのか分からぬ結果になり、

「僕他に入れたのに……………マジでか」

「うーん、悔しい……………」

委員長が緑谷。副委員長が八百万と決定したのだった。

その日の昼。飯処。

「人すごいなあ」

「ヒーローだけじゃなくてサポート科や経営科の生徒も一堂に会するからな」

雄英ではランチラッシュユが安価で一流の料理を振舞ってくれているためか食堂は常に混雑している。

「お米がうまい」

そんな中麗日は白米を、飯田はカレーを、出久はカツ丼を食べながら先の委員長決めについて話していた。

「いざ委員長となると務まるか不安だよ……………というか僕かつちゃんに入れたのに三票入ってるし……………」

「ツトマル」

「大丈夫さ。緑谷君のここぞと言う時の判断力は“多”を牽引するのに値する。だから君に投票したのだ」

君だったのか。と心の中で突っ込む出久。

「でも飯田君、委員長やりたかったんじゃないの？メガネだし」

何気にぎつくりいくよなあ麗日さん。と再び突っ込む出久。

「“やりたい”と相応しいか否かは別の話……僕は僕の正しい判断をしたまでだ」

「僕……!!」

突然飯田が一人称を僕と言ったため二人は反応する。それから麗日が切り込んでいき、飯田がターボヒーローインゲニウムの弟であり、自分自身そんな兄に憧れてヒーローを志したと話した。その時に見せた笑み。

「なんか初めて笑ったかもね」

「え!? そうだったのか!? 笑うぞ俺も!」

「……………なれるよ、飯田君なら」

こうして三人親交を深めていく。と、いきなり雄英のベルが鳴り出した。

「セキュリティ3が突破されました。生徒の皆さんは速やかに避難してください」

突然の事にパニックになる生徒達。

(耳鳴り!?こんな時に!?)

出久はこのパニックの中、慣れた耳鳴りに反応して誰も見ていないと窓際に寄り、レオを呼んで引きずり込まれるように鏡の中に入る。

そんな中状況を掴もうと飯田が押しつぶされそうになるも窓際にたどり着いて外の様子を伺うとそこには雄英内部に侵入した報道陣の姿があった。

(みんなパニックに陥っている!!)

「飯田くーん!!!」

「麗日君!!!……そうだ、俺を浮かせる麗日君!」

飯田は麗日に浮かしてもらいエンジンで加速それから生徒の意識が集中してる出口にいき、まるで非常口のような姿をとって大声で状況を知らせ、パニックに陥っている生徒達を鎮めたのだった。

食堂の騒ぎが落ち着く数分前、

「変身ツ!」

鏡の中に入った出久は同じく鏡の中に入っていた爆豪と合流する。

「トラスト!」

爆豪は既にメタルガラス……爆豪曰くライノを召喚して複数体の同系統モンス

ター及び先日とはまた違ったライダーと交戦中だった。出久はすぐさまレオと共に爆豪の助力に向かう。

「おせえぞ!! デク!!」

「お前、この前のやつか! なんだお前らつるんでたのかよ。そこのサイっぽいやつのこつちのカード無効化するカード実に厄介だし……まあい、目的は達した帰る」

「その声!?! お前、まさかこの前の!?!」

こうして再び逃げようとする謎のライダー。声からして中は同じだと出久は気づく。が、再び謎のライダーは逃げようとし、

「ツチ!! こいつらア!!」

「くそっ!! また!!」

追おうとする出久、爆豪を前と同じように同系統の複数体のモンスターが邪魔をす。それから謎のライダーが見えなくなり、出久と爆豪は互いにモンスターを一匹残らず撃破した。それから

「……おい、デク。風さんから貰った資料覚えてるか? それにあいつこの前お前の遭遇した奴なのか?」

「うん……間違いなく、インペラー」だね。……間違いないと思うよ、声を変えてなければ」

「そうか……なら尚更ここで捕まえたかったんだが」

前回出久が鉢合わせした謎のライダーと同じ人物が変身しているということが分かり捕えられなかった事に落ち込む二人。

「……契約モンスターは司令塔一体とはいえ……あの数に対して何かいい方法考えなきゃね……それに……あのライダーの底はまだ未知数だし」

「ああ……そうだな……戦ってみた感じ奴はまだ全力じゃなかった……お前が前戦ったモンスターの事もあつて複数体契約してる可能性もある……くそっ!!…厄介な状況だッ」

落ち込みつつも冷静に分析する二人。仮面の下にある二人の表情は険しいものだと分かる。

未だ測れぬ敵の実力。捕えられなかった悔しさを噛み締め互いに拳を強く握りしめたのだった。

その後、

「あれ？デク君どこ行つとったん？」

「あ、えつと、ちよつと人混みに飲まれて頭を壁に打ちちゃつて気絶してた」

「え!?大丈夫なん!？」

「大丈夫だよ。かっちゃんが起ここしてくれたからさ。麗日さん……僕が気絶してる間に何があったか教えてくれない？」

鏡の中から戻ってきた出久は気絶したという事にして、麗日から食堂での顛末を聞いた。話を聞いた出久は他のクラス委員決めの際に

「委員長は飯田君がいいと思います！先の食堂での顛末を聞いて、有事の際気絶してた僕よりもみんなをかつこよく纏められた飯田君がやるのが僕は正しいと思う」

委員長は飯田がいいと提案。

「あ！良いんじゃない!!飯田食堂で超活躍してたし!!」

「非常口の標識みてえになつてたよな！」

「なんでもいいから早く進めろ……時間がもつたいない」

「ひっ」

それが通って

「委員長の指名ならば仕方があるまい!!」

「任せたぜ非常口!!」

「非常口飯田!しっかりやれよー!!」

飯田天哉はA組の委員長となつたのだった。

(それにしても……あのライダーの目的……それにマスコミはどうやって)

その様子を見ながら出久はそんな疑問を覚えたのだった。

とあるバーにて。

「はいよ。これ、雄英のカリキュラム」

「ありがとうございます」

「ほんと有能だよな、お前」

「いや、俺は無能だよ。有能って言うのはそこにいてかい奴とかその黒いのことをいうんだよ」

ある男性がバーにいる、顔に何者かの手首を引つつけた青年に何か紙切れを渡す。紙切れには特別カリキュラムと書かれていた。

「んじや、頑張つてなUSJ」

男性はエールを送ってすぐに、どこかへ消えていった。青年はそれを表情の読み取れない目で見送ったあと、男性から渡された紙切れをみて

「楽しみだなあ。黒霧」

邪悪な笑みを浮かべたのだった。

U S J 襲撃

『U S J 襲撃』

翌日の朝、

「いいかあ俺を追うなよヒーロー共!!」

「連続強盗殺人犯『僧帽ヘツドギア』!!」

「強い上に……姑息!!」

マウント・レディ、シンリンカムイらのヒーローが苦戦している中、通勤がてらオルマイトがチョップを食らわし一撃で沈める。

(速度が落ちた……活動時間も以前より短く……これは後継者を早く決めなければならぬ)

それから轢き逃げ犯、立てこもり事件を連続で解決したオールマイトは自身の衰えを感じ

(それにしてもまた謎のライダーが現れたと言っていたが……奴は一体何者なのだろうか……神崎君、そちらの世界にいる君なら分かるのかい?)

雄英にて出久達と交戦した謎のライダーについて気にかけるのだった。

オールマイトが朝から事件を解決していた日の午後

「今日のヒーロー基礎学だが……俺とオールマイト、そしてもう一人の三人体制で見ることになった」

(なつた……おそろく昨日のマスコミ……かな?)

相澤より、今日の授業は救助訓練だと説明され、各々がコスチュームに着替えた。

「バスの席順でスムーズにいくよう番号順に二列で並ぼう」

(真面目だなあ飯田君)

それからバスに乗り込む生徒達。

「こういうタイプだった、くそそう!!!」

「イミなかつたな」

途中飯田がバスが思ってた構造と違った事にがっくり肩を落としていた。それから

「そう言えば緑谷ちゃん」

「……………?どうしたの?蛙吹さん」

「梅雨ちゃんと呼んで」

「えつと……あす……梅雨ちゃん」

「飯田ちゃん達と話してる時、時折師匠って呼ぶ人がいるみたいだけど緑谷ちゃんはそ

の師匠って人から戦闘技術を学んだのかしら？」

「え、あ、うん。……小六の時に師匠と出会ってそれから……無個性の僕をここまで鍛えてくれたんだ」

「んじやあ、お前のあの個性みてえな音の出し方もその師匠って人から教わったのか？」

「そうだよ……師匠は凄いいんだ……最近忙しくて会えてないけどさ……」

「って事は幼なじみの爆豪もその師匠って人から学んだの？」

「多少はな。つっても、あの人が教えたのは鍛え方や対人戦闘、個性の応用方法だけでそれ以外はデクも俺も自力で身につけたもんだがな」

「にしても緑谷と爆豪見るとその師匠って人に会いたくなってくるな！今度紹介してくれよ!!」

「んー、師匠がいいっていったなら……」

（緑谷と爆豪の師か。俺から見ても能力の高い爆豪はともかく無個性の緑谷をあそこまですばすなんて……一体どんな人物なのやら）

それぞれが思い思いに談笑し、目的地へと辿り着く。それからバスを降りて建物の中

に入って

「すっげー！！USJかよ?!!」

あまりの規模に驚き、テンション高まる生徒達。

そんな彼らの前に宇宙飛行士のようなコスチュームを着用した人が人差し指を立てて説明する。

「水難事故、土砂災害、火事：e t c. あらゆる事故や災害を想定し：僕がつくった演習場です。その名も：ウソの災害や事故ルーム！」

（USJだった!!）

みんなは頭文字を英語にして、略してUSJと見抜いた。確かにこの施設内はまさにUSJだ。

出久が宇宙飛行士をみて感動するような目で説明し

「スペースヒーロー」「13号」だ！災害救助でめざましい活躍をしている紳士的なプロヒーロー！」

「わー私好きなの13号！」

麗日がうおおおー！と大きく叫び興奮する、その余り腕をブンブンと振っている。

そんな生徒達の状況を特に考えず相澤は後輩である13号に話しかける。

「13号：オールマイイトは？ここで待ち合わせてるはずだが」

「先輩……それが」

13号は指を三つに立てて制限ギリギリまで活動してしまつて今は休息中だと説明する。

「不合理の極みだなオイ」

誰にも聞こえない小さな声で二人は話し合っている。相澤はイラつく余りか顔をしかめているが、直ぐに生徒たちを見て

「まあ……念の為の警戒態勢……」仕方ない始めるか」

時間を無駄にするのも合理的では無いと判断し授業を始めることとする。授業を始める前に13号からのお小言が……増える。

「皆さん、ご存知だとは思いますが……僕の個性は『ブラックホール』どんなものでも吸い込んでチリにしています」

13号は災害救助をメインに働くヒーローであるが、実際に彼の持つ個性は強力で、残酷で、驚異的で、その気になれば都市一個壊滅させることが出来るような個性だ。

「その個性を誤ること無く使つて、どんな災害からも人を救い上げるんですよ」

長年ヒーローを研究し尽くしたヒーローオタクの出久は、熱心に13号の個性を語り出す。横にいるお茶子は高速で顔を縦に振つてる。出久の解説に頷く13号は、「ええ」と一言頷き

「しかし、簡単に人を殺せる力です。皆の中にもそういう“個性”がいるでしょう」
個性という力の危うさについて語り出す。

「超人社会は個性の使用を資格制にし厳しく規制することで、一見成り立っているように見えます。が、一歩間違えれば簡単に人を殺せる“いきすぎた個性”を持っていることを忘れないで下さい」

超人社会の中でも日本は特に個性の使用を厳しくしているため、犯罪社会への抑止力にもなっている。実際オールマイトがいるという理由もあるが日本の犯罪率は各国に比べて低い。

「相澤さんの体力テストで自身の秘められている力の可能性を知り、オールマイトの対人戦闘でそれを人に向ける危うさを体験したかと思います」

故に相澤は入学初日に個性把握テストを、オールマイトは初めてのヒーロー基礎学にて戦闘訓練を。

「この授業では心機一転！人命の為に“個性”をどう活用するかを学んでいきましょう。君達の力は人を傷つける為ではなく助けるためにあるのだと心得て帰って下さいな」

(13号：カッコイイ!!)

そしてここでは個性の使い方、助けるための心構えを学ぶと13号は言う。その心の

入った言葉に生徒達は13号に拍手を送る。

「そんなじゃあまずは」

そんな様子を見てもういいかなと判断した相澤は授業を取り行おうとするが、ふとその視界に黒いモヤの様なものが映る。そしてその中から手が出るのが見え

「……ツ……殺気!?!」 相澤先生!!」

「(……チツ……ガチの殺気) おい teme エら!!!」

「一塊になつて動くな!!! 13号生徒を守れ!!!」

大声で叫ぶ、初めて生徒にみせる相澤の焦りの表情に……出久と爆豪を除く生徒たちは棒立ちで不思議そうな顔をする。

「先輩……それに君達」

状況を把握しきれていないのか首をかしげる13号。それから生徒達と同様に相澤の向いている噴水広場に目をやった。

「オイオイ、何だアレ」

生徒の一人砂糖がそう言う。見ると黒い空間が浮かんでいてその、黒い空間から次々と何者かが現れる。

脳が出ている大男。

骸骨のようなマスクをした男。

—奇しくも、命を救える訓練時間に—

いかにも普通の人ではないと思われる人物達が、続々と出てくる。

—彼らの前に現れた—

「もしかしてもう入試ん時と同じもよう始まってんぞパターン？」

「ちげえ!!あの殺気受けてわかんねえのかよ!?!ありやあ」

とぼけてる切島に爆豪がキレる。

「あの殺気、普通の人が出せるものじゃない。あれは」

「アレは……………」

「敵だ!!」

爆豪とは逆に冷静に説明しようとする出久と被るように相澤が黄色いゴーグルを着用して大声でそう答える。

(まずい、特にあのモヤはおそらく移動させる系の個性。その系統の個性にたいして出来ることは……………)

—プロが何と戦っているのか—

すると今まで開いていた黒い空間は閉じ、黒い霧を全身にまとつてゐる男は不思議そうに呟いた。

「13号にイレイザーヘッドですか…先日頂いたカリキュラムでは、オールマイトがここに居るはずなのですが…何か変更があつたのでしょうか？」

(頂いた!?まさか!?)

「やはり先日のはクソ共の仕業だったか」

舌打ちする相澤先生。出久と爆豪は先日相對した謎の仮面ライダーが頭を過ぎりつつ、未だ混乱する生徒より早く警戒態勢に入り、

「みんな黒いモヤには気をつけておそらく移動させる系の個性!!」

「ワープの個性は貴重何じゃねえのかよクソっ!」

注意、悪態をそれぞれ着く。この二人は日々ミラーワールドモンスターから殺気を受ける事もあるが、今回のソレはそれと同質かそれ以上……

—何と…向き合っているのか—

「どうします？死柄木弔」

そのワープの個性持ちであろう黒い霧の男は、手が顔についてる青年、
 “死柄木弔”
 と自身がそう呼ぶ男にそう聞くと、残念そうに青年は呟く。

「どこだよ…せつかくこんな大衆引き連れてきたのにさ、オールマイト…平和の象徴
 …いないなんて…」

先程の表情から一変して、死柄木は子供たちを見てこう言った。

「子供を殺せば来るのかな？」

—それは—

“平和の象徴を殺せ”

—途方もない悪意—

ゲーム／ゾーンリザルト

—平和の象徴を殺せ—

黒い霧から現れた敵達は各々やるべき事をやろうとしている。そんな中で戦おうとしない三名。

黒いモヤの男・脳が剥き出しの男

・手をつけている死柄木弔という青年

その中で死柄木弔と呼ばれた青年が不気味と悪意の籠った声でそう言った。

「敵!?ウソだろオイ!?!」

「ヒーローの学校に入り込んでくるなんて…いくら何でもアホだろ!?!」

叫んだのは髪の毛が丸くなっている小柄な少年峰田と切島

「先生…ここの防犯センサーは!?!」

「も、もちろん…ありますが…」

「おそろく敵の個性ツ!」

八百万が13号に確認をとるが、出久の読みが当たっているのか防犯センサーがある

のに対して警報が鳴らない。

「そいつの言う通り、現れたのがここだけか学校全体かは分からねえが」

轟と爆豪は状況を整理してから

「ようはあのクソ共、昨日のマスゴミ集団を利用して、マスゴミの対応に追われる教師の隙を見てカリキュラム奪ったつーことだろ!!」

「そうだな。俺たちがここに来ること、時間まで知ってる…おまけに警報も鳴らないということとは…向こうには電波を妨害する個性があるからだ…」

一つ一つ丁寧まとめ、ため息をつく。

「バカだがアホじゃねえ…コイツらは、何らかの目的があつてここにやって来てる用意周到の襲撃だ」

真剣になっていくその様子から生徒達が状況を掴んだと、判断した相澤は

「13号、生徒たちを守れ、俺がアイツらを食い止める。それと教師たちに連絡試してみたらダメだった…上鳴! お前も個性使つて連絡試してみろ」

「ツス…!」

相澤がチャラそうな男子、上鳴に指示を飛ばすも上鳴はこの状況に動揺しているのか対応が遅れる。

「大丈夫だよ。落ち着いて上鳴君」

そんな上鳴を諭すような出久の声色。それで幾分か落ち着いたのか上鳴が連絡を試すが芳しくない。

その様子を見ずに敵へと向かおうとする相澤に

「た……多対一は先生として不向きなのではないですか!？」

不安そうに飯田がそう言うのと

「…ヒーローは一芸だけじゃ務まらん」

そう言つて敵の集団に真正面で飛びかかる。

「射撃隊！いくぞお!!」

噴水広場にて、ヘルメットを被つた男が大声でそう叫ぶと三名が束になって相澤をみて構え

「情報じゃ13号とオールマイトじゃなかったか!? ありや誰だ!？」

「知らねえ!! が、突っ込んでくるとは」

三人同時に射撃の体制を取り

「「おお間抜け!」」

叫ぶが、構えた場所からは何も出ない。

「アレ? 出ね……」

三人は不思議そうな顔をして個性を確認しようとするが、相澤がそんな隙を見逃すわけもなく捕縛用の布を巻きつけ一気に頭をカチ割るように三人の頭を頭突きさせる。

個性が発動しなかった理由は単純明快、相澤が個性を消したために、発動しなかったのだ。

「バカ野郎！アイツは他でもねえ、個性を消すつつう：抹消ヒーロー、イレイザーヘッドだぞ!!」

それに気づいた敵がそう叫ぶと、腕が四本ある全身がガッチガチの異形型の男は眉をひそめる。

「消すうく？へっへっへ：俺らみてえな異形型のも消してくれんのかあ!？」

「いや無理だ」

相澤は、即異形型の男の顔面を思つきしぶん殴り、そしてまた捕縛用の布で拘束してから他の敵にも投げつける。

「発動系や変形系に限る。だがお前らのみみたいな奴の旨みは統計的にやつは近接戦闘で発揮される事が多い」

戦いながら解説する相澤。

「だからその辺の対策してる」

その様子を有象無象の敵とは違う死柄木は、静かに相澤、イレイザーヘッドについて

分析を始める。

「…肉弾戦も強く…その上、ゴーグルで目線を隠されていては誰を消しているのか分からない。集団戦においてはそのせいで連携が遅れを取るな…なるほど」

それから喉元をガリガリ掻きながら

「嫌だな、プロヒーロー。有象無象じゃ歯が立たない」

そう呟く。そんな相澤の戦闘を見ながら

「かつちゃん！あの五人こっちに来る可能性高い!!」

「わあつてらあ!!気抜くんじゃねえぞクソデク!!」

出久と爆豪は静かに息を整え、こちらに来る可能性のある敵の分析に入る。

「緑谷君！爆豪君！早く13号先生に従って避難するんだ!」

そんな出久に飯田は早く避難するように声をかける。が、生徒達の逃げた先にそれを邪魔するかのように黒いモヤの男が立ち塞がる。

「させませんよ」

（しまった。一瞬の瞬きの隙に…!!一番厄介そうな奴を!）

「初めまして、我々は敵連合。せんえつなが」

「うっせえ!!死ね!!」

男が現れた瞬間、ほぼ反射的に問答無用の爆破を食らわす爆豪。

「危ない危ない……そう平和の………ツッ」

「(すうううう) ……ハッ!!」

「危ないですね(この少年ほとんど気配なく背後に………厄介ですね)」

「わざわざ避けた、って事は」

それを回避した黒いモヤの男だったが不意に背後に迫る気配を察知し間一髪と言った感じに背後にいた出久の一撃を避け、

「散らして罫り殺す」

モヤを一気に拡大して生徒達を飲み込み、

「ツッ・おい! その黒いヤツには実体があらあ!!」

それぞれ別の場所に飛ばした。

く水難ゾーンく

飲み込まれた後咄嗟に閉じてしまった眼を開けた出久。その瞳には水面が映る。

「水!?!」

出久は重力に従い水の中に落ちる。するとそこに

「おっ! キタキタ」

顔がピラニアのような敵がいて、待ちきれ無かったと言わんばかりの様子で殺す気

満々に突っ込んでくる。

(分かりやすく水対応の個性……って事は他の敵も各々得意な所に分けられてる……?)

水の中で敵の分析をする出久。そんな出久を狙ってピラニア敵は口を大きく開けて「オメエに恨みはねーけど……サイナラ！」

突撃してくる。

(…周りは気になるけどこいつは今一人。水中で一番動けるからかな? ……避けるなら………いやあれは)

出久が水の中にてカウンターのタイミングを測っていると、なにかに気づいたと同時にその体を思いっきり引っ張られる。

(なんで彼女が、この水の場合に………そうか)

出久の気づいた姿は、足で敵の横顔を蹴ってる蛙吹の姿。現在は出久との身体を舌を伸ばしてグルグル巻きつけて、物凄いスピードで水中を泳ぎ去っていく。その脇についてに回収したのか峰田を抱えている。

……ジャパーン!

それから勢いよく水中から出た出久と蛙吹に峰田の三人。出久を蛙吹が水難ゾーンにある救出用の船に置くようにすると、横で気絶している峰田が呟いた。

「クツ…カエルの割になかなかどして…オツパイが…」

「…!!」

頬を赤らむ蛙吹は峰田を思いつきり船に叩きつけるように投げ捨てる。

「つあ!!?」

船に思いつきり背中を打ったために、峰田は起きて正気に戻ったようだ。

「あ、ありがとう…蛙吹さん…!」

「梅雨ちゃんと呼んで、しかし大変なことになったわね」

蛙吹梅雨の個性は「蛙」見たまんま。カエルっぽいことは大体出来る。A組の中で彼女以上に水中戦が得意な者はいない。

「…カリキュラムが割れてた。単純に考えると先日のマスクミ騒動。おそらく彼らが仕組んだものだ…:…それにかつちゃんが遮ったけどおそらく奴らの狙い…:…いや殺す目的はオールマイトだ」

「オールマイトを殺すって!!?そんな事出来っこないって!!」

「落ち着いて峰田ちゃん。…:…私も緑谷ちゃんと同じ意見だわ。私達をバラバラにしたのも、無茶してきたのもおそらく殺す算段が整ってるからだわ」

「!!?」

恐怖からかパニックに陥る峰田。そんな峰田とは違い冷静に状況を分析する二人。

「どうして殺したいのか。どうやって殺すのかはひとまず置いておいて……」

「まずはこの状況を何とかしないと駄目そうね」

三人が船周りを見渡すと、

「大漁だああ!!」

先のピラニア敵を筆頭にいかにも水場が得意そうな個性を持った者達が船を囲っている。

「落ち着いて峰田君。少なくとも現状下にいる奴らに僕達の個性は割れてない」

断言する出久。

「どうしてそう言いきれるんだよおお!?」

「それは…蛙す…梅雨ちゃんがこの水難ゾーンに移動させられてるから。下の連中見た感じピラニア含めて水中戦意識してるのに」

「蛙の私がいるのはおかしいわね。私の個性を知ってたらあっちの火災ゾーンに放り込むわ」

蛙吹も出久の言いたいことに気がつく。峰田はまだ慌てている様子だ。そんな峰田に出久は予測される敵の作戦が『個性が分からないからバラバラにして数で攻める』で、『生徒の個性が相手にとって未知』である事を説明する。

それから互いの個性に改めて認識を始める。

「私は跳躍と壁に貼り付けるのと舌を最長で20m伸ばせるわ。後は胃袋を外に出して洗ったり、多少ピリツとする粘液をだせる」

蛙吹は自分の個性に後半二つはほぼ役に立たないし忘れていいかもと付け加える。

「やつぱり強いね。……………僕は知つての通り無個性。水中で一ヶ月息を止めても大丈夫なくらいに鍛えた肺活量で“声帯砲”を打てる。一応武術も学んでるかな。水中でも少しは動ける」

「…一ヶ月…凄いわね」

それから出久が説明し、次に峰田が頭の丸いのをもぎ取って壁にくつつける。

「超くつつく。体調によっちゃ一日経つてもくつついたまま。モギったそばから生えてくるけどモギリすぎると血が出る。オイラ自身にはくつつかずプニプニ跳ねる」

峰田の解説になんとも言えない空気が流れ耐えきれなくなったのか

「だから言つてんだろおおお」

「違うよ……………凄い個性だから活用方法を組み立ててて」

うわあああと叫び声を上げる峰田。

THOOM

個性を把握した所で船が急に揺れ割れる。

「じれっただけだ、ちやつちやつと終わらそう」

よろけながらも下を見ると敵の一人が待ちくたびれたようにして、他の敵も同じ様子だった。

「うわああ!!」

船が割れてパニックになる峰田が号泣しながら自分の頭の個性を勢いよくもぎって投げる。

(……………やっぱり……………警戒して触らない)

峰田の投げた個性に警戒して触らない敵達。

「峰田ちゃんと本当にヒーロー志望で雄英に来たの?」

「うっせー!!怖くない方がおかしいだろーがよ!!ついこないだまで中学生だったんだぞ

!!入学してすぐ殺されそうになるなんて誰が思うかよ!!」

「落ち着いて峰田君。それとありがとう、おかげで勝利の方程式が決まった鍵は君だ」

「なんだよ緑谷!!……………へ?」

泣きわめきながら出久に何か言おうとして急にポカンとなる峰田。

「蛙す……………梅雨ちゃん、峰田君これを」

「何かしら?」

「耳栓。……………って感じ……………任せるよ」

それから出久は峰田と梅雨に思いついた作戦を話して、

「でもそれだと緑谷ちゃん動けなくなるんじゃないの？」

「大丈夫。その辺は考えてある」

「そうなのね……乗ったわ、峰田ちゃんはどうするの？」

「ややや、やってやろうじゃねえか!!」

二人から了承を貰いヤケになった感じの声を出して船から一気に飛び出る。

「やっぱガキだ」

「着水してから」

「わーってら」

出久がガキだと舐める敵達。先程油断するなど注意してた敵ですら勝利を確信していた。が

〃わツツツツ!!〃

出久は油断した敵を無視して水の中心に強い衝撃が来るように自身の最大音量を出した。

音の反動で身体が空中で浮いて、硬直する出久を蛙吹が舌を使って回収し、その蛙吹に抱えられている峰田がものすごい勢いでモギって投げる。

「引きずりこまれる………!」

「これはあのガキの」

「んだこれとれねえ！」

出久の音によって空いた穴に引きずり込まれていく敵達。彼らにはくつついて取れない峰田の個性がくつついて行き

(水面に強い衝撃を与えたら、広がってまた中心に収束する)

やがて見えていた敵全員がくつついて、

「一網打尽」

ザパアンと言う音とともに上がる水飛沫が勝利を祝うようにまとまった敵達を打ち上げた。

「とりあえず第一関門突破。って感じね、凄いわ二人とも……緑谷ちゃん大丈夫？」

「……………じょうぶ」

出久と峰田は蛙吹に引つ張られ敵達から離れ水辺に来ていた。水辺にもたれかかって休む出久は震える手で腰のバックのポケットから飴玉のようなものを取り出してそれを口に含む。

「……………緑谷ちゃん、それは何？」

「……………特殊な配合をして作った飴。最大音量はリスクが高すぎるから有事の際の為に作つてあるんだ……………最も服用は一回までだけだね」

説明する出久の声は既に治っているが、身体の方は治りきっていないのか動きが少し

鈍い。

「相澤先生が無理してるのは見てわかるから……峰田君たちは広間に向かつて」

「流石に今の緑谷ちゃん一人を残していけないわ」

「そそそ、そうだ」

「……ありがとう、でも大丈夫それに」

「それに？」

言い終わる前に出久は水辺から飛び出し、こちらに迫っていた

「ぶべっ!!」

「さっき大声出したせいでこっちに敵が集まってくるだろうからさ」

「緑谷!?!何してる!?!」

「出来る範囲で手伝います!!」

異形型の個性の男を蹴り飛ばした。その直後相澤の個性から逃れた三人程が接近して出久を狙うが、懐に潜り込まれ正拳突きを鳩尾に喰らい屈むようにしてお腹を抑える。

「隙だらけだ!!」

「誰が隙があるってかア?アアン?」

出久の背後を狙う敵。異形型なのか足がタイヤになっている敵が超スピードで突っ

込んでくるが、その突如頭を捕まれ爆破され、地面に叩きつけられる。

「かつちゃん!!」

「気張れ! デク!! それと蛙女ア! 不用意に動くな!! あの手の奴はやべえ」

相澤は敵の対応に追われつつ、自身の個性よりはぐれた三人に対応した出久。突如割って入った爆豪を見て

「(……どの道この状況じゃそこまで見てられねえか) …ダメだと思つたらすぐ逃げろ!!」

「はいっ!!」

そう指示を飛ばしたのだった。

一方で

水難ゾーンの出久達の様子を見る影が一つ。

「さてと、大漁の餌だが」

影の持ち主は怪しげなカードデッキを持って水面に映る異形を見る。異形の表情は読み解きづらいが影の持ち主は何を言いたいのかを理解し

「ちよつと待とうぜ。ちゃんと毎日飯はやつてるだろ? まあ……お前もたくさんの部下に食わせなきゃいけないってのは分かるが、どうせなら一番美味そうな奴食いたいよな

？」

そう異形に言葉をかける。異形はその言葉を理解していないだろうが飛ばした視線の先に映る黒い大柄な大男を確認すると小さくうなづいた。

影の持ち主はその様子を見ながら

「ま、その前に少しぐらい摘み食いしても大丈夫だよな？ どうせ使い捨てだしな？ 死柄木」

邪悪な笑を浮かべたのだった。

『USSJ他ゾーンリザルト』

く土砂ゾーンく

「散らして殺す……か。言っちゃ悪いがあんたらどう見ても」

個性を持って余してる輩以上には見受けられないと断言する轟の前には土砂ゾーンにて生徒を待つていたであろう敵達が氷漬けにされていた。

「こいつ……!!移動してきた途端に……本当にガキかよ……」

凍ったまま動けない敵達。轟はそんな彼らを見て数で圧倒する理由ではなく、生徒用の寄せ集めと判断する。

「カリキュラム割れてたって事は来ている教師陣も分かってたって事。ということは敵の狙いはおそらくオールマイト)なあ」

故に轟は次に取るべき行動を考え

「オールマイトがいる可能性のあった場所に攻めてきたって事はそれ用の対策も打ってあるって事だよな？それは何だ？」

動けない敵に対して脅迫混じりにそんな質問を投げたのだった。

ちなみにこの時俗にいう透明人間の少女、葉隠透がこの場にいたのだが、透明であるため轟は気づかなかった。

く火災ゾーンく

火災ゾーンにて背に尻尾のある少年尾白猿尾は

「どこいったクソガキ！」

「こつち……ぐあつ」

火災ゾーンの建物、信号機などの突起を利用して敵を一人一人確実に仕留めていく。

(まずは敵に捕まらない事)

く暴風大雨ゾーンく

「いたぞ!!」

敵に見つかったのはとんがった頭が特徴的な口田 甲司。奇声をあげて驚く口田に襲いかかる敵だったが

「ぐべっ」

「これで六人」

鳥のような風貌の少年常闇 踏陰の個性によつて出された影のモンスター、黒影によつて地面に叩きつけられた。常闇は倒したあと口田に親指をグツと立てて口田もまた親指をたてたのだった。

く山岳ゾーンく

山岳ゾーンにて、上鳴・耳郎・八百万三人は十数名の敵に囲われていた。

「コエー!!マジ!!三途見えた!!何なんだよこいつらは!!どうなつてんだよオ!!」

「そういうの後にしよ。つーかあんた電気男じゃんバリバリつとやっちゃつてよ」

無理だと叫ぶ上鳴は自身の個性が電気を纏うだけで放電は出来るけど操れないと説

明する。そんなウダウダもの言ってる上鳴の背中を耳郎が蹴飛ばして

「じゃあさ人間スタンガン」

上鳴は敵の一人にピタツとくっついて敵がぐわああとなる。自身の個性が通用した事で調子に乗る上鳴。だが、上鳴に向かう影二つ。

「ふざてんなよ、ガキイ!!」

一人は石を手に固めて一人はナイフを持って。最もその二人は耳郎と八百万のサポートによつて無力化された訳なのだが。

「お二人共真剣に!!」

「实际いい案だと思っただけど」

それから耳郎が足元のスピーカーに個性であるプラグをさして音で敵を一気に制圧するも、数の暴力があるのか押され気味になる。とそこに

「出来た!!時間がかかってしまいますの。大きなものを創造るのは」

八百万が現れ巨大なシートを出す。敵達は盾のつもりかと慌てるが、八百万が絶縁体シートと説明した事により、上鳴が理解、それから一気に放電して敵達を制圧したのだった。

「他の方々が心配……」

「つか服が超パンクに」

「また創りますわ」

その際、八百万の服がとんでもないことになったり上鳴がアホになったりした。

大人数相手の勝利、他の人達との合流を急ごうと油断した彼ら。その為その影で地面から這い出た手には気づかなかった。

く倒壊ゾーンく

「これで全部か、弱いな」

ビルの倒壊する倒壊ゾーンに飛ばされた爆豪と切島は倒壊ゾーンで待っていた敵を一人残らず倒していた。

「つし！早く皆を助けに行こうぜ！」

「ならお前、山岳ゾーンに行け」

そこは出口じゃないのかと首を傾げる切島に対し、爆豪は背後から迫るカメレオンのような個性の敵の頭をがしって掴んで爆破した後

(うわ、すげえ反応速度)

「さつきちと音が聞こえた。方角からして水難ゾーン、そこにデクがいる。それに隣の

ゾーンちらつと見えたが凍ってたからあの半分野郎がいる。で、俺の予想がただしけりやセンサー妨害した奴出口と真反対に陣取ってるだろうから」

「なるほどつまりそこを叩けって事か！」

「そういうこつた、気張れよ？」

「へ？」

そう言つて建物内なのに切島の首根っこ掴む爆豪。切島もいきなりの事に素つ頓狂な声を上げるが、何されるか読めたので慌てふためくも

「待て、まてまてまて」

「死ねええええええええ」

「うっそだろおおおおおおお」

容赦なく切島を爆破と共にぶつ飛ばす爆豪。爆破の衝撃で建物の壁は崩れる。

切島は咄嗟に硬化して、爆風に乗ったまま空高く飛んでいったのだった。

く 出口近辺く

出口付近では13号を初めに、飯田、麗日、障子、瀨呂、砂糖、芦戸の六人がワープゲートと交戦していた。彼らの作戦はわかり易く飯田を外に出して助けを呼ぶという

もの。その為に13号が前に出てワープゲートである黒霧と呼ばれた男を抑えていたのだが

「13号。災害救助で活躍するヒーローはやはり」

黒霧のワープゲートでブラックホールを背中に送られやられてしまう。

「飯田ア走れって!!!」

騒然として動きを止めてしまう飯田に砂糖が呼びかけ、飯田は顔を歪めつつも駆け出しました。当然黒霧がそれを許すわけがないのだが

「行け!!」

眼前に来た黒霧を障子が多い被せるようにして妨害、飯田は皆の事を思いながら走る。

「くっ……!!」

「ちよこざいな!外には出させない」

それを追う黒霧。

「麗日どうしたの!!」

合わせるように麗日が駆け出して、黒霧が飯田の目の前に来て飲み込もうとするが「なまいきなだぞメガネ!消えろ!!」

不意に浮遊感に襲われる。

「爆豪君が言ってたんや。それにこんなん着とるなら実体あるやろ…!!」

やったのは麗日。黒霧のモヤでは無い部分に触れ個性を発動黒霧の身体が宙に浮く。「行けええ!!」

浮いた黒霧の身体を逃がさないと言わんばかりに瀬呂がテープをくつつけて固定。黒霧の身動きが取りづらい状況で生まれた隙に飯田は自動ドアをこじ開けて外に出て応援を呼びに行った。

「……………応援を呼ばれる……………ゲームオーバーだ」

その様子を空中から見ていた黒霧はそんなことを呟いて、ワープゲートを開くのだった。

く山岳ゾーン 2く

多くの敵を無力化した上鳴達は電撃系の個性を使う大男に上鳴を人質に取られ動けない状況にいた。

「手え上げろ。個性は禁止だ！使えばこいつを殺す」

脅してはない本気の殺意。耳郎がノーモーションで攻撃しようと試みるが敵に気づかれ使えなくなる。すると不意に

「……………ええ」

「今……………何か」

耳郎の耳に何か聞こえてくる。最初は気のせいかと思つた耳郎だったが

「……………ええええ」

次第に近づいてくる声。

「な、なんだ？」

その声に敵も気づいたようで声のする方向を振り向くと

「上鳴を離せええええええええええ」

上空からすごい勢いで飛んでくる切島の姿があつた。

「な、何だつてこんな所に!!?」

焦つた敵は上鳴を掴んでいない方の手から放電するが、硬化した切島はなんてことないように突つ込んでくる（というより止まらない）。その様子に更に焦る敵。

「ガキ……………ぐっ」

「ウエ……………」

当然隙が生まれ耳郎による音響攻撃を許してしまい上鳴諸共身動きが取れなくなる。敵が動けなくなっている隙に音響攻撃の範囲外から八百万が創造した伸縮自在のワイヤーを上鳴に巻き付け見事上鳴を奪取。それを見てからかあるいは止まらなかっただ

けなのか切島の頭と敵の頭がぶつかって

「ぐ、が」

敵の被っていた骸骨のようなマスクにヒビが入り、割れたと思うと敵が倒れる。

「みんな大丈夫か!？」

「切島さん!!おかげで助かりましたわ!!」

「つてかどうやって来たの!？」

「……………爆豪に吹っ飛ばされた……………」

ああ、となる全員（上鳴はアホになっているため除外）だったがすぐハツとなった八百万が敵をロープで巻き付けて、やっと山岳ゾーンにいた全ての敵が無力化されたのだった。

怪人脳無

『怪人脳無』

出久及び爆豪が広場に駆けつけ相澤と共に敵達を一掃していく。目の前の光景に死柄木は苛立ちを覚えていた。

「やりづらいなあ。ガキ共も鬱陶しい……………だから」

死柄木は観察していて把握した相澤の個性のタイミング。個性が切れた瞬間を狙って水辺でもしもの時のために出久達を回収しようと待機している蛙吹を狙うも、

「蛙女ア！水ん中潜ってる!!!」

「ちっ」

爆豪がそれを許さない。揃えた数が倒されていく様子、自身の邪魔が入る状況。挙句「13号は行動不能に出来たものの…………一名逃げられました」

「は？は……………はあ……………黒霧お前、お前がワーブゲートじゃなかったら粉々にしてたよ……………」

黒霧から生徒を逃がしたという報告。更には鳴り出した警報ベル。この全ての状況に対して苛立ちが溜まっていく。ガリガリガリガリと首をかく死柄木だったがふと何

を思ったのか突然大きいため息をついて

「流石に何十人ものプロ相手じゃ敵わない。ゲームオーバーだ………あーあ………帰ろっか」

ゲームオーバーとやる気を無くしたように呟く。その言葉に出久はもちろん爆豪、相澤、集まっていた敵ですらは？つとなつた。流石にそれは見過ごせなかつたのか敵の一人が死柄木に対して「そりやないですよ！死柄木さん」と近づいて行くが

ゴキッ

—という鈍い音が聞こえたと思うと敵の左腕の関節が曲がってはいけない方向にねじ曲がっていた。突然の事に悲鳴をあげる敵。

「うるさいなあ………あーでもそうだな………せめて平和の象徴の教示くらいは潰しておくか………脳無」

死柄木は敵の左腕を掴んでいる脳むき出しの大男にそんな命令を下す。脳無と呼ばれた脳むき出しの大男は先程まで掴んでいた敵の一人を適当に放り投げると出久に狙いを定め跳躍した。

(す、少なくともあの腕に掴まれたら駄目だ)

跳躍してきた大男に対して、出久は死柄木という人物が相当やばいと感じながらも冷静に後ろに下がって回避する。丁度目の前にきた脳無の胸部に対して正拳突きを当て

るが脳無は効いていないと言った様子を見せる。

(なんだこの感覚………まるで)

「デクツツ!!」

胸部に添えられた出久の腕を脳無が掴もうとするがすんでの所で爆豪が割って入り出久を掴んで距離を取る。相澤が入れ替わるようにして捕縛布で脳無を拘束するが脳無は圧倒的な力で捕縛布を利用して相澤を引き寄せその頭を掴み強引に地面に叩きつけた。脳無の強烈な一撃は地面を軽々しく砕いた。押し付けられて地面が砕けたと言ふ事はそれだけの力が相澤の頭部を直撃した訳で焦る出久と爆豪。

「クソっ!?!お前、今通したな!?!」

「う、うん!十全に通った感覚はあつた!!多分衝撃を無効化する個性………だけじゃない気がする!!」

「へえ……」

脳無の個性に気がついた出久を興味深そうに見る死柄木。ふと何を思ったのか解説を始める。

「そうさ、脳無にはショック吸収がある。こいつにダメージを与えたいならゆつくりと肉を抉っていくのが効果的だな」

「なら(指向性を持たせて)、その脳を直接揺らす………!かつちゃん!」

「ツツッ！おい待て!!」

〃爆ツツツツツ〃

出久は息を吸い込み、脳無の近くにいた死柄杓を巻き込むように思いつき声帯砲を打ち出した。

（くそっ、こいつ素でこれかよ、オールマイト並じゃねえか………が今はそれより）

相澤は朦朧とした意識で頭部を掴まれながらも脳無を一瞬見る。それにより個性が消え脳無に声帯砲があたり隙ができると思つた瞬間

「いやはや、危ないねえ」

音と脳無の間に青年が割つて入り、手にしていた日本刀で出久の音を切断した。

「お、どをぎっ」

出久は声帯砲の反動かそれだけ言い残して身体が自由が効かなくなりその場に倒れた。

「来ないんじゃないのか………お前」

「まあほら心配で来てみたら生徒が逃げてるじゃん？だから死柄杓イレイザーに消されない俺が迎えに来たってわけ。………それはそうともう少ししたらオールマイト来りけどどうするっ？」

「へえ………」

青年の言葉を聞いた死柄木は不敵に笑う。彼等が会話してる間に爆豪は出久の首を掴んで水辺へと放り投げる。蛙吹が舌で器用にキャッチして出久をゆっくり水辺に持たれかけさせる。

それとほぼ同じタイミングでUSJの扉が思いつきり開かれた。

「私が来た!」

オールマイトが到着したのだ。死柄木はオールマイトの姿が確認出来ると

「コンティニューだ……」

そう呟いた。

オールマイトの登場で沸き立つ敵。無謀にもオールマイトに挑もうとするが全員一手でなぎ倒される。それからすぐオールマイトは相澤を脳無の手から助け出し距離を取る。取る前に一発脳無に食らわすが脳無はなんとも無い様子だ。

「効いてないのか!？」

「ツ……おい!オールマイト!!こいつショック“吸収”の個性持ってやがる!!それにこいつ他にも持ってやがる!!」

「相澤君を頼む!!」

動ける爆豪に相澤を任せオールマイトは脳無を掴みバックドロップの要領で脳無を地面に突き立てる事を試みる。その衝撃で爆発が起こるが

「つゝつゝそういう感じか……!!」

砂埃が晴れて見るとオールライトは脇腹を脳無に捕まれ、脳無は発生したワープゲートを通って胴と頭のみが地面から出ていた。

「いいね黒霧。期せずしてチャンス到来だ」

(やっぱ内蔵ないのか……餌にしようかと思っただけどやっぱ黒の方が栄養価高そうだ)

不気味に笑う死柄木。

その横で掴みにくい表情を取る青年。

「そう上手く行くかよ」

「平和の象徴はてめえら如きにやられねえよ」

圧倒的有利な状況でオールライトを引きちぎる解説を始める黒霧だったが突如身につけていた服を捕まれ爆破される。合わせるかのように地面が凍りつく。凍りついたためか脳無の拘束が緩みオールライトが脱出する。

「お、氷の子供か!!おい死柄木、あれ貰うぞ」

「……この場合あの爆破小僧をやつつけろ。脳無もやれ」

「む、ま……いいか。入り口はたくさんあるしな!」

氷が見えて喜ぶ青年だが死柄木の命令は爆豪をやれとのもの。青年は口を歪めながらもまあいつかと言って黒霧を掴む爆豪へと迫る。脳無もまた凍った身体を無理矢理

砕き立ち上がり爆豪へと超スピードで移動する。その際砕けた身体が再生したのに対し死柄木が超再生と解説する。

「クソっ!!」

「危な……………少し燃えたか。やるな!」

爆豪はそれを見たと同時に前方に最大火力の爆破を起こすが、青年は後方に跳躍し回避、脳無は一瞬怯んだ様子を見せたが先程より早いスピードで距離を詰め、爆豪を仕留めようとするが爆豪はオールマイトに飛ばされオールマイトが脳無の攻撃を受け数メートルの地面が抉られる。

「加減を知らんのか……………」

（大丈夫だと思ってる思いつきり殴ったやつが言うなや……………クソっ痺れやがる）

「仲間を助けるためさ仕方ないだろう?」

死柄木は大層な演説をするが即嘘だとバレる。それから脳無、黒霧に指示をだし自身と青年に子供をあしらうように命令するも、オールマイトの気迫に怯まされ後退する。それからはオールマイトと脳無の殴り合い。殴り合いの余波で誰も近づけない。

「死柄木、増援がもう少しで来る。これ以上は百害あつて一理なしだ。引き際も肝心だぞ?」

「ハア……………いいよ……………脳無はくれてやるよ……………帰ろう……………黒霧」

「……分かりました」

巻き起こる砂埃に隠れてワープゲートを通り撤退する死柄木と青年。死柄木は帰前にオールマイトに向かって

「今度は殺すぞ、平和の象徴」

そんな言葉を漏らし、その姿を消した。

残された脳無は急に動きを止め、止めた隙を狙ってオールマイトが力を溜め込み天井に向かって力の限り殴りつけ脳無は風に流されるようにしてドームの天井を突き破る。

（このタイミングだ?!）

（まずい………僕もかっちゃんも動けない）

かと思われたが脳無の飛ばされた先の鏡が不自然に歪み脳無は吸い込まれるようにして鏡の中へと飲み込まれて行ったのだった。幸いだったのはその事に気がついたのは出久、爆豪の二人。耳鳴りもその一瞬だけだった事。オールマイトは余力を出し尽くしたのかその場から動けないでいた。

「IAクラス委員長飯田天哉!! ただいま戻りました!!!」

こうして

雄英教師陣が到着し、事件は収束へとむかう。

結果としてはオールマイトが脳無を倒し、制圧された敵68名の確保、主犯格と思わ

れる死柄木、黒霧、青年の3人は逃亡。

「無茶をしなければやられていた。それ程に……………」

重症の相澤及び13号、オールマイトも無傷とは行かず血を流す。

が

生徒はほぼ無傷に終わりこの事件は幕を閉じた。

「この襲撃は後に起こる大事件の始まりだったんだけど、この時の僕らには知る由もなかった」

死柄木はカフェのようなアジトにワープゲートで帰るなり荒れていた。

「ああ、くそ完敗だ……………脳無はおそらくやられた。手下も瞬殺……………子供も強かった……………特にあのガキ二人」

「爆発に音、中々面白い子達じゃないか？」

「そう思うのはお前だけだ……………それに平和の象徴も健在だった……………話が違うじゃないか」

死柄木が荒れているとモニターの向こう側から

「違わないよ。ただ少し見通しが甘かったね」

誰かの声が聞こえてきて死柄木は思わず悪態をつく。そんな死柄木を咎めず諭すような声でモニターの向こうの人物は語りかける。

「ま、でもいーんじゃねーの？今回引き際つてのを知れたわけだしさ」

「なるほどそれが君の見解か……今回の経験は糧になるだろう。少なくとも有象無象では子供相手にすらならなかった訳だしね。だから集めよう。ゆっくりと時間をかけて精鋭を」

「つて事はやっぱ先生とドクターは自由に動けないのな」

「そうだね “インペラー”。だから彼のような “シンボル” が必要なんだ。死柄木弔!! 次こそ君という恐怖を世に知らしめろ!」

「こつちでは “羚羊 (レイヨウ)” “つて呼んでくれ。ま、精鋭なら少し宛があるけどな” “……使えないゴミだったら殺す”

「……お手柔らかに」

モニター側の人物は言わずもがな、黒霧の表情も読めない。インペラーと呼ばれた青年は楽しそうに口を歪ませ、シンボルとなる死柄木はその瞳に歪んだ決意を宿す。

こうして悪の組織は静かに胎動をした。

U S J 襲撃事件まとめ

USJ内に襲撃してきた敵はほぼ無力化されていたため、警察とヒーローの協力により難なく捕まえることが出来た。しかしオールマイトによって雑木林に吹き飛ばされた一人の敵、脳無。彼は何処にも見当たらないという。警察はワープの個性があること、敵の力が未知数な事を合わせて脳無を回収したのではないかと判断する。計68名の敵が逮捕され、残りの3名は今も現在逃走中。

また重傷を負った者は、相澤、13号、オールマイトの計三人。音使い過ぎて動けなくなっていた出久は動けるまで回復、オールマイトの咄嗟の判断で弾き飛ばされた爆豪は腰を強く強打した。いずれもリカバリーガールによって治療された。その際相澤は頭部の損傷が酷かったためか脳に何らかの後遺症が残るかもと診断された。

治療を終えミラーワールドを確認してから帰路につく出久と爆豪。彼らは先の耳鳴りについてお互い同じ意見を持ち合わせていた。

「ねえかつちゃん……………僕の予想が正しければだけど」

「ああ、間違いなくいやがるな……………クソっ動けなかった」

「……………もつと強くならなきゃだね。こっちでも」

「……………そうだな」

脳無と呼ばれた者があつちに送られたことが分かったのに何も出来なかった事、その脳無に対して自分達では太刀打ち出来なかった事を嘔み締めながら、

「師匠に聞かないとね……ライダーの事」

「ああ。情報が足りなすぎる」

互いに拳を強く握り、いいタイミングできた耳鳴りに従ってモンスターに襲われていた人を

「早く逃げて!!」

助けて変身する。出久と爆豪はやり切れない気持ちをぶつけるようにモンスターを倒した。

大人達の懸念／雄英体育祭に向けて

『大人達の懸念／雄英体育祭に向けて』

「死柄木弔という名前、個性は恐らく、触れたものの対象を粉々にしてしまいう個性と推測。20～30代の個性登録を洗ってみましたが、該当せず。また黒霧というワープゲートも同じです。それと日本刀を所持していたという青年、こちらは敵名“羚羊”であると情報を得ました」

雄英襲撃後の翌朝、雄英高校では会議室で教師達はもちろんの事、警察からオールマイトの友人である塚内刑事が敵連合について調べた情報、資料を読み取っている。

塚内は警察の中でもトップクラスの实力者と言われている。特に情報収集などほとても得意とするらしい。

「まあ……名前の割れた彼も含めて無戸籍かつ偽名ですね。個性届けを出していない裏の人間です」

彼はまず死柄木と黒霧の名前が偽名である上、裏の人間と断言した。

塚内は情報から策を考えているみたいだが、今のところ情報が少ない。相手が無戸籍ゆえに偽名。さらに相手が何処にいるのかも分からない故に、攻め立てる理由すらもわ

からないままでは策などは最早皆無に等しい。

「何もわからねえってことだろ？ だったら早く見つけないと主犯の死柄木とやらは厄介になるぞ……」

帽子に手を当てるスナイプに、オールマイトは遠いおぼつかないような目を細めてため息をつく。

「主犯……か」

「オールマイト？」

オールマイトのすぐ隣にいたため、その眩きが聞こえた根津は振り向く。

「思いついてもふつう行動に移そうとは思わぬ大胆な奇襲、用意は周到にされていたにも拘らず……」

それこらオールマイトは、政治家が話すような体制をとり、自身の体験を踏まえて見解の話を続ける。

「それと何が関係があるというんだ?!」

オールマイトに抗議する雄英の一年B組ヒーロー科の担任ブラドキング。ブラドキングの発言からかオールマイトに視線が集まる。

そんな中オールマイトはこう言った。

「子ども大人だ」

雄英教師陣、塚内はオールマイトが言っていることの意味を直ぐに察知した。

オールマイトは死柄木の言動の説明からして、『子ども大人』というのは幼稚的万能感の抜け切らない人間、大人の力を持った子どもということだと閉める。

「シヨック吸収の方はともかく、超回復なんて個性仮に見せたとしても話さない方が油断を誘える」

「なるほどね…オールマイトの言葉に一理あるね。確かに、個性不明というアドバンテージを放棄するのは愚かだね」

冷静な様子で話し出す根津校長。

「小学生時の一斉個性カウンセリング、アレ受けてないのかしら？」

疑問に浮かぶミッドナイトの意見は、尤もで、個性が発現して、それが当たり前になつてしまったこのご時世、個性という危険な力を過つた方法で使わないために、本来なら小学時に保険調査によるカウンセリングを受けるよう義務付けられてる。

「個性登録を洗つても出てこないんだ、完全に裏の人間なんだろ。受けてないことには確かだな。何しろこんなややこしい事件なんざ初めてだぜ……」

帽子を深く被るスナイプ先生。

「先日のUSJで検挙した敵の数68名」

抗議が続いてる中、声を出したのが塚内刑事。資料を見ながら説明をしている。

「どれも路地裏に潜んでいるような小物ばかり、そして大物が脳無と呼ばれる男でした。問題はそういうった『子ども大人』に賛同して付いてきたということですよ。」

先生たちも固唾と唾を飲む様子で静かになり、塚内に視線が集まる。

「ヒーローが飽和した現代に抑圧されてきた悪意たちは、そういう無邪気な邪悪に魅かれてるのかもしれない」

オールマイトの存在そのものが悪への抑止力となり、今まで悪事を働く事が出来なかつた敵たちの悪意は、死柄木弔という青年の無邪気な悪意に引き寄せられ、協力、仲間などと言ったものが集まってくる。死柄木弔の存在はそんな敵達を取り込み拡大していく可能性を孕んでいる。

「……ヒーローたちのお陰で、こうして我々警察は地道な調査に専念出来る。引き続き調査網を拡大し、犯人たちの逮捕に尽力を尽くします！」

内は一礼する。

その後根津は深刻そうな顔で呟いた。

「子ども大人……か」

根津の様子に首をかしげるオールマイトや他の教師陣。そんな彼らに対して根津はこういった。

「逆に考えれば生徒らと同じだ。成長する余地がある。もし優秀なバックでもついでい

たら……」

「……考えたくもないですね」

根津に答えるようにしてオールマイトが言った言葉は雄英教師陣を代表するような言葉だった。

敵ヴィラン連合と名乗る組織に雄英高校への侵入を許すという学校の失態。

これにより侵入された翌日は臨時休校を余儀なくされたがそれからまた一日が経過して、出久は気が休まる事なく学校へと登校した。

そして

「皆ー!!朝のHRが始まる席につけー!!」

「ついてるよ。ついてねーのお前だけだ」

朝のHRの時間。いつもの通りに飯田がみんなに席に座るように促すが全員座っていて付いていないのは彼だけだった。核心を瀬呂に言われ飯田は一瞬硬直した後席に座る。

飯田が座ったくらい 타이ミングで予鈴が鳴り、教室に相澤が入ってくるが頭部が包帯でグルグル巻になっていた。

「先生無事だったんですね!!」

「無事言うんかなあアレ……」

脳にダメージが残っているのか教壇に立ってふらつとする相澤。

「俺の安否はどうでもいい……何より戦いはまだ終わってねぇぞ?」

（え?まさかやるの?一昨日の今日で開催決めたの?流石は雄英??）

相澤のその一言で一気に教室内の緊張が高まり、峰田なんかは頭を抱えて震えている。が相澤から出た言葉は

「雄英体育祭が迫っている!」

『クソ学校つぼいの来たあああああ!!』

体育祭。

その開催に盛り上がりを見せる生徒達。上がるテンションとは裏腹に懸念もある。そんな気配を感じ取ったのか相澤は逆に開催する事で雄英の危機管理体制を盤石だと示すという考えらしいと伝え警備を五倍に強化すると伝える。

「何より雄英の体育祭は……最大のチャンスだ」

それから体育祭の規模を含め将来への道を示すメリットを説明し、それが年に一回しかないチャンスであり、ヒーロー志望なら絶対外せないイベントだと断言しHRが終了した。

四限目 現代文 終了

「あんな事があつたけど」

通常授業が終了し、昼休み。切島を初めとし案の定生徒達のテンションは上がつていた。その様子に呆然とする出久。そんな出久に独特な燃え方で当然だと言う飯田。

「確かに燃えるよ……特に僕みたいな」

「デク君、飯田君……頑張ろうね体育祭」

「顔があれだよ麗日さん!」

出久の言葉を遮るように麗日が今まで見たことない様な顔で頑張ろうと言ってくる。その様子には芦戸が麗日じゃないと呟き、変なこと言おうとした峰田の頬を蛙吹が思いつきりぶつ叩いた。そこからはキャラのふわふわした麗日の頑張るコールがしばしの間続いたのだった。

(そーいや……麗日さんに聞いてなかったな……)

教室でのコールが終わり仲良く階段を降りる出久、麗日、飯田の三人。A組では入学生間もないのに見慣れたこの組み合わせである。

「お金!」

「究極的に言えば……」

会話の流れで出久が麗日になりたいたい理由を聞いて、麗日はお金と答えてから恥ずかしそうにするも、自身の事を話し始める。

麗日の家が建設業をしているのだが最近仕事がなくて財政難を抱えている事。その後麗日は

「私は絶対ヒーローになってお金稼いで、父ちゃんと母ちゃんに楽しませたいんだ」

力強く真つ直ぐな瞳でそういった。決意の籠った瞳、飯田はブラボーと拍手を送る。出久もまた頑張ろうと麗日に拍手を送る。

「そういうえばデク君はなんでヒーローに？」

「それは」

恥ずかしさで頭を隠す麗日だったがふと気になったので出久へと聞くが出久が話そうとした瞬間廊下のカドからオールマイトが現れ出久を食事へと誘う。

「乙女や!!」

オールマイトの誘い方、持っていた弁当の包が可愛かった事もあり吹き出す麗日。

「……………え、えつと」

「折角のお誘いだ。行ってきたはどうだい？」

「そうだよ!」

「……是非」

少し考える出久の背中を押した二人。出久は何だろうと思いながらもその誘いに乗ったのだった。

「おせえ!!」

「かつちゃん!?!」

オールマイトに誘われ仮眠室に着くと爆豪がいた。彼は二人がつくなり机をバンつと叩く。

「すまないね、それで話というのだけど」

オールマイトは素直に謝罪し、出久もごめんと呟いた後席に座る。二人が腰掛けオールマイトが話を始める。

「一時間前後!?!」

オールマイトから言われたのは自身がもう全力を出せる時間が無いこと、マッスルフォームの維持ですら二時間が限界という話。そしてワンフオーオールを出久に継いでもらいたいという提案だった。

「……どうするよデク」

出久は熟考した後答えを出す。

「……ごめんなさい無理です。引き継ぎたくない訳じゃないんです。他でもない貴方に見出して貰えて嬉しいんです。無個性な僕に話をくれて本当に嬉しいんです。……ですが僕には無理です。少なくともミラーワールドがある以上は……ライダーバトルも始まってしまった可能性が出てきました。ミラーワールド抜きにしても僕にはやらなきゃ行けないことがありますから」

「……ま、個性ありゃこつちで出来ることも増えるが……デクと同じ意見だな」

その言葉に自分達が死ぬ可能性が高い。という意味を含めて乗せる出久。爆豪もまたそれに頷く。

オールマイトはその事を察して拳を強く握りしめる。

「すまない………私も戦えていれば………」

「別にあんたのせいじゃねえよ。俺達が自分の意思で決めた事だ」

「僕達は僕達の意思で契約して戦ってます。仮にライダーバトルが始まっていたとしてもそれは変わりません」

「まだ敵と決まった訳じゃねえしな」

二人の覚悟を決めた瞳。

瞳に映るものをオールマイトは知っている。

自分がなろうとして、実際になったもの。

止まれないし止まらない。

(この二人は)

「話はそんだけか？なら戻るぞ」

「緑谷少年、爆豪少年」

だからこそオールマイトは立ち去ろうとする二人に

「こんな時に不甲斐ない限りだが……雄英体育祭。その時君達がいる事を知らしめてほしい。君達ならいずれ私を超えるヒーローになるだろうから」

「ッ……出来る限りで」……覚えといてやるよ」

声をかけ、二人は頷きこそしなかったが了解の意思を示し仮眠室を後にする。残されたオールマイトは一人

「難しいな……教育というものは……」

誰もいない仮眠室で一人呟いたのだった。

「やっぱ断んのなお前は」

「うん……ごめん」

オールマイトと別れたあとと教室での帰路で呆れたようにいう爆豪に出久は謝る。

「謝んな。お前が決めた事に俺は何も言わねえよ。それにあっちの危険度は俺が一番よく分かってる」

「うん……………ありがと」

それから二人に会話はない。

未だ申し訳なさそうにする出久を見て爆豪はミラーワールドを知った日に出久から聞いた話を思い出す。

あの日爆豪は世界を知り、いつ死ぬかも分からない戦いに自分から飛び込んだ。それが目指してるものの形だと思ったから。出久と交わることの無い同じ道だと感じたから。でもだからこそ

(こつちを無下にして無いからこそ……………無個性への差別の緩和、果たしたい願い……………か)

ミラーワールドを抜きにして出久があの日漏らした言葉。オールマイトにも話してないだろう継承しない理由。それを知っているからこそ何も言わないし何も言えない。

(俺は……………いや、考えるのもめんどくせえ。こいつが決めた事ならそれでいい)

爆豪勝己の緑谷出久への信頼だった。

その日の放課後。

A組の教室の前には大勢の人が集まっていた。大声で先陣切つて驚く麗日に何事かと慌てる峰田。

「敵情視察だろ」

「雄英体育祭は僕ら以外にとつてもチャンスだからね。見ときたいんだと思うよ。それに僕らは敵襲撃で有名になつちやつたからさ」

そんな二人を素通りして帰ろうとする爆豪。その後ろで考察を述べる出久。

「んな暇あつたら少しでも強くなる努力しろつて俺は思うがな」

吐き捨てるような爆豪の台詞。その言葉があつてからかそれとも元々そのつもりだったのか一人の生徒が前に出て

「敵情視察？ 違うね少なくともおれは宣戦布告しに来たつもり」

気だるけに、堂々と宣言する。

「おもしれえ」

「体育祭のリザルトによつてはヒーロー科に来る可能性も有り得るだろうからね」

その宣言に意味を理解して、笑みを浮かべる出久と爆豪。爆豪はそのまま人混みをかき分けて帰つていく。入れ替わるようにして切島のような熱血感ただよう男がA組の前まできて宣戦布告。

この日放課後はA組が宣戦布告を受けるといふ形で幕を閉じた。

それから二週間、個々でできる競技を決めてからの練習。時間はあつという間に過ぎていくのだった

遭遇

〔Type M〕

雄英体育祭までの残り一週間前。

休日にて出久は一人都内のショッピングモールにあるCDショップへと足を運んでいた。

「あ、あった………って最後の一枚!?良かったあ」

出久自身元々音楽を聴く方では無かったのだが、彼の師匠である神崎がよく特訓の時に幅広いジャソル音楽を流していたため（神崎曰く音楽はいい。リラックス出来るし曲に合わせることでリズム感覚を養えるとの事）か自然と覚え、神崎の影響で一人の時も聞きながら特訓する事も多くなり、今ではヒーロー研究と同じくらい音楽が好きになり、好きなバンドのCDを買うくらいにまでなっていた。

出久はそのショップにあったお目当てのCDを見つけてそれが最後の一枚だと分かるとすぐに向かつてCDを手に取りろうとする

「あっ」「あっ」

出久とほとんど同じタイミングでそのCDに触れる手が一つ。何者かと横を向くと

見慣れた顔が一つ。

「緑谷じゃん。……もしかして緑谷も?」

「耳、耳郎さん!?も、もしかして耳郎さんも?」

出久はその日同じクラスの耳郎響香と鉢合わせた。

「まさか緑谷が音楽好きで、このバンドのファンだったとはね」

「う、うん。個人で特訓してる時によく聞いてるんだ。いろいろ聞いてるけどやっぱりこのバンドの曲が一番勇気を貰えるんだ」

「それウチもわかる!」

時刻は十二時。

あの後見知った顔ということもあってお互いに譲り合いが発生。店の中でそうこうしてても話が進まないということになり、出久が買って後日耳郎に貸すという形でCDを買ってシヨップを出た。

その時丁度お昼時ということもあって出久と耳郎はシヨップピングモールの中にあるカフェにて昼食を取りながら買ったCDのバンドについての話から始まり、

「ロックと言えばこっちはバンドの新曲聞いた?」

「聞いた聞いた!初めはいつもと違うと思ってたけど最後の、ね?」

「うん！ここでおとなしめの曲出してきたかゝって思ってたら終盤での盛り上がり、やばいよね!!」

「やっぱりそこだよね！分かってんじゃん!!」

お互い好みの音楽の系統がロックだった事もあり話は噛み合いに噛み合って、お互いに同意を放ち続けている。それから音楽性の話になり耳郎から

「折角だから緑谷も楽器やってみない!？」

「ぼ、僕!? た、確かに師匠から貰ったエレキギターがあつて師匠から基礎は叩き込まれているけど……………」

「マジ!? 緑谷の師匠何者なの!？」

そんな提案を受ける。出久は基礎なら分かると耳郎に返し、改めて出久の師匠が凄いと驚く耳郎。

「ならたまに一緒に練習しようよ！わからない所ならウチのわかる範囲で教えるからさー!」

「…………お言葉に甘えて！いい息抜きにもなるだろうし!!」

「よし！じゃあライン教えて！持つてるギターが何かも知りたいからさー!」

「あ、えつと…………お願ひします」

「携帯そのまま渡す!？」

それからライン交換等をしていたら時間は瞬く間に過ぎていき、いつしか日が暮れていた。

「つてもうこんな時間!?送っていくよ耳郎さん!」

「ウチもまだ話し足りないし家も近いからお願いしようかな……緑谷は大丈夫?」

「大丈夫。今お母さんに連絡入れた。気をつけてって」

こうして道中は目指すヒーローの話をしたりして出久は耳郎を

「ありがと、また明日」

「また明日」

家まで送った後帰路につく。

その帰り道

海浜公園を経由して自宅に戻ろうとした出久に耳鳴りと共に誰かの悲鳴が聞こえる。出久は一目散に駆け出すと、公園の建物の鏡から出た触手が女性の首に巻きついて鏡の中へと引き込もうとしている。女性は必死に抵抗しているがモンスターの方が強く引つ張られている。

「まずい!!」

飛び出して触手を掴む。その出久の声と誰かの声が重なる。見ると出久と同じよう

に触手を掴んでいる男子がいた。

「任せろ！」

男子は出久に触手を任せ、個性なのか手から鎌を生み出して触手をぶった斬った。触手が切られたことにより拘束が緩み女性は解放される。

「早く逃げて!!」

出久と男子は大声で女性に指示し、異形の何かに掴まれた恐怖からかパニックになって逃げる女性。

「お前あつちの事知ってるんだよな!？」

「つて事は君も!？」

出久と男子は女性が逃げたことを確認する前に手短かに会話をし、お互いに事情が分かると判断して触手の出ていた窓に向けてデッキを取りだし

「言いたいことあるけど」

「とりあえず今は」

出久はデッキを持った右手とは逆の左手を胸の前で握り右手をベルト付近で構え、男子はデッキを空に投げて右足を前に出す。

「変身」

出久はそのままデッキを差し込み仮面ライダーデクへと変身し、男子はデッキを頭上

でキャッチして空を円形に切るようにしてデッキを差し込み黒いライダーへと変身した。

それから二人は鏡の中へ入り込んだ。

鏡の中に入ると先程の触手の持ち主であろうイカを上下さかさまにしたような外見をしたモンスターが待ち構えていた。

「こいつは……バクラーケンって事は、おい！こっちは俺が」

そのモンスター突貫していく黒いライダー。出久は突貫する前に黒いライダーが言った言葉の意味を理解して周囲を見渡すと、交戦中のモンスターと似たモンスターが物陰からじつと戦いを見つめていた。

「確かにこのイカ型モンスターはよく一緒に見かけるけど……まあ今はそんな疑問は置いて」はあっ」

出久は疑問に思いつつ物陰に潜むイカ型モンスターとの距離を一気に詰める。イカ型モンスターは好戦的なのか出久が近づいてきた事をみるとすぐ触手を伸ばし出久よ首をつかも掴んだものの

『SWORD VENT』

レオの尻尾を型取った日本刀を装備した出久によって切られ怯む。そこを逃す出久ではなくすかさずストライクベントを使い青い炎で敵を焼く。吹き飛ばされたモンス

ターは満身創痍と言った感じで逃走を図るも

『FINAL VENT』

出久のファイナルベント『レオライダーキック』が炸裂し前方に蹴り飛ばされ爆発した。出久はモンスターから出た光の玉をレオが食べるのを見届けず先程の黒いライダーへと視線を向けると

「終わりだ」

丁度黒いライダーが止めを刺そうとしてる所で、黒いライダーはデツキからカードを取り出し左腕に着いた御手の様なものにスラッシュする。

『FINAL VENT』

カードが燃え尽き機械音がした後、契約モンスターと思われる半分くらいがメカメカしいモンスターがバイクになり黒いライダーがそれに飛び乗る。そこから小さな竜巻が起きるくらいに回転し、逃走を図るモンスターへと激突し、モンスターは絶叫を上げ爆発四散したのだった。

モンスターを倒してミラーワールドから帰還した二人のライダー。

「さてと、お互いに情報交換といきたけど、ちよつと遅いか？」

時間を確認すると十九時を回っていた。

「すぐにでもしたい所だけ……戻ってからでもいいですか？母さんも心配しますしなにより僕の仲間にも話したい」

「仲間がいるのか……何時くらいに戻ってこれそう？」

「大切な……親友です……九時くらいですかね」

「ふむ。なら待つてるわ。多分その頃には俺の仲間も合流するだろうからさ」

「貴方にも仲間が？」

「ん、まあな。これもそいつがいたから出来たようなもんだし」

「こうして出久は黒いライダーに変身した男子と一旦別れた。別れる前

「すごいや自己紹介がまだだったな。俺は物造 設計（ものづくり せつけい）。雄英高

校サポート科一年だ」

「雄英!?僕と同じ……で同年!？」

「ん?って事はお前も!？」

「うん。雄英高校1Aヒーロー科 緑谷出久です」

「うお、マジか、しかもAのヒーロー科か……?と詳しい話と自己紹介はまた後にしようか。後敬語はいいよ。同年年だし」

「……分かった。また後で」

お互い簡単な自己紹介をして同年で同じ高校ということに驚いたのだった。

〔Type B〕

休日。時刻は夕方、爆豪勝己は苛立っていた。

「待ってってば！」

「うっせえ！」

原因は先程から爆豪の後ろを付いてきている赤髪の少女。名前は雄英高校一年ヒ-

ロー科B組拳藤 一佳。

「お前は何も知らねえ！何も見てねえ！それでいいだろ!!」

「そういう訳には行かないよ。その……モンスターが人を襲ってるの見ちゃった訳だしさ……それにあんたが鏡の中に入ってるの見たんだ……」

事の発端はこの日の朝に遡る。

この日爆豪は朝早くに起きてトレーニングを兼ねてランニングをしていた。

ランニングを終え昼食を取ろうとしたタイミングで耳鳴りがしたため爆豪はすぐさ

ま駆けつけるとそこには鏡の中から出てくる糸に首を巻き付けられた男性とそれを助けようとする赤髪の少女の姿があった。モンスターは中々引き込め無かったからかその脚を鏡から露出させる。

「何……………あれ」

「チツ」

男性はそれを見て絶望的な顔を浮かべ、少女は意味がわからないという顔をする。爆豪はそんな苛立ちながら先に敵の糸を爆破し糸を断ち切った。

「そいつ連れて早く逃げろ!!」

「え、でもあんたは」

「いいから早く行け!!死にてえのか!!」

鬼気迫る状況。少女は状況が掴めずわけがわからないながらも、優先するべきなのはこつちだと判断し恐怖で気絶した男性を抱えその場を後にする。

「変身」

爆豪は少女が行く様子を見たあとデツキを鏡にかざし、腰あたりでデツキを強く握りしめた後ベルトに差し込み変身し、鏡の中へと入っていく。

「一体……………どうなってるの……………?」

その様子を男性を抱えながら確認した少女はさらなる疑問に襲われた。

それから危なげなくモンスターは倒し、昼食を終えランニングを再開したものの、
(あれは一体……それにあいつ爆豪だよね？A組の)

「あつ」

「あつ」

悩む少女と爆豪は出会ってしまい、事情を説明してくれと付きまとわれているという訳だ。

「待ってよ、あれはなんなの？あんたは何者なの？」

「知るかよ。つーかお前こそ誰だよ」

「今更!?!私は拳藤一佳。あんたと同じ雄英の一年B組だよ!」

「そうか」

立ち去ろうとする爆豪の腕をガシッと掴む拳藤。

「待って待って、私も名乗ったんだから」

「爆豪勝己。A組。…これでいいだろ」

「うん………つて違う!」

「るせえ!!(だあああおくそつ。めんどくせえ!!)」

何としてでも食い下がろうとする拳藤に苛立ちを募らせていく爆豪。そんな爆豪だ

「気にすんな。すぐに分かる」

電話越しで気にすると返してくる幼なじみとの電話を容赦なく切る。

「えつと……?」

「九時に海浜公園だとよ。メシ食ってくか?」

「え……あ………はい?」

それから爆豪は拳藤を連れて一旦自宅に戻ってから海浜公園に向かった。母親にはいろいろ詮索されたがただの同級生と説明し、それが中々受け入れられなかったのでますます苛立ち募らせたのだった。

情報交換

『情報交換』

「……えつと君は？」

「私は……雄英高校一年ヒーロー科B組拳藤一佳」

「同じ……えつと僕は雄英高校一年ヒーロー科A組、緑谷出久です」

出久は物造との話の前に爆豪達と合流し、海浜公園へと向かっていた。

先人切って歩いてるのが爆豪の為必然的に出久と拳藤があとを追う形になり軽く自己紹介を済ませる。

「えつと……それで拳藤さんは……知ってしまったの？」

「知ってしまったって……鏡の中から出てきた糸と巨大な脚を持った生物の事……だよね？それと彼が何かをつけて鏡に入って行った事も……だよね？」

(がつつり見られてんじゃん)

驚く出久だったが、自分も常に注意出来てるわけではないので強くは言えない。むしろモンスターを逃がさなかった事を喜ぶべきだ。と思うが故にどうしようかと悩み、どの道物造とそこも話すだろうしと結論を出す。

「なるほどね……………拳藤さん、今ならまだ引き返せるけど……………知りたい?」

「……………(コクリ)」

「そっか。分かった。彼らとする話は絶対に他言無用でお願い。補足は後でするから
さ」

それから特に会話もなく海浜公園に到着する三人。海浜公園には既に先客がいて、物造の隣に青年が立っていた。

「この子達か? 設計」

「……………少なくともあの緑髪はあっちの事に詳しい」

出久は出会ったことのない青年に見覚えがあった。

「ただ、探偵ヒーロー『木村』!? 個性は『追憶』で死んだ人の死後一日以内なら死ぬ直前の記憶を見れるって言われていて、その個性で多くの事件を解決に導いてるって言われているあの!? あの! サインください!」

「なんだファンか……………はい」

説明からサインくださいとノート出して礼をするまで手早く済ます出久に、説明のあった木村は呆れつつもサインをする。

「彼……………いつもあんな感じなのか?」

「アイツと関わんなら慣れる。」

「いいんだ……………」

ほか三人もその光景に呆れつつ、終わるのを待つ。

「さてと、とりあえず分かっている事について話そうか」

「はいよ」

それから木村の指示で出久、爆豪、拳藤、物造、木村の五人は海浜公園の奥へと行き、物造が個性を使って向かい合うようにベンチを出す。片方には爆豪、出久、拳藤が座りもう片方には木村、物造が座る。少し息をついたあとお互いにまずはとデツキを掲げ改めて自己紹介を始める。

「まずは俺からした方がいいな。さっき紹介があつた通り探偵ヒーロー『木村』で通つてゐる。歳は30。本名も木村だから気軽に木村と呼んでくれ。あっちではベルデつて名乗つてる」

「えつと僕は緑谷出久。雄英高校一年ヒーロー科A組です。個性は無個性。ミラーワールドではデクつて名乗つてます」

「…爆豪勝己。こいつと同じく雄英。個性は爆破。あっちじゃトラストつて名乗つてる」

「物造設計。個性『設計』。設計図通りに身体ん中に溜め込んだ成分を作り上げることが出来る。設計図をみれば完璧なんだけど余裕がないから設計図は頭ん中に叩き込んで

ある。あっちではオルタナティブかな」

とまあライダー達がデッキを持って自己紹介すると事情を知らず残される彼女はやりにくい訳で

「えつと……雄英高校一年ヒーロー科B組の拳藤一佳です。えつと……その……何も知らない……です」

申し訳無さそうにする。

「場違いと言いたいところだが……他言無用にしてくれるならここに居ていい。いろいろあるけど鏡の中からモンスターが現れてあまつさえ人を喰らってるって知られたらパニックは必須だからね」

「………はい」

出久にも釘は刺されているし言われている事が理解出来たので素直に頷く拳藤。それから木村を中心に情報を交換していく。

「あっちについて君達はどこまで？というか君達二人はどれだけ戦ってるんだ？」

「僕は………約一年半くらい」

「俺は七ヶ月くらいか？」

「マジか………つて……君達中学生からあんな所で戦ってたのか?！」

思ってた以上に長い期間に木村は驚いたがすぐに会話を戻し、出久がそれに答える。

「と、先輩ヒーローとして言ってみたら俺達もそこまで詳しい訳じゃない、俺は二ヶ月前からだし……良ければ教えてくれないか？」

「ミラーワールドは昔一人の手によつて、ある目的のために作られた世界です」

バトルロワイヤル。願いをかけた戦いについて端折つて話をする出久。最後にミラーワールドは一度閉じられたと説明する。

「閉じられた？だがモンスター達は今人を襲つているだろ？」

「師匠曰く『歪み』を通つてらしいです。一度閉じられたミラーワールドに生きようとするモンスター達の想いが増幅して『歪み』が起きる。モンスター達はそこを通るか自ら『歪み』を発生させてこつちに干渉してくるかのだつちかみたいです」

「なるほど……」

「他言無用なのはそれも理由で、都市伝説と同じで肥大化してしまうものは収集が付かなくなり不安がはびこり『歪み』が広がり、ミラーワールドが膨張する可能性が高いと見てるからなんです」

「ほむほむほむ。なるほどなるほどそういう事か」

出久達が話してる横でメモをとつていた物造は一人何か掴んだ様子を見せる。注目が彼の所に行くとは彼はメモに使つていたスケッチブックを一ページ一ページ見せていく。そこには遭遇したモンスターについて事細かく書かれている。

「デクと同じタイプかよ。情報なんざ集めなくても勝ちや関係ねえだろ」

「いや、時に情報は最大の武器になる」

「で、その“歪み”ってのはこの黒い霧みたいなものであつてるか？ モンスターを倒すと消えたから気になつてた」

「うん。……それにしても良くかけてるね。僕がまとめたのもあるから情報の結合頼める？」

「おう、そこは腕の見せどころ！」

出久からモンスターについてまとめたノートを貰い自身のノートと見比べて情報を修正、補正していく物造。

「そいや、あんたらはデッキを何処で入手した？俺らは……師匠から貰ったんだが」

「拾った……と言うには出来すぎてる気がするが、モンスターに襲われてた人を助けた方がいいものの逆に俺はあつちに引き込まれた。偶然にもそこにデッキが落ちて何故か使い方が分かつてたから使ってみるしかない」と

「拾った、ですか。モンスターとの契約はされてたんですか？」

「契約……とは」

出久はモンスターとの契約のルールについて説明する。

「待ってそれじゃあんた達は」

「…………一度ライダーになつたら死ぬまで餌の面倒を見なくちゃいけないのか…………あの時こいつが怒つてた理由はそれか」

「どうやら木村には思い当たる節があつたみたいだ。」

「設計君も拾つたの?」

「いや、俺は自分で作つた」

「はあ!」

さらつと言う物造。話の流れでてつきり拾つたと思つていたし、なにより作れるなんて思わなかつた二人は当然驚く。

「俺の個性『設計』は身体に右で触れた物質の成分を溜め込むことが出来る。ガラスだつたらガラスの成分を木なら木の成分を。パーセントで感覚的に分かるそれを組み合わせせて左手で作るのが俺の個性。貯めるまでに時間がかかるのが難点。一応物質そのものを設計し直すことも可能」

「こいつは一ヶ月前偶然俺のデツキに触れて個性が発動、デツキが完成していたつて事」
「だが、その為には設計図が必要何じゃねーのか?それとも頭ん中にあらかじめあつたんか?」

「それは…………俺にもよく分からなくてな。ただデツキに触れた時記憶の中で、白衣を来た誰かが俺にミラーワールドを閉じろつて言つてた気がする」

それ以外は全然と話す物造。

ここから先は仮説と憶測混じりにお互いに情報を整理していく。

「とりあえず今わかつてる事はこれくらいか。こつちはこつちで探ってみるとするよ」

「他のライダーの情報は慎重にお願います。少なくともインペラーは敵側ですし、敵連合にも一人はいる可能性があります。それとこの戦いからは」

「分かっているさ。俺だつてヒーロー誤りはしない。それと……気をつけるよ」

こうしてひとしきり情報交換を終えた五人。木村は急な仕事が入ったらしく慌てて帰る。

「個体名称……確かに決めとくとわかりやすくなるね」

「こそ。それにしても緑谷のこれ事細かに記してあんな」

出久と物造は互いにモンスターの情報整理にハマってしまつて行き戻つてきそうにない。故に

「あークソつ……なんだ。送つてくわ」

「……………いい、いいよ」

「良くねーよ。もう十時回つて夜おせえ。下手に関わつちまつた事を抜きにしても最低限はやるわ。それに……まだ聞きてえことあんだろ？」

「……………うん」

爆豪が拳藤を送っていくことになったのだった。

「あのさ」

「どした？」

爆豪が拳藤を送っている道中。爆豪の裾を掴んで拳藤が聞いてくる。

「どうして……戦えるの？ここと違って怪我しても治せない、はてに死んでしまうかもしれない世界でどうして」

当然だろうと爆豪は思う。

結局出久や自分がおかしいのだと。デツキ自体はおそらく継承可能だろうから大人に任せればいいんだと。実際それを思いつかなかったほど爆豪も出久も馬鹿じゃない。

「悪い奴がいたらぶっ殺す。それだけだ」

「そう……なんだ」

「逆におめーはどうなんだ？全てを知って何か得られたか？」

「何も……ただ、私の知らないところで命懸けで戦ってたんだって悔しさが強い……かな」

拳を強く握る彼女の表情は暗く、これ以上会話なく拳藤の家に着く。礼を言う彼女に「おい。おめーがどんな結論を出すかは知らねえが、自分だけは曲げるなよ」

「……………」

爆豪はそんな言葉を投げつけたのだった。

次の日の放課後

「爆豪！特訓付き合って！」

「ああ!?!なんで俺が!!」

「いいの？あつちの事」

「ツテメ。ツチ！全力で来ねえと殺すぞツ」

A組に入って爆豪に壁ドンして爆豪と訓練場に行く拳藤の姿が確認された。

「ミラーワールド滞在時間」

緑谷出久 変身前<一ヶ月>

変身後<二ヶ月>

爆豪勝己 変身前<三十分>

変身後<一時間>

八木俊典 <五分>

物造設計 変身前<三分>

変身後<八分四十五秒>

探偵ヒーロー木村 変身前<五分>

変身後<九分五十五秒>

拳藤一佳 <九分>

神崎 風 <ミラーワールドの住人>

雄英体育祭 開幕

出久が木村達と合流してから出久は物造をオールマイトに合わせ事情を説明。

「オールマイト!?……いやトップヒーロー、事情くらいは知ってるのか……」

オールマイトは一年にもう一人、ライダーがいた事に驚き、物造はオールマイトがミラーワールドを知っていたことに驚いた。それから軽く挨拶をした後オールマイトが注意と謝罪をし、物造が緊張しながらもうなづいて彼等の自己紹介は終わった。ちなみに出久と爆豪はオールマイトに木村の事はまだ伝えていない。

それから一週間は早いもので、雄英体育祭当日。

「群がれマスメディア!今年もおまえらが大好きな高校生たちの青春暴れ馬……雄英体育祭が始まデイエビバディアアユレデイ!!?!”

今か今かと観客やプロヒーロー達が会場内へと入り込んでいた。会場に人が入っていく中マスコミの検査は特に厳しく行われていた。

「例年メインは三年ステージだけだ」

「今年に限っちゃ一年ステージ大注目だな」

そんな彼らの目的は一年生。例年通りなら経験も実力も高くなっている三年生に集中するのだが今年はお襲撃を耐えきったという経験が箔となり注目を集めている。

ザワつく会場前と打って変わって1A控え室。

体育祭を楽しみにする観客、マスコミと違って静かに燃える生徒達。各々が気合いを入れたり、緊張をほぐしている中で出久もまた精神統一を行っていた。

「緑谷、爆豪」

そんな出久と近くにいた爆豪に轟が話しかけてくる。何かと思つて出久が身構えていると轟が歩み寄ってくる。

「爆豪はともかく緑谷より俺の方が実力が上だと思つてる」

「喧嘩売つてんのかア？ テメエコラ」

「落ち着いて、かつちゃん」

売り言葉に買い言葉今にもプチ切れそうな爆豪を出久が宥める。

「お前ら、オールマイイトに目掛けてもらつてんだろ。別にそこを詮索するつもりはねえが、お前らには勝つぞ」

分かりやすい宣戦布告。出久はともかく爆豪と轟の間に迸る火花。一瞬触発の雰囲気になったと感じた切島が止めに入ろうとするがそんな切島の頭をがしつて掴んだ後「テメエ」そせいぜい油断しねえこつたな。それと………舐めプしながら勝てる程俺も

こいつも甘くねえぞ」

「…………ツ」

吐き捨てるように控え室を出ていった。言葉を入れ替えるように

「…………確かに君は僕より強いよ。…………でもね…………だからって僕が全力を出さない理由にはならない。…………僕も獲りに行くよ、全力で」

「…………ああ」

出久が強い口調でそういった。そんな出久に轟は感心したように声を漏らしてロツカーに持たれる。出久は見届けたあとと再び呼吸を整えて気持ち落ち着かせる。

ちなみに切島は困惑したままである。

そして

「二年ステージ！生徒の入場だ!!」

生徒たちは、一本道に繋がってる門へと駆け寄る。そんな中緑谷の心の中にオールマイトと神崎から貰った言葉が湧いてくる。

『君達が来たこと世に知らしめて欲しい』

『大層な夢、いいじゃねえか。頑張れよ出久』

出久は言葉を噛み締め一步を踏み出した。

そんな出久の想いを知ってか知らずかその光景を見ている者達がいる。

「出久……」

家の中で心配そうに体育祭が映し出されてるテレビを観ている緑谷の母、緑谷引子。

更には……

「……………」

「静かだな」

「彼も彼で思うところがあるのでしょう」

「……………そういうもんかね」

雄英体育祭が映し出されているパソコン画面を、まさかの敵連合の死柄木弔がじつと見つめていた。

体育祭は個性ありきで数々の種目を競っていくものだ。が、雄英の体育祭は相澤が言っていたように規模が大きく全国ネットの中継もされる大イベントだ。この大イベントで生徒たちの個性を見て、サイドキックとして雇いたいと言うプロも多いと聞く。『ドーセテメエらあれだろ!!こいつらだろ!!敵の襲撃を受けたにも拘らず鋼の精神で乗

り越えた奇跡の生徒達！ヒーロー科！ヒーロー登場だあー！！」

「観るならやつぱA組でしょお！！」

という歓喜の音が挙げるなか、1ーA組がゲートから歩んで行き登場してくる。

「落ち着いて、落ち着いて」

ドキドキと心臓の音が鳴る出久、確かにこの中で大勢の人たちが観に来るのは流石に緊張する。

「大勢の人たちが来てヒーローになるために何をどう見られるのかも、今後のヒーローとしての役割…なるほど！！ヒーローにとって必要なことだな！」

(それもあるけど……いや、今は考えなくていい)

飯田は納得した様子で頷く。出久も同調し深く考える仕草をとった。

「めっちゃ持ち上げられてんな…スゲエ緊張すんな、なあ爆豪！」

「しねえよ。ワクワクだボケ！それに……今は考えることじゃねえな」

切島は半分緊張の顔、半分かワクワクな様子だ。爆豪はそう言うのと、轟を睨みつける。

「……体育祭、か」

睨みつけられた轟はと言うと歓声をあげる観客達を見渡す。

「これほどの数となると…『アイツ』も来てるな…」

誰かを探すその瞳には少なからず憎悪の様な何かが宿っていた。

A組が緊張しながら、楽しみにしながら列を作っているとB組、普通科と言った具合に入場してくる。とはいえA組を見る者達の反応を見て自分達が引き立て役だと落ち込むものしばしば見える。

ピシヤアアアン

ザワつく生徒達を黙らせるための音が一つ。音の方向を見ると全身タイツでメガネをしている女性、〃18禁ヒーロー ミッドナイト〃が教壇に立っていた。

「18禁なのに高校にいていいのか？」

「いいー」

18禁ヒーローと名乗っているくらいなので当然そんな疑問も出てくるわけだが、そんな声を一括し、選手代表の名前を呼ぶミッドナイト。呼ばれた爆豪は先程までミッドナイトが立っていた場所に立ち

「せんせー……………つっても何か言うつもりもねえが……………」

轟の方をチラッと見てから

「勝つために〃全力〃出せ。AとかBとか普通とかそんな御託並べる前に〃全力〃出して生き残り!!じゃねえと……………ここに立つ資格すらねえ!!」

力強くそう宣言した。

「ま、一位になるのは俺だな!!」

……最後の一言が余計でかなりブーイングの嵐が飛び交ってる訳なのだが、当の本人は気にせず悠然に教壇から下りて戻ってくる。

(かつちゃん……………)

出久は教壇から降りてくる爆豪を見てなんとも言えない気持ちになったのだった。

「それじゃあ早速第一種目始めましょうか」

「雄英って何でも早速だね」

爆豪が列に戻ったのを確認したミッドナイトが小型モニターを見るとルーレットのよう回転を始めていた。

「いわゆる予選よーさて、運命の第一種目、今年は…………コレ!!」

【障害物競走】

ミッドナイトの声とともにルーレットが止まり種目の名前をモニターに残す。

「計一ークラスでの総当たりレースよ！コースはこのスタジアムの外周約4km!」

それからミッドナイトからルールの説明が入る。と言ってもコースさえ守れば何をしても構わないってだけなのだが。

「さあさあ位置に付きまくりなさい」

ぞろぞろと生徒達がスタート位置に溜まっていき、全員が集まったくらいで入口の三つのボタンが点滅し始める。

(ふう……頑張らないと)

三つ目のボタンが点滅し

『スタートオオオオ』

スタートの掛け声と共に、生徒達が思い思いに駆け出して、ようやく雄英体育祭一年の部が幕を開けた。

障害物競走

「つてスタートゲート狭すぎだろおおお」

スタートの掛け声と共に走り出した一年生達だったが、スタートゲートが狭くぎゅうぎゅう詰めになる。そんな中で一人戦闘を取った轟が

「最初のふるい」

地面を凍らせつつ、生徒の足やら手やらを凍らせ後続の邪魔をしながら一人悠々と氷の上を滑って行く。

「甘いわ轟さん！」

「そう上手くいかせねえよ!!」

轟の独走かと思われたがそう上手く行くわけもなく、A組の生徒は当然として、B組、普通科と轟の予想以上の生徒が氷を避けていた。

「轟のウラを………GRAPE」 WHAM

「峰田君!?(あ、もぎらないとくつつかないのか)」

大人数で通ると細く感じる道を進んでいくと広く開けたような場所が見える。生徒の一人峰田が先手をとろうと前に出ると、巨大な鉄の塊に殴り飛ばされ回転し飛んでい

く。

「ターゲット……大量」

「入試の仮想敵?!」

ざわめく生徒。

『さあ、いきなり障害物だ!!まずは手始め……ロボ・インフェルノ!!』

の前に立ちふさがるロボ群衆。たじろぐ生徒の中で最初に動いたのはまたしても轟だった。

「(せっかくならもつとすげえの用意してもらいてえもんだな)クソ親父が見てるんだから」

轟はロボを一気に凍らせて一人悠々と隙間を通って進んでいく。他の生徒が続こうとするも

「やめとけ、不安定な体勢ん時に凍らしたから」

「みんな!!倒れる!!(流石だね。轟君)」

「…倒れるぞ」

『1A轟!!攻略と妨害を同時にこいつあシヴィー!!』

不安定な状態で凍らされたロボが体勢を崩し倒壊し、後続の道を塞ぐ。その倒壊に巻き込まれた居なかったのは出久が大声で叫んだため一瞬動きが止まったからだろう。

「死ぬかあー!!」

「俺じやなかったら死んでたぞ!!」

「〃個性〃 ダダ被りかよ!!」

……………「硬化〃」を持った切島と「ステイル〃」を持ったB組の鉄哲徹鐵の個性ダダ被り組が巻き添え食っていたみたいだが……。

「おもしれえが……先行かれてたまるかよ」

『「A爆豪下がダメなら頭上かよー!!クレバー」』

多くの生徒が下で溜まっている中、爆豪が爆破を使いロボの頭上へと飛んでいく。

「正面突破しそうな性格してんのに避けんのかね」

「便乗させて貰うぞ」

爆豪に便乗し瀬呂と常闇もまた頭上に行く。

『「一足先行く連中A組が多いな!!やっぱ」』

「他の科やB組も決して悪くは無い!ただ……」

「立ち止まる時間が短い」

既に敵との戦闘を経験したA組を「上の世界を肌で感じた者」
「恐怖を植え付けられた者」
「対処し凌いだ者」などと相澤は分け

「各々が経験を糧とし迷いを打ち消している」

と評価する。

「こんな序盤で動けなくなる訳には行かないからね」

出久もまたロボ全体に衝撃を通し無力化し進んでいく。

「チョロいですわ!」

「道が開けた」

各々が個性を上手く使っていく中ここで八百万が大砲を創造し、巨大仮想敵を撃破、

「〃倒すべきもの〃として見ればドンくさい鉄の塊。突ける隙も見えてくらあな」

道が開け勢いづいていく。

そんな生徒達に新たな壁が立ち塞がる。

『落ちればアウト!!それが嫌なら這いずりな!!』

「大げさな綱渡りね」

立ち止まる生徒。一足早く蛙吹が進む。

「綱渡り………大人しく綱渡る気はないよ!!」

『1A緑谷ロープを上手く利用して飛んでる!?なんつージャンプ力してんだ!?』

(ジャンプ力もそうだがロボの装甲を持ったままあのロープに飛び乗ってバランスを全く崩さない、か)

出久は綱の丁度中心辺りに飛び決して多くはない反発力を利用して、2回のジャン

プのみで次へ次へと進んでいく。

「デク君凄!! ウチも負けてられへんな」

「フフフフフ」

麗日が気を引き締めて進もうとすると後ろから奇妙な笑い声が聞こえる。振り返るとゴーグルをかけ足はブーツで、サポートアイテムらしきものを大量に装着している謎の女性がいた。

「私のサポートアイテムが脚光を浴びる時! 見よ! 全国のサポート会社」

「サポート科!」

「でもアイテムの持ち込みは禁止なんじゃ……」

「甘いですよ。日々実戦訓練を受けている貴方達と公平を期すために私達は自分で開発したサポートアイテムのみ装備を許されているのです!」

サポート科。この大会では何事にも公平にするため、サポートアイテム及びコスチュームの着用、使用は禁止されている。がサポート科が自身で開発したのもや青山のベルトと言ったように事前に申請し通ったものは着用、装備が認められている。

「さあ見て出来るだけデカイ企業!! 私のドツ可愛いベイビーを!!」

ヒーロー科、普通科が多く、のヒーローに見てもらえるチャンスであると同時にサポート科もまた自分の開発したサポートアイテムを売り込むチャンスなのである。

いろいろなごたごたがありつつも、一位は変わらず轟焦凍。彼は既に最終関門へと差し掛かっていた。

『一面地雷源!!!怒りのアフガンだ!!!』

地面を凍らせると地雷源まで凍ってしまい後続に道を作ってしまうので地雷を回避して進んでいく轟。その後ろでは地雷に巻き込まれた生徒が多数。

「まあなんだ………ようやくあつたまつてきた」

と、ここで爆破を使って空中を行く爆豪が轟に並び立ち、先に行く。

『ここで先頭がかわったー!!喜ベマスメディア!!お前ら好みの展開だああ!!』

爆豪だけでなく、地雷が爆発する前に走り抜ける飯田や、ツルのような髪を自在に操る女生徒など後続もスパートを掛けていく。

だが引つ張りあいながらも先頭二人がリードする。

「……借りるよ………かつちゃん」

BOOOOM

そんな中突如後方にて大爆発が起きる。

『後方で大爆発?!?!なんだあの威力!?!』

(ツチ…………念の為逸れとくか)

爆豪は何が起きるか予測し一足早く脇に逸れる。

『A組緑谷爆発で猛追ーっーっか!!! 追い抜いたああああ!!!』

爆豪が脇に逸れたのと同じタイミングで爆発に乗った出久が、トップ二人を追い抜いた。ここで止まる出久ではなく空中で息を吸い込んで

「すうううう “爆ッ”」

「ぐっ」

「身体がしび」

“声帯砲”を前方位に打ち出し、直撃した轟を始め生徒多数の動きが鈍る。出久も動きは鈍ったものの音で発生した衝撃波で前に出たため一歩リードを取る。

「甘かったなア!! デク」

「いや今回は、僕の方が上だよ!!」

「アアツ…………テメー!」

その横を爆破で追い抜く爆豪。当然の事ながらそれを読んでた出久は未だ離していなかった装甲を思いっきり振り上げて地面にある地雷を爆破、先程よりも小さい爆発が起き、爆豪がそれに巻き込まれるも、持ち前の能力で最小限に抑え進むも

『さあさあ序盤の展開から誰が予測出来た!? 今一番にスタジアムに帰ってきたその男

……緑谷出久の存在を!!』

今年の障害物競走一年の部は緑谷出久の一位に決まり、

「ツチ……考えんのはテメエの方が上か」

二位が爆豪勝己

「……………」

三位がツルのような髪を持つ女生徒、B組塩崎茨と続々とゴールインしていき、

「ようやく終了ね。それじゃあ結果をご覧なさい」

生徒全員がゴールをした所で上位四十二名が発表された。ちなみに轟は順位を落とし五位

「ま、とりあえず上位に食い込めたからいいや」

物造は最後の最後に青山を抜き四十二位という結果に収まった。

ちなみにこの体育祭、経営科は参加するメリットがないので

「どう思う?」

「とりあえず緑谷の株価急上昇だね。個性は“音”だと思っし売り出す方法は多いんじゃない?」

「確かに。事務所経営を請け負ったとしてそこを押し付けてくのがいいんじゃないかな」

生徒を見て事務所経営の過程を組んでいたりと、ドリンクを売っていたりと勘を養う場として利用していた。

要する暇なのだ。

騎馬戦

障害物競走が終わり、二回戦の種目が発表。

二回戦は騎馬戦となる。

ルールは簡単は簡単。障害物競走上位の四十二人はバラバラになり騎馬を作る。その組んだチームのポイントの合計したものが持ち点になり、チームのリーダーは鉢巻を巻いて所持する。

つまるところチーム作ってポイントを奪い合いう至ってシンプルな戦いだ。

因みに得点は障害物競走の順位ごとに違う。

「えー、以上！ルールの説明は終わりよ！それでポイントなんだけど42位から5P
 ……10Pと言った具合よ。そして1位…緑谷出久！得点は…”10000万P”よ
 ！」

(……………マジか雄英)

一人だけ明らかに違う桁を言われたものだから当然他の生徒から注目を集める。
 ……狩る的な意味で。

「それじゃこれより15分！チーム決めの交渉タイムよ！」

ミッドナイトによりチーム決めへと入っていく生徒達。

「氷対策芦戸、頑丈切島、瀬呂飛ぶからサポートしろ。以上」

「うっし!!宜しく頼むわ」

たくさんの生徒に囲まれながらも即決でチームメンバーを選ぶ爆豪。

「仲のいい人とやった方が良い!」

「ありがとう麗日さん……………となると後は」

「轟君に便乗する訳じゃないが俺はずっと君に負けてばかりだ。だから……………今回は君に挑戦する」

と、麗日は仲のいい出久と組むことを決め、麗日と組む出久に宣戦布告する飯田。

「おまえの巨体と触手ならオイラの体すっぽり覆えるだろ!!」

「……………名案だ峰田」

身長を生かした組み合わせを取る峰田だったりと騎馬が出来ていく。それでもやっぱり狙われやすい出久は避けられている感じが否めない。

どうしようかと考えていた出久の背後から忍び寄る影一つ。出久はその人物に心当たりがあった。

「私と組みましょ一位の人!」

「き、君もしかして設計君の言ってた発目さん!」

「おや既にござ存知であるなら話は早い。あなたの事は知りませんが立場利用させて下さい！」

サポート科一年 発目 明。彼女は自分の目的を隠すことなく押し出して来る。その上でサポート科のアイテムを使えると言うメリットを提示

「これなんかお気に入りです……」

「なるほど、あ、そうだ発目さん、せっかくならラジエーターのここを……」

「むむ。そういうことなら……」

(即気いあつとる)

発目との会話を弾ませていく出久。だったが途中でもう一つ足りない部分を補える人物を思案し

「……………お願いしてもいいかな？」

とある人物に声をかけ出久のチームも決定した。

「15分経ったわ。それじゃあいよいよ始めるわよ」

「なかなか面白い組が揃ったな」

『さあ上げてけ鬨の声!! 血で血を洗う合戦が狼煙を上げる!!!』

爆豪チーム TOTAL 670P

轟チーム TOTAL 600P

緑谷チーム TOTAL 10000325P

「麗日さん！発目さん！常闇君！よろしく!!」

司会のマイクのカウントが終わり一斉に駆け出す騎馬。その狙いはもちろん。

「実質その争奪戦だ!!」

「まあ……そう来るよね、逃げるよ!!」

出久。常闇に促され逃げの選択をとうとうとするも騎馬の足を柔らかくなくなった地面に取られてしまう。

「（この個性恐らく……柔化つて所かな？それより今は）顔避けて!!」

出久は背負ったサポートアイテムを起動し空中に逃げると言う手段を取り柔らかくなった地面から脱出する。当然それだけで逃げられはしない。耳郎すかさずイヤホンジャックを伸ばすも、常闇の個性「黒影」によって防がれる。

「いいで黒影。常に俺達の死角を見張れ」

「アイヨ!!」

「すごいや常闇君に黒影。足りない防御力を補って余りある全方位防御!!」

「選んだのはお前だ」

「着地するよ!!」

麗日以外を浮かしてサポートアイテムの限界重量をカバー。着地もスムーズに行く。それを狙って葉隠チームが動こうとするも、

「漁夫の利」

B組の男子にハチマキを奪われてしまっていた。

『まだ2分も経ってねえが早くも混戦状態!!各所でハチマキの奪い合い!!』

「アハハハ!奪い合い……?違うぜこれは一方的な略奪よお!!」

「(障子君……?いや今の声は) ツツ!!まずい足元気をつけて!!!」

「何!?!取れへん!」

出久は一足先に気づくも気づいた時には遅く麗日の足に峰田のもぎもぎがくつついてしまい身動き取れなくなる。峰田チームの策はそれだけでなく戦車と化した障子の腕の中から蛙吹の舌が伸びる。

「わっ!?!」

「わ!?!」

出久はギリギリでそれをかわし、後ろにいた鉄哲も避ける。出久は一旦離れようと再び空中に逃げるも無理な脱出で発目のアイテムが引きちぎれる。

サポートアイテムを失いつつ離れたのもつかの間

「こういうのも有りだよなア!!」

「常闇君っ!!」

一人爆破で飛んできた爆豪に狙われる。幸いにも黒影のガードが間に合い爆破は当たらない。

「ツチ、めんどくせえ!!おい瀬呂!!」

「人使いが荒い!!」

空中で一瞬止まった爆豪を瀬呂がテープを引っつけて回収する。マイクが良いのかと疑問を言うが、審判役のミッドナイトからOKサインが出る。

とここで七分が経過したためマイクが現在のランクをモニターに映す。結果はバトル派手さと違い出久以外がパツとしていなかった。

「単純なんだよ」

B組の男子こと物間が爆豪に近づきハチマキを取ろうとするも逆に爆破されたのだが、切島のような個性で防がれる。防いだついでに煽る物間。

「……コピー」か。おい切島、予定変更だ!!B組処すぞ!!」

「え!!緑谷はいいのか!？」

「……そつちはちよつと思う所があんだよ」

「こうして爆豪の狙いはB組へと移る。」

出久はその様子を見て冷静に分析。

「そろそろ獲るぞ」

このまま逃げ切ろうと考えるもその前に轟チームが立ちはだかった。もちろん出久を狙うのは轟チームだけではない。他のチームも狙いに走るが

「しつかり防げよ」

上鳴の無差別放電が発動し、多くの騎馬の動きが止まる。轟はすかさず地面ごと他の騎馬を凍らせ、ついでにハチマキを回収する。

「ベイビー改良の余地あり」

「やっぱ電気はきつい……常闇君大丈夫!?!」

「あの程度の装甲太陽光なら敗れていた……奴の放電が続く限り相性最悪だ」

出久はすかさず防御に回った常闇の黒影を心配する。というのも騎馬戦開始前に聞かされていた黒影の弱点。光が今の電光も入るのかと言ったものだ。常闇もその意図を察し現状を伝える。

「知られてないなら牽制にはなる。落ち着いて対処しよう」

〃試合残り一分〃

『残り時間約一分!!轟フィールドをサシ仕様にし一気に奪取!!とか思ってたよ5分前までは!!緑谷なんとこの狭い空間を5分間逃げ切っている!!』

マイクの実況により残り時間一分となった今、出久は未だ轟から逃げ続けていた。

「皆残り一分。この後僕は……………」

停滞していた状態。とここで

「トルクオーバー!レシプロバースト!!」

「あんツツ」

「ツア」

飯田が突然の超加速を使い仕掛ける。が出久の判断の方が早く声帯砲が直撃し、轟チームの動きが鈍り音の影響の薄い黒影が轟チームをガードした。

『飯田予選で見せなかったよくわからん超加速を使うも緑谷の判断の方が速かったー!!』

ただ突然の事で出久はもちろん前騎手を務めていた常闇の動きも鈍ってしまう。

「(め)ん」

「き、きに、す、する、な」

「常、闇君!!黒影、をデク、君浮か、す!!」

どっちにしてもこの状況をいち早く打開するため麗日が機転を聞かせ出久単体を浮

かす。常闇も麗日の意図を察して黒影を使い出久を空中へ投げ飛ばす。

『緑谷単体で空中にういて行くー！あれもう爆豪でも届かねえだろ!!』

「ま、なんだ。勝つなら全力でつったろ？一位でもねえのに保守的になってんから負けんだよ!!」

『爆豪チーム4本奪取で2位をキープ!!』

そんなマイクから紹介のあつた爆豪は物間を含めたB組を一蹴。一気に三位との差を開いていた。

そして時間は過ぎ去っていき

『TIMEUP!』

マイクにより終了の合図が会場に響いた。

「解……………除」

「黒影」

「アイヨ」

終了がなり、麗日の個性で空高く上がった出久。麗日が個性を解除すると、当然の如く重力に逆らわず落ちてくる。そいつを黒影が回収する。

『早速上位四チーム見てみようか!!一位緑谷チーム』

「ごめ、ん、最後、焦つ、だ」

「気にするな」

『二位爆豪チーム!!』

「……………つけ」

『三位とどろ……………オイ!!心操チーム!!?いつの間に!?!』

「御苦労様」

『四位轟チーム!!』

「……………くそっ……………」

『以上4組が最終種目へ……………進出だああー……!!』

こうして騎馬戦の結果経て最終種目の出場者が決まったのだった。

『1時間程昼休憩挟んでから午後の部だぜ!』

騎馬戦を終えそれぞれが感想を漏らし退場していく。

「あれ?デク君と爆豪君は?」

その中に出久と爆豪の姿はなかった。

願いを掛けたゲーム／今後の事

「……かつちゃん気づいた？」

「つたりめエだ」

昼休憩に入る少し前、騎馬戦の結果発表があつてすぐ出久と爆豪の二人はミラーワールドの中へと潜っていた。出久程ではないが爆豪もミラーワールドでの滞在時間は長い。それ故にこうして変身せずに契約モンスターに引きずり混んでもらつて生身で入る事もある。出久はともかく爆豪は個性を使えるメリットが発生するため必ずしもそれが悪い訳では無い。

「来たか………つて生身で大丈夫なのか!？」

「慣れてますから」

そんな二人と同じくミラーワールドに潜つて緑色のカメレオンを型どつた仮面ライダー「ベルデ」が合流し、流れるようにオルタナティブも合流する。

「遅くなった」

というのも出久・爆豪の二人は轟が氷のフィールドを作つた時、表面に黒いフードを被つた人物がいたのを目撃したため、木村及び物造にメールを送り、合流して現在に至

ると言う事だ。

「こっからだ」

四人が合流しUSJの前まで来ると、まず爆豪が中から妙な気配を感じ、他の三人も同じような気配を感じる。気配を感じてすぐ出久・爆豪は変身し仮面ライダーとなる。

「時間もない行くぞ」

二人が変身出来たのを確認し四人のライダーは勢いよくUSJの扉を開けた。

「……………あいつ」

扉を開けてすぐ広場にフードを被った人物を視認し警戒を強める四人。

「来たか」

そんな四人の登場をまるで予期していたかのようにフードの人物が話し始める。その声は男性のような女性とも取れる声でUSJ全体に響き渡る。

「デク・トラスト・ベルデ……オルタナティブ」

ただ名前を呼んだだけにフードの人物から発せられる声に何処か威圧感があり、思わずびくつきとなる四人。

「戦え」

威圧感のある声から出る言葉は威圧感があり、四人は聞かされている感覚に陥る。

「最後の勝者だけがたった一つのどんな願いをも叶える事が出来る」

四人に向けているようで別の誰かに向けられた言葉。

「戦え 最後の一人になるまで」

「んなもんでめえの都合だろ!!」

「僕達は人を守る為にライダーになったんだ!!」

言葉を使い終える前に出久と爆豪は互いに武器を装備しフードの人物に襲いかかるも、その攻撃は謎の障壁に阻まれ、

「クソっ」

「っあ」

「大丈夫か!?二人共!!」

逆に障壁を広げられ元いた位置まで吹き飛ばされる。

「戦え 願いある者達よ」

フードの人物は何事も無かったかのように言葉を区切り、まるで初めからそこにいなかったかのように姿を消した。

出久達がフードの男と遭遇したと同じ頃、とある部屋の一室で

「ふんふーん」

巨体の黒い生物を解体している男がいた。

黒い生物の身体は解体された箇所から否応なしに再生されていく。
「超回復って便利だな」

男は解体した腕や足を鏡に向かって投げつける。鏡が割れると思いきやそんな事は無く表面が歪んで黒い生物の部位を通していく。

「まだまだ強くなってもらわないと」

男が言う。鏡の表面から多くのモンスター達が今か今かと待っている。男は切つては投げ切つては投げを繰り返す。やがてモンスター達は満足したのか鏡の表面から映らなくなる。それを見届けた後

「それで？願いつてのはなんでもいいのか？」

「戦えインペラー。勝てばどんな願いでも叶える事が出来る」

「プレイヤーの人数は？」

「いずれ分かる」

フードの男に話しかけフードの男は淡々と答え、男が何かをいう前に姿を消した。

「そうかい……………面白くなってきた」

男……………羚羊は誰もいなくなった部屋で不敵な笑みを浮かべ、いいタイミングで携帯が鳴り響く。

「とりあえず、あの二人には声掛けとくか…おつ、いいタイミング」

『久しぶり羚羊。何やら面白い事になってんな』

電話先の相手はよく知る人物。

「ああ。折角だ、*「駿」* お前も合流しろ」

『つてこたあ参加すんのな？俺達が生き残るまで共闘でいいよな？』

「いい。少なくとも二人強い奴がいる。そいつら殺るまでは、な」

『了解。………なら来るかわかんねえけど *「タイガ」* の奴にも声掛けとくわ』

「面白くなってきた」

通話を終えた羚羊は再度不敵な笑みを浮かべた。

影でそんな事があったことを知らない出久達がミラーワールドから戻ってきて今後について話し合おうとすると昼休憩終了のアナウンスが流れる。

「オリエンテーションは参加出来なさそうだね」

「はなっからするつもりはねえよ」

出久と爆豪、物造は急いで会場に向かうと

『最終種目の発表の前に予選落ちの皆に朗報だ!!あくまで体育祭!全員参加のレクリ

エーション種目も用意してんのさ！そして見よ！！」

テンションの高いマイクのアナウンスが流れたと同時に、会場にぞろぞろとA組、B組、サポート科の発目などが姿を見せる。

『本場アメリカからチアリーダーも呼んで、より一層盛り上げ……て……ん？何だアリヤ……』

「なーにやってんだアイツら？」

そんな中ふとマイクと相澤は、何かに気づき眉をひそめる。それは……

『どーしたA組!!?何でチアの格好してんだ!?!』

A組の女子全員はチアの格好をして登場した。

「……………」

沈むような表情のA組女子。それを見た峰田と上鳴はガッツポーズをする。そんな中で葉隠だけテンションあげていた。

『さあさあ皆楽しく競えよレクリエーション！それが終われば最終種目!!』

A組女子のみ沈んだ空気を見無視しつつマイクがアナウンスをかける。それにより最終種目は一体一のガチバトルという事が分かり、主審のミッドナイトがトーナメントの対戦相手をくじ引きで決めようとしたのだが、そこで尾白が拳手をして辞退を申し出る。

「俺、辞退します」

理由は騎馬戦での出来事をほとんど覚えていないから出る権利がないと言う。尾白と同じチームで騎馬を務めていたB組の庄田二連撃も同様の理由から棄権を申し出る。

「気にしすぎだよ！」

「そんなんだつたら私だって」

皆はせっつかく見てもらえる機会なんだから思い直せというけれど、尾白はプライドが許さないという事で庄田は体育祭の趣旨と反するのではと主張する。

『何か妙な事になってるが』

主審のミッドナイトはそれを受け、

「そう言う青臭いのは……………好み!!」

(好みで決めた)

といって受諾して二人の辞退を認めた。

尚、物造は参加するとの事。

「繰り上がりは五位の拳道チームだけど…………」

「そういう話で来るんなら…………ほぼ動けなかった私らよりアレだよな?..な?」

その代わりに拳道の提案から鉄哲チームが上がることになり、B組の鉄哲徹鐵と塩崎茨が入る事になった。

こうして十六名の出場者が決まりモニターに対戦相手が表示される。

緑谷 V S 心操

轟 V S 瀬呂

塩崎 V S 上鳴

飯田 V S 兎目

芦戸 V S 常闇

物造 V S 八百万

鉄哲 V S 切島

麗日 V S 爆豪

「あんだだよな？緑谷出久って」

「……………ん、あ、よもツツ」

モニターに相手が表示され出久の対戦相手の心操が出久に話しかけ、出久がそれに応じようとした所尾白に口を塞がれる。そして尾白から忠告を受ける。

とまあこんな事があつたりしたが

(緑谷は上がってくるだろうな……)

「飯田って貴女ですか？」

「そうだが……………」

「……………八百万」

「麗日、か」

「ひいつ」

皆思い思いに対戦相手を見つめるのだった。

個人戦までの間、生徒達がレクリエーションを行っている時

「俺の分も頑張ってくれな」

「うん」

出久は尾白から話を聞いたあと関係者以外立ち入り禁止の文字が書かれている部屋に來ていた。

「おせえぞ」

「ごめんごめん」

その部屋にはオールマイトを初めとして、物造、木村、爆豪、拳藤の五人が集まって座っていた。オールマイトは本来の姿を取っていたが木村、物造、拳藤の様子から既に説明を終えた所だと納得する。

「緑谷君も来たことだし今後について話そうか」

今後というのは言うまでもなくミラーワールドの事と戦いについてだ。フードの男の残した言葉が本当なら既にゲームは始まってしまっている。

「まず、君達はゲームに参加する気なのかい？」

オールマイトの問いに一泊置いて出久から順に

「始まってしまった以上はやるしかありません」

「どの道俺らも手詰ってたんだ。やるしかねえよ」

「俺はどっちでもいいけど……どっちにしてもモンスターは倒さないとって思ってるししばらくはやるつもりです」

爆豪、物造が答える。その瞳からは相応の覚悟が伺えた。

「……………ここは一人のヒーローとして止めるべき所なんだろうけど……………彼らが俺達より長く居られてかつ戦いに慣れてるのは事実。参加してるライダーの数も不明……………だから頼らざる終えない状況……………歯がゆいな」

「……………木村君もそう見るのか」

木村もまた一人のヒーローとして参加を決めている。オールマイトは呆れたように、そして自分の不甲斐なさを嘆くように呟く。

「それって……………人を殺すって……………事だよ、ね？」

そんな中ライダーでもヒーローでもない拳藤は恐る恐る問いかける。

「それは」

「今まで以上にギリギリの戦いになる。殺られる前に殺るしかねえなんざざらにある。だからそうなる可能性は低くねえ」

「そう……………なんだ」

言いくそうにする出久の代わりに爆豪が答える。

「……………めんなさい……………少し外します……………」

その場から逃げ出すように拳道は部屋を後にする。

「追って、かつちゃん」

「んで俺が。それにまだ話は……………っておい」

「いいから」

その後を追わずように出久は爆豪の身体を押しして外に出す。爆豪は不本意ながらも頭を掻きながらそれを追った。

「……続けていいのかい？」

こくりと頷いた出久は物造とアイコンタクトを取り、意図を察した物造はボイスレコーダーを設計して録音ボタンを押す。

「………とりあえず、しばらくはライダーに警戒しつつ可能ならデッキの破壊及び契約者の確保、モンスター討伐を行うって事でいいかい？」

残った者の中に意を唱える者はいない。

「緑谷少年。二ついいかい？」

方針が決まった所でオールマイトが話題を切り出す。一つは何故木村の事を黙っていたのか。という質問だった。

「………疑っていたんでしょね。木村さんの事。デッキの入手についてどうにも出来すぎてる気がしたんです」

「爆豪君も言ってたが……まあそうだろうな。それに関しては理解出来る。オールマイトの秘密を考えれば尚更、慎重になるのも分かる。そこは俺に免じてこれ以上の言及はやめておいてくれないか？」

「分かっているさ………ただ、確認はしておかないとね」

オールマイトは一つ目の話をそこで区切る。問題は二つ目。オールマイトは爆豪の発言に引つ掛かりを覚えていた。

「先の爆豪少年が言ってた『手詰まり』とは何の事だい？」

「そう言えば言っていたな」

手詰まりと言うことは何かを探っていたということでありオールマイトはそこに気がついた。

「……師匠の行方ですよ」

「神崎君の……？」

「神崎とは誰の事だい？」

出久は事情を知らない木村と物造に掻い摘んで説明する。二人は納得するようになつた。

「他のライダーと遭遇した時真っ先思い浮かんだのが師匠でしたから、僕とかつちゃん
は師匠の居場所と過去を追ってるんです。最もほとんど手掛かりは無いですけどね」

遠くを見つめる出久の視線、オールマイトはそれ以上何も言えなくなる。

「バトルに参加していれば師匠は必ず現れます。断言してもいい。師匠なら多分僕達以上
にあのフードの男について把握してるでしょうから」

それだけ言い残し物造にボイスレコーダーを託して出久は部屋を後にした。物造は
あとを追うように部屋を出ていった。残されたプロ二人は

「神崎君………か」

「信用出来るんですか？その人」

「分からない。だが緑谷少年の言うように手詰まりである事は確か……か」

「……俺達は想像以上に重いものを少年に背負わせてるのかも知れませんか……」

ため息と共にそう呟いたのだった。

緑谷V S心操

「はあ」

オールマイト達と別れたあと、雄英敷地内の木陰にて拳藤一佳は一人ため息をついていた。

「はあ」

ため息が出るのも無理はなく、少なからず懂れていたオールマイトの真実に加え、ライダーバトル、前に聞かされたミラーワールドモンスターの事、その全てが拳藤の整理が追いつかない。

「私には何も出来ない……………よね」

考えれば考えるほど無力感に苛まれ参加する予定だったオリエンテーションの参加の気力も無くなってくる。

「なーにしかけたつらしてんだ。てめえは」

「ひゃっ!?……………爆豪」

拳藤が落ち込んでいるとその首筋にひんやりと冷たい物が当たり思わず飛び退いてしまう。飛び退きついでに振り向くとそこにはスポーツドリンクを差し出している爆

豪の姿があつた。

「で、てめえは何を悩んでんだ？」

落ち込む拳藤に対して爆豪が訪ねる。

爆豪としても、長い間ミラーワールドで戦っていた自分達と違い、彼女は一週間前までその存在すら知らなかつた一般人なのだからそれも無理はないとは思うし、ライダーの件は巻き込むべき事では無かつたと今更ながらに思つてはいる。だが巻き込んだ者として最低限だけ伝えるのは何か違う気がする。一週間くらいとはいえ彼女と組手をしてるから尚更そう思つている。

「べ、別に何でもないよ」

そんな気づかいに気づいたのかそういつて、スポーツドリンクを受け取つてから立ち去ろうとする拳藤の腕を爆豪が掴む。

「何でも無くはねえだろ。……分かんだよ、近くに何でも抱え込んじゃう馬鹿がいつからよ」

「……………馬鹿つて緑谷の事？」

「……………さあな」

言い当てられそっぽを向く爆豪。そんな爆豪を見てふと笑が零れる拳藤。そんな拳藤を見て爆豪は

「ま、安心しろ。俺は道を踏み外す気なんざさらさらねえ。それよかこれからためえにも色々とやってもらうかもしんねえから覚悟しとけよ」

拳藤の頭に手を置いてそれだけ言って去っていく。拳藤はその後ろ姿を見て

「……分かってんじゃない」

自分の心境を理解してであろう彼に微笑を浮かべてその後を追ったのだった。

「拳藤何やってたんだい？オリエンテーション参加してなかったみたいだけど……具合悪い？」

「……ちよつとね。でも大丈夫!!」

「お、来たか爆豪。もうすぐ始まつぞ」

「……アア」

『サンキューセメントス!』

爆豪達が会場に戻ると丁度いいタイミングでマイクのアナウンスが鳴り響き、一対一

のバトルの宣言を始める。

『一回戦!!今の所トップを走り続けているがなんだその不安そうな顔。ヒーロー科緑谷出久!!』

対

ごめん。まだ目立った活躍なし!普通科心操人使!ルールは簡単………』

そこから一回戦の紹介を終えルール説明に入る。その間に心操が出久に対して話し始め

「分かるかい緑谷出久。これは心の強さを問われる戦い。あの猿はプライドがどうか言ってたけど」

『レディイイイ』

「チャンスをドブに捨てるなんて馬鹿だとは思わないか?」

『START!!』

「なんて事言うんだ!!」

開始の合図と共に発せられた友達をバカにするような心操の言葉に出久は思わず反応してしまう。それがトリガーとなり出久は動きを完全に止める。それを見て勝ち誇ったように呟く心操。

「俺の勝ちだ」

『全つつつつ然目立って無かったけど彼、ひよつとしてやべえ奴なのか!』

薄暗く、無表情な顔を浮かべる心操。会場の誰もが息を呑む。この男、得体が知れないと。

(二人の簡単なデータ、個人戦になるからまとめてもらっておいたんだが……だからあの入試は合理的じゃねえんだよ……と言いたいとこだが緑谷の前例があるが故に一概にそうとも言いきれない。が、それでも心操が個性を使つて突破しようとするそりやポイント稼げねえよ)

相澤は緑谷と心操の二人の簡易データの資料を見つめて心の中でそう呟いた。

心操人使 “個性” 『洗脳』

彼の問いかけに答えたものは洗脳スイッチが入り彼の言いなりになってしまう。本人にその気がなければ洗脳スイッチは入らない。

そんな心操の個性を受けた出久は身動き一つも取れず、その場に硬直したまま、心操はそんな出久に語りかける。

「お前は恵まれていいよなあ。振り向いてそのまま場外まで歩いて行け」

出久はその命令に対して従順に従い場外へと歩いていく。マイクのアナウンスも含

め誰もが出久の敗北を予想していた。客席でその様子を見ていたただ一人を除いて。

「……………おい耳。出久の心音聞こえるか？」

「へ？いや、この距離は流石に」

「そうか」

「いきなり何で？」

「いや、見てろ。倒れるぞ」

『おつとお!!緑谷ここで前のめりに倒れ込んだああああ!!』

爆豪の予想通り出久は場外ギリギリでそのまま倒れ込み動かない。

「な、なんでだ!?身体の自由は聞いてないはずだろ」

突然の事に焦る心操。が心操が問いかけても出久は立ち上がらない。停滞して二分からいたった頃、心操が倒れた出久を場外に出そうと近づくと、それを察したのか突然出久が立ち上がり

「ツハア……………ハアツ（やつぱりこれ、危ないな）」

「な、なんだよ、何したんだよ!?!」

心操の問いかけに答えない出久。心操はネタが割れたと考えるも出久に口を開かせようと言葉を選ぶようにするが

「お前はいいよな！恵まれて！戦い向きの派手な……………ツ!?!いない!?!何処に!?!」

瞬きの瞬間、視界から消えた出久に行動が遅れる。

「(ごめんね)」

その遅れが命取りとなり、背中に強い衝撃を感じ

「あ、がっ」

全身が痺れるような感覚に襲われ、その場に倒れふし今度は心操が動けなくなる。

「なんだ？何された？体が、動かない」

全身が痺れ、動けなくなつた心操の身体を出久は掴んでそのまま場外に出し、出久の

二回戦進出が決定した。

『二回戦進出!!緑谷出久ー!!』

「え、緑谷何したの？」

「詮索しねえ方がいい。聞きてえならデクに直接聞け(あいつあの瞬間、止めたな)」

『IYAHHA!緒戦にしてはとても地味な戦いだったがとりあえず両者の健闘を讃えてクラップシュハンズ!!』

パチパチと会場の観客たちは、二人の健闘に大きな拍手を送る。出久に敗けたことで心操の顔はとても暗い表情でいた。先ほど言いかけていた言葉に思い当たる節のあつた出久は心操に

「……………君ならなれるよ。個性に頼りきらない戦い方を覚えれば」

「ツ!? 慰めのつもりかよ!!」

「……………違うよ」

心操の目を真っ直ぐ見つめて発せられた言葉。その言葉に心操は出久が本気でそう思っていると確信してしまい、それ以上何も言えなくなる。

二人にそれ以上の言葉は無い。

「心操！ お前スゲエな！」

ふと戻ろうとした心操を呼び止める声の一つ。心操が応援席に振り向くとそこには、同じ普通科の生徒達が、心操に手を振っていた。

「障害物競走一位のヤツといい勝負してよ、俺ら普通科の期待の星じゃん！ 周り見てみろよ！」

一人の男子生徒に促され周りを見てみると…スカウト目的でやって来たヒーロー達だが、心操の個性について話をしている。

「これ対敵にしちやかなり有用だぜ欲しいな…！」

「雄英も馬鹿だな。あれ普通科か？」

「まあ受験人数ハンパないから仕方ない部分はあるけどな」

「敗けはしたが、もし戦闘経験の差が互角だったら………もったいねえ」

プロヒーロー達から色んな言葉が飛び出てくる。

「なあ、分かるか？心操、お前スゲエよ」

多くのヒーローや、同じクラスの生徒達は、自分の個性を認めてくれた。それは出久の言った事を裏付けているみたいだった。

そう思い改めて言われて、褒められた事を嘯み締め、今まで『敵向き』だと言われて来た言葉と、今言われた言葉がこうも違う事に、心操は表情には出していないが内心は嬉しかった。

「てめえに乗せられた訳じゃねえが………ここは結果によっちゃあヒーロー科編入も検討してくれるんだと……覚えとけよ？俺は今回はダメだった……けど、駄目だとしても俺は絶対諦めない……ヒーロー科入って資格取得して……絶対お前らより立派なヒーローになつてやる……!!」

「………応援してるよ！（あ、やられ）」

心操がそう言つて出久は頷くものの、洗脳されてしまった。

「俺と話すヤツつて、大体警戒するんだけどさ………お前は違うんだな……そんなんじや足元すくわれるぞ？せめて」

心操はニヤリと笑みを浮かべて、

「みつともない負け方はしないでくれ」

出久の洗脳を解く。

「……………うん！（あつ）」

「……………（馬鹿かよ……………フツ）」

うっかりまた洗脳にかかってしまった出久に対して思わず苦笑した心操だった。

（爆豪……………あんな言い方されたら気になるじゃん）

先程の戦闘の時爆豪が訪ねて来たことについて疑問に思っていた耳郎は出久に訪ねようと思い出久を探していた。

（あ、緑谷。と、相澤先生？）

「一回戦おめでどう……………と言いたいところだが緑谷お前あの時何した？」

曲がり角で出久の姿を捉えた耳郎は出久に訪ねようと近づこうとするも視界に相澤の姿が写り思わず隠れてしまう。盗み聞きは流石に悪いと思いつつも好奇心の方が上回り、二人の会話を聞く。

「あの時……………倒れ込んだ時ですよね」

「そうだ」

「言わなきゃ……ダメですよ……耳郎さん」

「ッ!？」

突然自分の名前を言い当てられてビクつてなってしまう耳郎。耳郎は驚いた勢いで隠れていた角から飛び出す。相澤はそれを見て

「耳郎か。まさか盗み聞きしようと思ったんじゃないだろうな？」

「ちち、違います!!」

「先生、場所的に仕方ないと思うんですが」

端的に呟く相澤に否定の言葉を漏らす耳郎。そんな耳郎をフォロウする出久。

「で、どうした？」

慌てる耳郎に対して切り替えの早い相澤。

「え、えーと……あの時爆豪がウチに緑谷の『心音聞こえるか』って聞いたのが気になつてて」

「心音………っってお前まさか」

耳郎の言葉にある予想をしてしまう相澤。

「え、あ、はい。あの瞬間心臓を止めました」

「なっ」

自身の予想が当たっていた事に相澤は絶句し、耳郎もまた絶句した。

「師匠から習った技術の一つです。洗脳や催眠系の個は死人を操れない事が多い。ここで言う死人が……心臓が動きを止めた者、脳に酸素が回っていない者を指しているのだとしたら、それを対策するには心臓を止めるのが一番早いって仕込まれました。心臓が動いていないと油断も誘えます」

「心臓を止めたって……普通死ぬだろ」

超人社会で多種多様な個性が存在するとはいえ、心臓を止めるなんてことをすれば死は免れない。緑谷出久は無個性だから尚のこと。

「やっぱり異常ですよね……」

なんて事はないように出久は言う。が自分がどれだけ常識外れの事を行っているのかは理解しているのでスグにバツが悪そうに視線を下げる。

「ともかく、出来たとしても本当に必要な時以外二度と使うな。死ぬためにヒーローになる訳じゃないんだろ？」

「そ、そうだよーい、いきなり心臓の音が止まったなんて……」

「分かってます……誰よりも。耳郎さんもありがとう。心配してくれて」

有無を言わさない雰囲気思わず相澤も耳郎も言葉を飲み込んでしまい、かろうじて耳郎が「当然じゃん！」と言葉を繋げそんな耳郎に

「ありがとう。……って時間！戻ってほかの試合見よう？」

「え、あ、緑谷待つて！」

出久が再度お礼を言って他の試合を見るために応援席へと歩いていく。耳郎はそれに続いていく。会釈をして立ち去る出久の後ろ姿をみて

(……………声帯砲だけじゃなく、戦闘能力の高さ、反応速度、バランス感覚、衝撃を全体に通す技術、相手の視界から消える技術、更には心臓を一旦止める技術……………緑谷が師匠と出会ったのは12の頃と言っていたから……………たった3、4年で無個性の緑谷をここまで育てたのか？おそらく緑谷はまだ使える技を残しているだろうし……………一体どんな人物だよそいつ)

内心でそんなことをボヤいたのだった。

ちなみに

「やりすぎだろお」

次の瀬呂、轟戦では、試合の前にエンテヴァーとの会話でイラついていた轟が、先手を取ろうとする瀬呂を超巨大な氷を出して凍らせ勝利を収め

次の

上鳴、塩崎戦では、無差別放電を仕掛け速攻する上鳴の放電を塩崎は個性のツルで

アーチ状の盾を作ってガード、個性の代償でアホになった上鳴をツルで拘束しそのまま場外に放り投げ勝利を取めたのだった。

一回戦

第一試合 勝者 緑谷出久

第二試合 勝者 轟焦凍

第三試合 勝者 塩崎茨

物造VS八百万

「デク、おめえ止めたな？完成してんのか？」

「ほぼ。後は戻る時のラグが安定すれば大丈夫」

「2〜5分だったか？」

「うん」

「せいぜい死なねえように完成させろ」

耳郎と共に応援席に戻った出久は早速爆豪に声をかけられ、先程のことについて聞かれ対応する。それが終わったと同じくらいに二回戦が始まった為出久は

「なるほど。ツルは確かに強力な個性。伸縮自在だけでなく………ブツブツ」

いつものようにノートに向かって観察し結果をまとめる。

(緑谷………)

そんな出久の事を心配そうに見る耳郎に対して爆豪が話しかける。

「おい耳郎。あの馬鹿から聞いたんだな」

「……う、うん」

「そう心配しねえでも大丈夫だ。あいつは」

耳郎にそう言う爆豪の言葉には不思議と強い説得力があり、不本意ながらも納得してしまう。それだけ言つてとつとと応援席から出ていく爆豪。残された耳郎は気持ちを切り替え

「緑谷、怖いよ。で何書いてんのさ」

「それ私も気になる」

近くにいた麗日と共に出久のノートを覗くのだった。

そんな話をしている間、飯田対発目戦が始まった。

飯田はサポートアイテムをフル装備しているが、これは発目の提案であり、真面目である飯田は彼女の熱意ある頼みに断れずアイテムを着用したようだ。

飯田曰く「ここまで来た以上 対等だと思おうし対等に戦いたい」という理由でアイテムを渡して来たそうだ。

(いや、それ騙されてる)

「あー、ありや利用されたな……」

応援席の出久と、物造を初めとしたサポート科の人達はこれから起こるであろうことに対して顔を引き攣らせている。

そんなこととはつゆ知らず主審のミッドナイトは青くさいのが好みだから許可した

ようだ。

「あーうん。知ってた」

結果は予想通り、発目は個性「ズーム」を使ってサポート会社を見つけては、飯田に装備させたアイテムを使いまくり解説していく。

「全く売り上げ根性凄まじいな」

飯田は訳が分からず彼女の思うがままに利用され。その光景を目撃していた会場全体が言葉を失っている。

「あのアイテム……機動性を確保するだけじゃなく……いや、それよりもっと汎用性を上げ……んー、改良点、改善点について話したい」

「デク君凄!?!」

そんなアイテム解説付きの鬼ごっこはその後、10分もの間繰り広げられ、そして

「ふうー全て余すことなく見て頂けました……もう思い残すことはありません! 飯田さんありがとう御座います!」

「騙したな?!」

発目は汗を拭い、自身のアイテムを売り込むために利用した飯田にペこりと頭を下げながら、自分が彼女の思うがままに利用されていたことによく気付いた飯田は怒りを見せる。が、そんな事をお構い無しに発目は自分からわざと場外にいき、その結果飯田

の二回戦進出決定した。

「さーて、発目の奴はああだったけど俺はそんなに甘くはねえぞ」

『おっと！サポート科物造設計、サポートアイテムを一つも装備してないぞ!』

「宜しいのでしょうか？サポート科の皆さんはサポートアイテムを装備出来ると伺っておりますが。それとも私では力不足との事なのでしようか？」

「別に舐めプしてる訳じゃねえし俺はこれでいいんだよ。それよりマイクせつかく似てる個性なんだ紹介してくれよ!!」

続く第五回戦。物造対八百万の試合。先程の事もあり会場全体が不安になるが、誰が見ても物造はサポートアイテムを装備せず八百万もまた装備してなかった。

『お、おう………気を取り直して、方や設計！方や創造！互いに万物を作り出す個性。形は違えど物を生み出す個性には変わりない！その手から生み出されるのは勝利か敗北か！個性破り対決その1、サポート科物造設計対ヒーロー科八百万百!!』

「つーわけだ。俺の個性は設計図が頭ん中にあるほど強くなる。自分で作ればいいんだからサポートアイテムは必要ねえ。そもそも俺がサポート科にいいのは自分の個性の幅を広げるためだしな」

「そういう事でしたか、早とちりして申し訳ありません」

先程の発言に対してしっかりと謝罪をする八百万。それを素直に受け取ってから八百万と顔を見合わせた物造はお互い頷いてからマイクの掛け声を呼び水に互いに距離をとる。

(物造さんの個性が私と似ているのであればまずは出方を見極める)

「設計 トランプ!!」

八百万が相手の出方を伺う為距離を置こうとする。そんな八百万の周りに大量のトランプが投げつけられその場で停滞する。

「何を……………きやつ!?!」

何をされたかと思議に思う間もなく停滞していたトランプが一斉に爆発し、爆煙が辺りを覆う。爆破そのものを咄嗟に創造した盾で防ぐ八百万。

「さーて、やりますか永劫鞭」

「おいデク」

「うん。しっかりと見ておこう」

その隙に武器を設計し装備する物造。

「鞭……………ですか」

八百万が見た武器の印象は鞭。

『サポート科物造設計……………なんだあの武器!!』

「鞭………というかあんなもの操れるのか？」

彼はひとつのもち手から十本の枝分かれした先端に刃物の付いている鞭を器用に扱
い総計二十本の鞭で頭上に結界を生み出している。

「んだあれ、器用なんてレベルじゃねえぞ!？」

普通の人間が同じ事をやろうとするとまず間違ひなく絡まるであろう鞭を一本も絡
まらせずに振り回している物造。

(とにかく間合ひに入るための武器を)

これに対し八百万は飛んでくる刃物を見極めかわしつつ武器を作るも、

「ッ」

作った所から一本の鞭に絡め取られ投げ飛ばされる。

「生半可な武器じゃ距離を詰めることすら出来ねえぞ」

「でした………ッ」

再び武器を創造しようとする八百万だったがそんな隙は許されず八百万のいる位置
に鞭が一本飛んでくる。

「悪いな、こいつを許した時点であんたに勝ち目は無くなった。これは鞭の結界『防衛こ
そ最大の攻撃』つてのを体現した武器なのさ」

物造の言葉を体現するかのようにつながして飛んでくる鞭。八百万は全く創造させて

もらえないだけでなく物造はその場所からほとんど動いていないのに八百万はフィールドの端へ端へと追いやられていき、ついに

『八百万さん場外!!物造君二回戦進出!!』

八百万はフィールドから出てしまい、この勝負物造の勝利で幕を閉じた。

「お前、自分に自信がないように見える。折角の個性なのに勿体無い」

「ツ、なにを」

「何でもないよ。次やる時楽しみにしてる」

対戦後物造からそんな事を言われ驚いた表情をする八百万。そんな表情を見てから物造はそんな言葉を残して去っていくのだった。

(自信がない、ですか)

八百万は心にもやっとしたものを抱えたのだった。

「永劫鞭。おそらく背後をとつても対応される。どう詰めるべきかな」

「んなもん。最初ぶちかますか設計させる間を取らせず攻撃すりやいいだけだろ」

「それが出来るのはかつちゃんくらいだよ……………」

「俺も爆豪に賛成だぜ!特攻上等!」

「それが出来るの切島ちゃんくらいよ」

二人の対戦を見ていた出久と爆豪は切島と蛙吹を交えて互いに攻略手段について話していた。その様子をみていた麗日は

「どうした？麗日」

「私そろそろだし控え室行ってくるね」

と、一人控え室へと足を進め、出久はそんな麗日をいつもと違う様子だと感じたのだった。

第六回戦となる芦戸VS常闇はというと

「闇影！」

闇影の容赦ない攻撃を持ち前の運動神経で何とかかわしていた芦戸だったが、中々距離を詰めさせてもらえず、最後の最後まで粘るも闇影相手に消耗していたのも相まって、フィールドから出てしまい、第六回戦は常闇踏陰の勝利に終わったのだった。

一回戦

第四試合 勝者 飯田天哉

第五試合 勝者 物造設計

第六試合 勝者 常闇踏陰

麗日VS爆豪

八百万戦の後くらいに、飯田が自分の不快なさを悔やみ反省をしてから控え室に戻る
と…

「飯田くん…お疲れ」

「お、うらら…：…かじゃないな！シワシワだぞ眉間が！」

「眉間が？」

いつも元氣盛んで表情豊かに笑顔を浮かべる麗日…：…ではなく、いつもとは様子が違う様子の麗日がいた。飯田の反応を見て自分がどういふ状態なのか察する麗日。

「あー、ホラ…：緊張だね、眉間に来てたね…」

「緊張…？ああ、麗日くんの相手、爆豪くんだもんな！」

麗日の言葉で飯田は、なぜ麗日がいっになく緊張してるのかを察し納得する。確かに相手があの爆豪となると訳が違う。

「うん…：超怖い…：…でもね…：…飯田くんのあのやつとか見ててね…：…」
「？」

自分を指した麗日の言葉に飯田は何のことかと首を傾げる。その時だった。

「麗日さん！」

控え室の扉が開きノートを手に持つて出久がやって来た。本来なら分析をしてい
るであろう人物の登場に麗日は当然疑問に思う。

「あれ？デクくん？会場は？他のみんなの試合見てなくても良いの？」

「あの後常闇君が攻め続けて勝利を収めて、今切島さんとB組の人がやってるところだよ」
「じゃあ、もうすぐ……」

麗日の纏う雰囲気が一層重いものになる。

「しかしまあさすがの爆豪くんも女性相手に」

「するよ。かつちゃんは。どんな相手、どんな状況でも全力で勝ちに行く。それがかつ
ちゃんだから」

飯田はそう言うものの、緑谷は首を横に振る。そもそもここでは皆んな夢を追い、全
力で戦っている。それは爆豪でなくとも手加減はまずない。

「だからさ……麗日さん……付け焼き刃でかつちゃんに対抗する策ノートまとめてみた
んだけど………いるっ」

顔を一層曇らせる麗日。そんな彼女に緑谷はノートを開き、渡そうとする。

「おお！それは良いな……！良かったじゃないか麗日くん！」

「ありがとうデクくん………でもいい」

「そっか。でも一つだけ……………それくらいならいい？」

「……………うん」

「僕に出来ることをかっちゃんが出来ないわけない。だから気をつけて」

「……………分かった」

意志を持つて麗日は出久の提案を断った。出久もそれを予想していたのか一つだけ麗日に言つてそれ以上は何も言わず、飯田もまた、空気を察して何も言わない。

「私も皆とライバルだから」

重い空気の中、麗日が立ち上がり

「決勝で会おうぜ！」

震える手で親指を立てながら少しぎこちない笑顔で出久と飯田に言った。

「……………頑張つて」

控え室を後にした。残された二人はその背中を応援の言葉と共に見送つたのだった。

麗日が出ていった丁度その頃、真っ向勝負の殴り合い対決をしていた個性ダダ被り組は

『個性ダダ被り組その2!!鉄哲VS切島 真っ向勝負の殴り合い!!制したのは』

「両者ダウン!!!引き分け!!!」

実力もほぼ同じだったため両者ダウンの引き分けという結果に落ち着き、決着は回復後に簡単な勝負で付けることとなったのだった。

『さあて！いよいよ一回戦最後の一組！中学からちよつとした有名人！！ヒーロー科、爆豪勝己！！対バーサス・・・俺こっち応援したい。ヒーロー科、麗日お茶子！！』

実況であるプレゼントマイクの公私混同した紹介があり、向かい合う二人。

「おい麗日、クソデクから対策は貰えたか？」

唐突な爆豪の問いに麗日は首を横に振る。

「そうか……全力で来い」

爆豪はその返答を見て顔をより一層引き締める。

「そう言えば緑谷君、先程言ってた対策とは何だったんだい？」

「本当にたいしたことじゃないよ。…かつちゃんは強い。みてから反応できる反射神経を持つてるかつちゃんの本気の近接戦はほとんど隙無しで、更に個性は動くほど強力になってく。空中移動も持つてるけど……初日の屋内戦闘で無重力の状態だとバランスが取れていなかった」

「つてことはつまり、浮かしさえすれば主導権を握る事ができるという事か」

そこまで言われて飯田も気づく。その上で出久と顔を見合わせてから麗日へと顔を

向ける。丁度マイクがスタートの合図を出し、試合が始まった。

開始直後姿勢を低くして爆豪へと全速力でかけていく麗日。そんな麗日に対して爆豪は回避では無く迎撃を選び構える。

「(右!……ここを避けて)ぶわっ」

麗日は爆破を避けようと集中するが避けきれず爆破をモロに受けてしまう。怯んだ麗日に爆豪は近づき爆破を仕掛けようとするも

(呸、後ろか)

『上着を浮かせて這わせたのかあ。よー咄嗟に出来たな!』

爆煙の中見えた体操服に人の気配を感じなかつたため、背後に回る麗日に気づき地面を削るように爆破し、麗日を吹き飛ばす。

「麗日さん。頑張って」

麗日が体制を立てる間も無く、爆豪の爆破が麗日を捉える。麗日は何とか吹き飛ばされないように体制を維持するも休むまもなく爆破をされ後方へと吹き飛ばされる。それでも立ち上がる麗日。それから果敢に三、四度と突撃するもすべて後手に回っている。それから六度目の突撃の後

「ッ、後ろ!?!しまっ」

体制を崩した麗日が立ち上がる前にいつの間にか背後へと回っていた爆豪の手刀が

その首を捉え

「……………わりいな。お前の策油断ならなかった」

麗日の意識を刈り取った。

「んだよ、あれ。そんなんあるなら最初からやれよ!!」

「女の子いたぶつて遊んでんじゃねーぞ!!」

麗日の意識が落ちたのを見て会場から凄まじいブーイングが入るが、

「ヒーローの質が落ちてる、ね」

「馬鹿だね。あいつら」

麗日の意識が落ちたと同時に麗日が空中に必死に貯めていた石が

『ここにきて流星群!!?』

流星群のように降り注ぐ。それを爆豪は麗日が吹き飛ばないように片手で抱えてか

ら、反動のでかい大技を片手でぶつばなし全てを撃破する。会場が沈黙し、麗日を抱え

たまま呼吸を整える爆豪にどこからかマイクが飛んできて爆豪はそれを受け取る。

『女の子相手に……………か。だからテメエらはダメなんだよ! テメエら、敵が女や無個性

でも油断すんのか? 全力を出さねえのか? ……………だつたらもうこれ以上試合を見る必

要はねえ! 帰って転職サイトでも見てやがれ!!』

『爆豪の言う通りだ。ここまで上がってきた相手の力を認めてるからこそ警戒してんだ

ろ。本気で勝とうとしてるからこそ手加減も油断も出来ねえんだろうが」

爆豪とイレイザーの言葉に会場全体の空気が沈む。そんな中爆豪はミッドナイトナイトに抱えていた麗日をリカバリーガールの元へと送るように頼んで、掛け声のタイミングを完全に逃したミッドナイトはここで爆豪の勝利宣言をしてこの戦いは爆豪の勝利で幕を閉じた。

その後行われた腕相撲にて引き分けだった切島、鉄哲が鉄哲の鉄分切れでスティールが切れたところを切島が攻め、切島の勝利で一回戦の勝者が決定したのだった。

第七試合 勝者切島鋭児郎

第八試合 勝者爆豪勝己

「轟君、話って何?」

切島と鉄哲が腕相撲を開始した頃、出久は轟に呼び出されていた。轟は構える出久に「お前らオールマイイトに目かけられてんだろ」

「否定はしないよ」

答えにくい質問をする。出久は否定はせず轟の返答を静かに待つ。

「……………個性婚。知ってるよな?」

個性婚。超常が起きてから問題になった、自分の個性を強化するために配偶者を選び子供を作る倫理観を無視した発想。それをもちろん知っている出久は何となくだが轟が言わんとしてることを察する。

「おまえの左側が醜いと母は俺に煮え湯を浴びせた」

が、想像以上のもので出久は俺を思わずゾツとする。

「つまるところ、俺がお前らに突つかかったのは見返すためだ。オールマイトに目かけられてるお前らを倒して……いや、クソ親父の個性を使わず一番になることで奴を完全否定する」

「……………」

憎しみ混じりの覚悟を決めた眼。その様子から出久は轟の覚悟を肌で感じると同時に言いしれないものを胸の奥に抱え込む。

「時間取らせたな」

「轟君……………僕からもひとつ、僕は師匠に恵まれた。師匠だけじゃない。今の僕はいろんな人に助けられたからここに……………だから僕も君に勝つ」

それでも出久は轟に対し覚悟を決めて宣戦布告を行ったのだった。

同時刻

念の為リカバリーガールの元で治療を受けていた爆豪は既にある程度回復していた麗日に対して

「……………麗日。お前は強かった」

それだけ言い残して出張保健室を後にする。

「なんや……………それ」

麗日はその言葉に思わず苦笑し、いいタイミングで携帯が鳴り出す。麗日リカバリーガールに目を合わせリカバリーガールの了承を得てから電話に出る。

「父ちゃん」

その後ヒーローを目指す一人の少女が流した涙を知るものはリカバリーガールしかない。

幕間 最初の脱落者

「これが、さつき言ってた妹を助ける方法なのか？」

平日の昼下がり、テレビの中継が雄英高校の体育祭を取り上げている中、そんな明るさとは無縁の路地裏でスカジャンを着た若い不良風の青年が黒い革ジャンに黒のジーパンを着た青年がバイクに座りながら会話をしていた。

「そうだよ。さつきも言ったけど……その為には俺を含めた連中を倒さない」と

「やってやる。妹助ける為なら例えあんただって倒してやる」

革ジャンの青年はスカジャンの青年にデッキを提示し、スカジャンの青年はそれを受けとると。

「……………？ 羚羊さん、これが？」

「そうだよ石橋。っと丁度鏡の中で戦ってる奴がいるし、漁夫の利つてのもあるから行つてきなよ」

そんな中丁度いいタイミングで耳鳴りがして、石橋と呼ばれたスカジャンの青年が鏡を見ると、そこにはコウモリのような形容をしたライダーが見たこともない化物と戦っていた。

「どうした？行かないのか？」

「やるさ、やってやる!!」

その事態に震える石橋を羚羊と呼ばれた自分は試すように煽る。それに呼応するように石橋はデッキをビルの窓にかざし

「変身!」

黄色き蟹の戦士仮面ライダーシザーズへと姿を変え戦いへと参戦するのだった。

「さて、情報収集頼むよ？」

それを見届けてから羚羊は先程の事を思い出す。

「さて、あの二人はまだ置いておいて、『駿』との合流まで時間あるし、せっかくだから保須で見つけたライダーでもどっついておきますか」

バトルロワイヤル開始宣言の後、羚羊は一人保須で一度見かけた事のあるライダーの情報を探ろうと保須市へと出向いていた。

「とはいえどうしようか。このデッキもう持つてる意味もないしなあ」

その手に握られているのは、自身が使っているインペラーを除いた二つのデッキ。一つは以前出久と交えた事のあるものでもう一つはまだ何も描かれていないデッキある。

羚羊自身インペラー以外のデツキの入手経路はイマイチよく分かってないがそんな事は彼にとつてどうでもいい事だった。

「ん、ありやあ……………」

「そんな！じゃあ妹はもう……………」

そんな溢れたデツキをどうしようかと迷っていたところ、医師のような男にすがりついている青年を見つけ、

「君の妹悪いの？」

「……………誰だ？あんたには関係ないだろ？」

丁度いいやと思いをかけた。当然の如く相手は警戒してきたのだが、

「君の願いが叶うかもしれない方法を知っている者」

「……………!!？」

願いのバトルのことを説明し危険は伴うが見返りも大きいと相手を出来るだけ事実を交えて説明する。青年は懐疑的ながら話を聞いているたびに

「別に殺す必要は無い。君は勝ち残りさえすればいいんだ。それにモンスターを放置しておくといずれ君の妹もただじゃすまないかもしれないよ？」

「それはだめだ!!あいつは、死ぬべき人間じゃない!!」

「だったら、どうする？」

「お前の話は嘘が多い気がする。でもだけど……それなら……妹は助かるかもしれない、だから」

それしか道はない考えるようになり羚羊の巻いた餌に食いついたのだった。

「ま、契約はしといたし文句言われる筋合いはないな」

とまあ利用されている事に気づかない青年を見てる哀れと思いつつも

「つても俺の所持してる三つのデツキのうち一個をあげたんだから出来るだけ情報引き出してくれよ。使い捨ての駒？」

出来るだけ情報引き出してあわよくば倒すかあるいは共倒れてくれと思いつつながら
「変身」

自分の愛用してるデツキを取り出し鏡の中へと入っていったのだった。

羚羊の思惑を知らない石橋は一人丁度モンスターを倒したところである青いコウモリのような姿をしたライダーを見て

「やる。あいつを助けるためだ」

今一度覚悟を決めて、デッキからカードを取り出し片腕に蟹の爪を型どった形状の武器を装備して。

「おりゃあ!!」

「あ?」

鏡から帰ろうとしていたコウモリのライダーに切りかかる。コウモリのライダーは突然の奇襲にも関わらず反射的に右に装備していたレイピアのような武器でそれを弾く。

「悪いが俺の願いのために倒されてもらう!!」

「ハア……………」

召喚機と蟹の爪を交互に絶え間なく切りかかるシザース。一見優勢に攻めているように見えるそれをコウモリのライダーはしっかりとレイピアで受け流しつつ、何も持っていない手でカードを取り出し

『NASTY VENT』

とあるカードをレイピアの開く部分にセットし塚の部分を押しすと、機械音と共に周囲に超音波のような音が鳴り響く。

「つあ?! ああッ」

シザースは頭をわるような音に堪らず両手で耳を抑えてしまう。そんな隙をコウモ

リの事ライダーが許すはずもなく、レイピアで斬りかかった後全力で蹴り飛ばし、

『FINAL VENT』

追い打ちをかけるようにウイングランサーを構えて敵に突撃し、契約モンスターであるコウモリをウイングウオールとして背中に装備してジャンプ。空中でウイングランサーを軸にウイングウオールで体を包み黒い錐のような姿に変えて激しくドリル回転しながらシザースを襲う。シザースは超音波の影響が残りつつも何とか咄嗟にカードを引き抜き同じようにファイルベントを差し込むも、契約モンスターを呼び出したとほぼ同時に

「ッ……………か……………あ……………は……………」

その体を契約モンスターごとコウモリのライダーに貫かれ変身が解除されてしまう。石橋は薄れゆく意識の中で、かつての光景を思い出す。

それはまだ妹が元気だった頃。

父が早くに他界し、母も敵の犯罪に巻き込まれて他界した石橋は

『お兄ちゃん、見てみて』

『ん？どうした、うお』

『お兄ちゃんとお揃い！』

『……………ありがとう』

個性もさる事ながら誰にでも優しい妹を絶対守ると心に決め日々を過ごしていた。辛くも幸せな日々、妹が成人するまでは少なくとも続くと思っていた日常。だけど終わりは唐突にやってきた。

「おい!!? 千枝!! 大丈夫か!!?」

「大……………丈夫」

「んな訳あるか!! 病院行くぞ!!」

突然苦しみ出した妹にただならぬものを感じた石橋は妹を担いで、どんなに急いで走っても担いだ者に衝撃が渡らないという個性を用いて走り、

「お……………兄……………ちゃん……………」

「大丈夫、助けるからお前は、大丈夫」

「迷惑……………けて……………めん……………ありがとう……………とう」

病院に駆け込んだ。だがその時には既に石橋の妹は意識を失っており、
「それじゃ妹は助からないって言うんですか!？」

妹は未知の病気に犯されており、どんな技術、どんな個性を用いても治す事が出来ず、それどころか最初に意識を失ったその日から二度とその瞳を開けることは無かった。

石橋にとって妹を助ける事は何よりも成しえなきや行けないことだった。だからこそ

「だ……は……妹………を………」

それでもと震える手を必死に伸ばすが

「行け」

抵抗虚しく、力尽き腕が地面につく。そしてその肉体はライダーの指示を受けたコウモリのモンスターに食べられたのだった。

「…ハア……私欲のために戦うライダーも……ハア……肅清対象だア」

コウモリのライダーはそれを見届けてからそんな言葉を零した後自身の限界を示す現象が起きたので、そのまま近くの鏡から出ていったのだった。

それを遠くから配下のモンスターと眺めていたインペラーは

「おつかねえな。…ヒーロー殺し……仮面ライダーナイトってどこか」

当初の目的通りに情報収集を終えて

「シザース。ご苦勞様。ま、安心しとき、君の妹が続けて治療が受けられるようちやんとしとくからさ。最も仮に目覚めた時君がいないと知った彼女がどう思うかは知らないけど、ね」

既に脱落した石橋にそんな言葉を送ってミラーワールドから戻って行った後
「もしもし黒霧？見つけたよヒーロー殺し」

自身の所属する組織へと連絡を入れたのだった。

二人が現実に戻った後、石橋のいた場所に落ちていたデッキをフードの男が拾い上げ、力を込めて砕き

「仮面ライダーシザース 死亡

残るライダーは ??人」

誰もいないその場所でそんな事を呟いたのだった。

仮面ライダーシザース

石橋 蓮二 死亡

残るライダー ?人